右等之御時節ニ付暫而在御警衛仕候様被遊度　思召候段御沙汰之趣越中守弟長岡良之助に野宮宰相中將様より去十一日夜御達御座候段京都表より申越候此段御屆申上候以上

細川越中守家來　清田新兵衛

十二月廿五日

十二月廿六日長岡護美因州宇和島兩藩主と共に近衛關白に謁し幕府前非を改め朝旨奉承の意あり宜く速に其實を擧行せしめ外藩は妄に喙を容れす專ら各自藩屏の任に當らしむるに如かさる旨を進言す

〔良之助様御上京中日記〕（文久二年十一月廿六同三年二月迄）

十二月廿六日雨

一今朝五半時之供揃ニ而近衛關白様ニ御出（因州様御同道也伊達伊豫守様も御一同之由）夜五時前　御歸館　御湯漬等被遊近候由

今日之御出一昨日因州様ニ被爲入御直約被爲在候由左候而近衛様ニ者因州様ゟ被仰入御支無之候得者別段御通路被成間敷今朝御誘引可被成旨茂御約定ニ相成居候段昨夕承付候付關白様ニ之御出御突懸ニ而者相成申間敷哉と參談相決今朝御出前御使者進因州様御同道今日御參殿之儀昨日因州様より御懸合御領掌被成候付后刻可被成御參殿段程能申陳事

〔投筆餘編〕（或人日藏樞要鈔出之事）

十二月廿六日朝飯後早々因幡君公館へ御來駕良之助之君御同道殿下へ御參謁之事

〔子爵長岡家文書〕

謹て奉言上候先年外夷渡來以後天下の事體日々逡巡姑息に陷り公武の御間さへ幕吏奸曲の爲めに御隔絶に相成候次第恐入奉存候然る處尚五月近畿變動出來仕候折柄島津三郎松平長門守鎮靜の命を蒙り早々取鎮め候段恐悦至極奉存候乍去近年來幕吏奸曲暴虐の處遂所謂神怒人怨と申勢に御座候へは於　朝廷も最早關東御見放し可被遊儀と奉恐察候處格別の御仁慈を以て幕府御同護被爲在　勅使被指下　叡慮御熟論に相成且一橋中納言後見春嶽總裁被仰付其邊早々御請有之先つ公武御合體に被爲赴候へ共積久因循の後速に遵奉の實被行兼　叡慮貫徹不仕依之再　勅使御指下猶登攘の決を被爲取候段傳承仕恐惶至極奉存候就ては萬一遵奉の道に於て幕吏取惑候儀も御座候へは死力を以て說得仕候心得に御座候得共既に松平春嶽松平容堂薩長兩藩共一方ならす周旋御座候に付一同決議遵奉の事實御請有之速に　叡慮貫徹仕り共趣　勅答相成恐悦の至奉存候此頃東武諸有司の情態熟々愚察仕候處以前とは相違いたし大樹誠實の意を請け　叡慮感戴一同奉行の志實心に出候樣子に相見候左候は公武は眞の御合體に相違無御座且後見總裁及諸有司不日追々上京仕事實相立候段實以て天下の大幸に御座候全體無議の侯伯重き大政に預り候儀は御大法にも相觸れ不容易儀に御座候へ共近來の事變に就ては皇國の存亡に關係仕候儀故何れも傍觀座視仕兼候段臣子の分に於て不忍處に御座候公武御間に立周旋仕候儀も不得已勢に御座候猶此上にも御合體の道不相立候へは各事件貫徹仕候迄は微忠を盡し可申覺悟にて御座候前文奉申上候通り幕府誠實遵奉の志相立候へは　朝廷の思食を以て赤心幕府に責を御歸し被遊尙幕府よりも赤心を以て奉申上一意水魚の御運に相成候へは萬々歲まて頌太平候儀と奉存候就ては是迄周旋仕候國々も一同手を歃め御指揮を奉仰各藩屏の本職に立歸り候事眞實の御合體と奉存候然る處外臣共此餘大樹上洛迄とか又後見總裁始め上京仕候迄滯在天下の結局相付候上歸國可仕樣にも可被仰出哉にも薄々奉伺甚以て恐惶不自安奉存候最早　勅使復命松平長門守始め夫々御合體の事實奉言上候上は後見總裁始め上京仕候節夫々被仰付彼等よりも無腹臟奉申上萬事御決定に相成數年の御隔絶も一時に氷釋仕天下再興の盛典に復し候樣奉祈候然る處其職にも無之外臣共矢張　叡慮を奉し滯京共間に周旋仕候ては宿昔の御疑念も不被爲晴姿にも相成幕府心中に於ても共疑念仕候譯柄に付却て眞實の御合體に

も關係仕候半哉此邊深く心配仕候間奉言上候且近日の事天下の頽運を挽回仕候は全く三藩の力に御座候へは此節に至り候て事々間敢結局見届候迄滯京仕候抔申儀は甚以て恐惶の次第就ては三藩へは被稱其功諸藩へは一同本職專務に心掛け安叡慮防禦の任に勝へ候樣被下　勅命各兼て蒙命居候請場所の守衛相整候樣被仰出御政の儀は公武御熟談の上被爲行近畿御守衛の儀は如何程にも嚴備相成候樣大樹へ御委任被爲在候樣奉願上候此上萬一諸有司上京の決定　叡慮に齟齬等の儀も御座候得は國事打棄置速に上京決死盡力仕候て奉　勅命候心得に御座候誠惶稽首謹而呈執事

十二月廿六日

松平相模守
伊達伊豫守
細川越中守名代
長岡良之助

〔鶴鳴餘韻宗城公御事蹟〕

松平相樣守(鳥取侯)長岡良之助(熊本侯代)と連署の建白書を奉呈の際近衛公より目下朝廷の内部には御親兵を募りて朝廷自衛の道を立てんとの議論あるが夫れは如何なものゝふらんと尋ねられしが元來公武合體とか何とか言ひゝながら江戸と京都の間には動もすれば間違ひの起らんとする今日申さば人心未だ一に歸せざる今日若し朝廷にして御親兵を募らせらるゝふと公言せられんか夫こそ益々人心をして動搖せしむる基となり折角公武融和の端を開きたるを杜絶し破潰するものゝふりとて宗城公は斷然不同意を稱へられたり近衛公も御同意ありしか何分議奏傳奏が小やかましく責るのに閉口する故彼等が只今參殿し居るこそ幸ひゝれ足下等より十分談して貰ひたしと申さる公等は再三之を辭したれども達ての御依頼ゝればさらば所信を申試みんとて議奏等の來るを待つうち近衛公參内の時迫りしかは其儘邸を退出せられぬ(本文の括弧原書の儘也)

十二月廿七日長岡護美松平淡路守を訪ふ

〔良之助樣御上京中日記〕(文久二年十一月～同三年二月迄)

十二月廿七日

一今四時之御供揃ニ而松平淡路守樣ニ爲御滯座御出夜五時過被成御歸館候事

淡路守樣一昨日因州樣ニ御出之節伊達伊豫守樣御出之處今日四時之御供揃ニ而淡路守樣御旅宿ニ御出府良之助樣ニ茂御手明ニ被爲在候ハヽ被爲入候樣昨日御案内御使者を以被仰進候

一今日者松平相模守樣ニ茂御出之由

十二月廿八日幕府は將軍上洛の順路及び軍艦座乘の旨趣を達す

〔御内勅書拔、(御國江戸大坂)返達御用狀扣〕

板倉因防守樣御渡(廿八日)
大　目　付ニ

御軍艦ニ而來二月御上洛被遊候付一旦大阪御城ニ御着座夫より淀川通御乘船ニ而伏見ニ御泊翌日二條御城ニ被爲入候旨被仰出候

右之趣萬石以上以下並御供等之面々ニ不洩樣可被達候

十二月

大　目　付ニ

近來御國人民品々御用途相勤宿驛疲弊不少趣被聞召就而ハ來二月御上洛之節陸路御旅行ニ而者一同之被弊茂甚敷と深く御憂念被遊候ニ付御軍艦ニ而御上洛被遊候旨被仰出候依而者陸路通行御供之面々等茂精々冗費相省候樣可致旨被仰

出候右思召之程銘々厚相心得可申候
右之趣萬石以上以下並御供等之面々ニ不洩様可被達候
十一月

十二月廿八日長岡護美松平伊豫守松平淡路守等同道近衛關白に謁す

〔良之助様御上京中日記〕（文久二年十一月ゟ同三年二月迄）

十二月廿八日晴

一今四半時早々御供揃ニ而近衛様ニ御出淡路守様伊豫守様因州様も御出賊尤御銘々外ニ振動向も有之夫ゟ御出賊　良之助様茂今朝六半時ニ而三條様ニ御出之筈之處昨夜遅御差支御斷申來　夜四時過比御歸館

近衛様へ御出之儀淡路守様ゟ一應御懸合ニ相成候賊昨日彼方御留守居ゟ近衛様ニ廿八日御出之儀御差支ハ無之候へ共御刻限ハ明朝ゟ而ハ不被相分候付右御刻限之儀者廿八日朝直ニ及御懸合候様通達有之候依之今朝櫻田覺助相勤候處午刻御參殿被成候様との事尤近衛様ゟ青地富之紙面ニ而午刻御參殿被爲在候様との儀も行違ニ到來候

一一條様ニ御内話筋之儀有之近衛様ニ御出前御出可被成處共御問合不爲在御歸懸と思召候へ共近衛様ニ而御手間も可被爲取明日ハ無御據御兼約ニ而御來客彼是ニ付年明一條様御差支無之節御出可被成御家來を以被仰上候御事ニ無之候間右等之趣今日青地源右衛門を以程能申述候様被仰付候左候而學習院ゟ御達よつて頃日被差出候御存意も御書付爲も被進候事

十二月廿八日宮部鼎藏佐々淳次郎山田十郎攝海及ひ京坂附近防禦に關する視察復命書を提出す

〔採襍錄〕

宮部鼎藏增美佐々淳次郎直矢山田十郎信道攝海日記

壬戌十二月十七日晴本月十二日學習院に於て議奏衆より我藩と列國十一藩に命を下されしは異賊攝海に闖入せんも難圖由近日頻に風聞せり然れは海邊並に内地の警備嚴整なるや否や各藩の見込を言上すへきとの事なり依て伏見古城邊の形勢淀川淀城八幡山崎近傍の要害安治川木津川神崎川等の注海處岸和田住吉堺兵庫尼ヶ崎の海灣等地形探索の命あり時已に未の上刻なり官府に稟白の事なと彼是の事件に手間を取て夜戌の下刻南禪寺を出立先書肆に行て畿内南邊の地圖及ひ測量器磁石等の物品を購んとて三條四條の街頭に行しに市肆皆寢たり三條街の逆旅に投宿す

十八日晴早朝街頭に出て用物を購京南左邊山下の衝路を見んとて大佛三十三間堂の前を過二寺境内廣地勢稍高し兵を屯するにたる東福寺門前を南行す此寺尾州侯の所獻と云伏見稲荷社の祠官羽倉伯耆守なる者あり曾て其名を聞行て古城の形勢を問んとせしに道を行過て不逢古城二の丸の下三軒屋善兵衛と云者あり城山の嚮導を能すと聞彼家に行て尋しに善兵衛伏見奉行の下吏に從て山上に役使す依て登臨を果さす故に竊に間道より二の丸跡に登り地勢を略觀するに京師を中央にして東は比叡の山脉南走し降て此地に止り北は鞍馬愛宕の連山亦連綴南走して米上山天王山に至り此地を距ること二里相對して稍窄まり西走して攝丹の山となる

桓武天皇の詔に山背山河襟帶自然成城夫改山背國曰山城國と實に天然の地勢一國金城の形をなせり而て此地と天王山の間本城南面の大門關にして守衛最嚴ならすんは有へからす昔時豐太閤此に城を築て王室を翼戴せられしも地勢大に所を得たりと謂へし唯今日最高處に登り極目形勢を不盡を恨み他日の再探を待のみ下りて宇治川の西堤を南行す左は大河にして右は沼なり沼幅員廣處は十町以上なるべし一里にして淀の小橋を渡り稲葉侯の城邊を一觀す城は宇治木津二大河の落合に據て險とす防河の一藩屏たるべし大橋の上を舟渡し河を右にし下ること一里至八幡謁石清水神社々は正南面高陽の地なり東南遠眺するに指掌了々たり薄暮山下に投宿す

十九日晴早朝神厩を過八幡山を左にして北に匝ること三四丁橋本に至る此地北山崎天王山と隔河相對し山城攝津の咽喉要扼の地なり故に近年因州侯に命せられ守を備設る里の入口に番所あり里の南邊に陣屋あり杭木に松平因幡守拜

領陣屋地と記せり營後に山あり登臨するに東北の間は京師伏見の地方北西の間は天王山左右の連山西南淀河下流の形勢一目瞭然の地なり卽ち方位を考へ遠近を量り概略を圖し畢りて淀河を渡る橋本の渡と云ふ川幅百間餘川を離るゝこと四町許にして離宮八幡の社山下に在山を弓手にして周る事四丁餘にして天王山の一の華表あり坂路屈曲大に險なり上ること四町二の華表あり松田與左衛門戰死の處と云又上ること四町午頭天王の祠に至る祠守の老僧に逢僧茶を煮て明智合戰の事を談す俚談の中亦可聞ものあり祠上に明智陣屋跡と云傳る平坦の地ありと云行て觀又高岡に上る前に橋本の山上より望みし地方は固より目中に湊合し加之山城大和河内和泉紀伊の諸山遠近連錦し八幡の山全形を眼下に呈露す又方位遠近を目擊し略圖をしたゝむ豐太閤明智光秀を一戰に討亡されしは實に天祐け人與するの義兵なれは未戰して勝算顯然たることなから此山の爭地を得て如何にも無造作に勝を得られしは固より論なし今や戎虜の警戒嚴にせすんはあるへからさる時なれは前に謂る如く伏城と相對して南面の大門關にして攝州より北上する兵は必此間に湊合すへし然るに其兵や坂城の大藩鎭を壓倒せされは來らす若し來らは鋒先太た銳ならんたとへ數萬の大軍勢ひに乘して突入すと雖此の關門は寸兵も越しめす是非壓し盡さすんは有へからさる樞要無二の地なれは必勝の籌策預め不可不議定也岡上より未の方にあたり二十町許に卿有山勢斗出の地にて視察せすんはあるへからすとて山を下り寶寺の前を過南行して櫻井村に至る路傍楠樹の下に楠大明神の小祠あり盥漱拜謁す村外路側に大さ二圍半强の老松あり子別れの松と云傳ふ懷古の情彷彿不忍去行こと半里許にして山勢斗出の地に至る神南村と云田夫を傭して嚮導とし峻小坂を上ること三丁餘山頂に至る亦四望濶然候望燈燈を可置地なり亦方位を圖す又南行淀河に沿て下る半里にして日暮牛里にして大塚に至り舟渡す川幅二百八十間至平潟驛自驛至大坂五里河の兩傍皆平衍の地にして守防の要地に非す可觀ものなし故に夜半舟を傭して河を下る天明前大坂三軒屋に到着す

廿日晴先浪華城を見んとて天滿口より入追手前を過玉造口に至る此處に御城付與力高橋鐵藏と云人あり曾て其名を聞り因て過訪す鐵藏近日有故謝客其親佐次右衛門に逢近況の形勢を聞に一橋侯並に小笠原侯不日に登坂一橋侯は西本願寺に留宿せられ模樣に依て上京小笠原侯は直に上京との趣江戸より注進ありしと云又中川山長か製する大湊一覽と云ふ地圖を出し示す善圖なり探索に益あり依て山長へ就て圖を寬んとて紹介添書を乞卽辭去て城の後郭内より青屋口の刎橋前を通り北に匝り鳴野口京橋口追手先迄一周歷觀す高壘深池の制法則森然固より間然なし城地を大觀するに北は京師を擁護し長く淀の大河を帶ひ東西に河内和泉紀伊攝津の山河をわきはさみ南湊路阿波を門關とし中に大江を抱へ船舶輻湊の一都會所謂四通八達の地なり大藩鎭を置四方に號令指揮すへき要區なり周防町中川山長か家に至り大湊一覽圖を寬む山長往年紀州加田浦苦ケ島ニ遊模寫せし畫を出し目擊の地勢を談す亦可聞ものあり又街頭に出數書鋪に就て近畿諸國の地圖を購る安治川に沿下る安治川四丁目に因州の陣屋あり又下りて天保山に至り川口の形勢を一覽し方位を圖す近十年淩河の事ありと雖淤沙たまりて船舶の出入に便ならすと云木津川筋は是より深しと云山下に因州の兵器置所あり大體攝泉の沿海總て平沙の遠淺にして天保山の沖ハ二十丁の内外ならてハ異賊の大艦を寄ること不能併し賊上陸せんと欲せは必すバッテイラを可用なれハ高岸礁壁の險なきに依て沿海數十里の地皆賊衝ならさるハなし故に嚴臺を設くるの地にあらす賊小舟を用ひハ我運轉輕便の小礮を以て擊碎すへし必竟賊勢に依て汀渚の際に利を爭ふ事ハ下策の極にて足利尊氏西上の時官軍兵庫の汀にて防戰利を失ひし覆轍に倣ふへからす又防海の術は防河の法に異ならす防河の法孫子既に千古不易の規則を揭示して曰く欲戰者無附水而迎客視生處高と是に反する則ハ古昔宇治勢多等の戰一度も勝を得さりし如くならん殷鑒昭々たり萬一不虞の事あらハ能主客の勢を較量し地形の利を推窮し陰陽の宜を時制し我奇正を整正し彼か虛實を洞察し機變の妙用を施すへし守邊の要務潛心考究せすんハ有へからす日已に暮山下の賣茶店に投宿波を枕にして臥す

廿一日晴堤上の曉霜を蹈て邊海を一觀し尻無川を越南行するに天王寺の大伽藍二十丁許弓手に屹然たり卽木津川を渡り今宮村を過行て登臨す此地阪城の正午に當り相距る事一里許城より直南に岸あり住吉の亘る古歌に所謂住吉の岸是なり東西は地勢漸く下りて城後を廻る寺は岸上高早に在加之五重伽藍は高く聳たれハ候望の爲に設けたるが如し東南

には生駒くらかり十三峠志貴ふた子葛城金剛の諸嶺近くは三四里遠くは七八里に連錦し内に河内和泉の數郡を包む山勢南に極れハ則紀伊の加田岬也岬前に地の島吉か島沖の島海中に並列す乃攝海の咽喉要扼の地也海備を嚴にせんと欲せは先此海門を固守すべし若不能則ハ賊の要衝ハ岸和田以北堺の左右なるへし故に此兩所最嚴備を設けすんハ有へからす若不能は賊天保山左右の地より市街を亂妨放火するの勢を張反りて此寺邊高阜の地より阪城玉造口に押寄んも計へからす又阪城は押への大軍を置て河内の地を山に添長く驅て守治の地方より伏見の要地に突入せんも亦不可計故に阪城を根據として此地にハ智勇の良將大軍を將て出張せすして不叶の地なり古昔楠公父子屢出られ戰勝を得られしも地勢の利を得玉へは也又東照公の茶臼山の營も此傍に在古人兵を用る皆地利を大助とする所以亦可觀也塔を下り南行一里住吉社に至る境内海汀に臨む快闊の地松樹蓊鬱亦以て兵を屯すへし但し天王寺の備より先陣を出置へき地也又大和川の橋を越南行一里堺庄に至る亦大港也南北庄合て長さ廿四丁東西八丁許戸數三萬口數十二三萬港口の陂塘二つ長さ百餘間港内我大船を泊するに足る港柳川侯の礮臺あり五年前より港口を守ると云此港近傍高陽の地なし偶市外に丘阜あり行て觀んとす途にして

仁德帝の陵なる事を聞走り拜んとす日已に暮暗黑不可行遙拜して逆旅に歸り宿す

二十二日晴煖和可喜此日海上より攝州の海汀木津安治神崎川等注海の形勢を探觀し兵庫に赴かんと欲し拂曉舟を備して港口を出朝霞暖々の中に加田岬外の島々彷彿として並列す往て不觀を恨む亦再探を期す海汀を右にし概略一觀するに平沙遠淺前に謂るか如し舟行十里兵庫港に至る和田岬に出形勢を歷觀するに此地攝西斗出の處にして西上の船必寄るへく爭ふへきの地也尊氏か海陸の賊軍此地に湊合して官軍利を失ひし覆轍最不可不警戒也然て此近傍形勝の地なし唯北嶺の摩耶山白旗の古城のみ屈竟の要害なるへし道を湊川に取楠公の墓に謁し行こと二里寺内村に至る村より左折し山を登る事十八町半腹に至る日晩る計るに山頭に達すること不能と閻魔堂下茶店に宿す

廿三日晴晨起山に登る坂路羊腸崎嶇峻嶮特に苦し一丁毎に石を建第十一石に老松二株あり赤松圓心か旗懸の松と云傳て四望すへし又上ること七石山門を過觀音閣に至る境内南北五十間許東西十六七間廣狹不一境下に六坊を置山頭に水あり今以て城とすへし閣前より眺望するに淡路以内の海灣目前に瞰々として掌を指か如し若兵を用る事有らは此山を本城とし兵を上下に屯し山上より敵の擧動を見定め相圖約束を定め山谷の形勢ニ頓て聚散出沒の奇兵を用るに便なるへし而して兵庫の軍此城の指揮に隨て進退すへし指南針を出し方位を定め沿海の大概を模寫し又閣後より上る事四五丁絶巓に至り山後の間道を探る右下すれは有馬に至り左下すれは山田に至る山田は十三ヶ村有と云山奥の一郷なるよし前坂を下り閻魔堂より左折し八幡村を過住吉に出獨道也西宮を經武庫川を渡り尼陽驛にて日暮る茅舍に宿す自摩耶至昆陽行程五里半強

廿四日晴曉發稻川を渡り瀨川今在家を過直南に坂城あり此を距る事四里郡山芥川を經る先日天王山に登る山後の形勢未た盡さゝる所あり大閣道と云ふ山路有と聞謂ふに山中の間道にして昔時明智か先手此山を取敗たるを堀尾吉晴山路を推上り山を爭ひ勝し道筋ならん必探り知すんは有へからすと思ひ成合村に至り鷹導を備し山谷の間を登降ししやく谷淨土谷の二小村を經山中を行こと幾と三里峻坂嶮阻辛くして天王山の後大閣松の下に登る又明智陣所なるものを通大閣道を探るに尋ねあたらす俄に風雪甚しく日已に暮んとす不得已山崎驛客舍に下り宿す

廿五日晴前日風雪且日暮に及ひ山中の形勝を不探盡を以て又山に登り里人數輩に問に皆廣瀨村上より山を攀天王閣上に登る樵路也と云觀察するに果して是と見ゆ又明智陣跡に上り委く探索するに城廓の形顯然として存す廓内に水堀あり當時は急遽の際にて城を設るの猶豫なし定めて古城趾に屯せしものならん方今此古城を修築せは不費土木天授の要害を得つへし下りて客舍に歸り地圖及ひ日記を整頓す

廿六日雨又如前日未時客舍を出て道を西岡に取り東寺より京師に入三條街旅亭に立寄り又地圖及ひ日記をしたゝめ夜半に及ふ大體山崎伏見以内皆平坦の地にして京師亦高曠深溝の險あるにあらす崎伏の門關雖支時ハ近郊ハ戰勝の地に非す古戰字治勢多の軍敗れ東山を敵に與へて京師難保事屢々なるを以て見るべし故に崎伏の要地に於て無二の一戰に

必勝を定め京師を富岳の安きに置奉るべきなり

廿八日南禪寺に歸り日記及ひ地圖を棒け謹で復命し奉る右歴覽する所の山海要區之形勢大略如此綜合して考察するに之を人の南面にて坐するに譬ふ京師ハ首領也神氣之所鍾然して伏見の古城山崎の天王山は左右の手の如し首領不安則ハ神氣餒乏す之を安んするは双手の力に在り力充實する則は首領安し故に兩所の警備最も嚴重ならすんは有るへからさる也又大阪尼崎摩耶山泉州岸和田紀州加田岬の數所は五人の子一人の父を擁護するか如し山城は父の一身也數所ハ兄弟也兄弟各其業を勤めて其父初て安坐高枕すへし請試に布置連絡の大勢を云ん伏見山崎の地は攝河泉地を綜攬して門關咽喉の要地也守衛の法嚴備ならすんハ有へからす殊に伏見は京師護衛第一の要地豐太閤守護の堅城を築き自ら此に居　王室を翼戴せられし其深意可見可傚也山崎ハ街道の樞要にして必大諸侯をして固守せしむへし其浮伏見ニ亞く八幡山は山崎の如く大敵を受る地に非すと雖亦平瀉街道押への地也山崎の使命に供すへし又後ろに淀の城あり以て應援すへし必竟伏山兩藩の力相合して左右當角の勢始て成る勢成て八幡淀の働き自在にして彌縫羽翼の備全しと云へし如此なれは寸兵をして北上せしめす靡殲の功を奏せんされハ淀の河防も亦此中に在更に贅言せす大阪は前に形勢の大略を論せり即賊衝第一の要所又五子の長兄也四弟を號令指揮する任にして其浮尤重し天王寺住吉堺の庄安治木津川口の守防亦前に概論せり皆大阪の分支にして血脈相融り緩急相應すへし摩耶山は加田岬と相臨み前に兵庫港を抱き西邊を鎮屏するの要塞也主將其人に非んハ任し難し而して攝海守備を頒つ其全體を綜論するに大阪を中にして加田を左に し摩耶を右にし岸和田尼崎其中間を連絡彌縫し所謂兩翼の大陣形を張り常蛇の戰法を可用其用法のごときは候望の法あり烽燧の場あり飛船の急報驛遞の奔馳各其實を可盡以上の諸務修整完備し而後雙手の首領を扞護し五子の一父を守衛するの實初て立内地の警備嚴整也と可謂而して加田岬は攝海第一の賊衝南方一の城戸とも謂へき要湊なり大阪は二の城戸伏見山崎ハ三の城戸也一の城戸破るゝ時は二三動搖するは自然の勢也故に要湊の固め至極せすんハ有へからす海國の守備は軍艦なくして不可なるは智者を不待して明か也依て列藩の中軍艦所持の侯伯に命し此湊を守らしむへし兵庫海上も又之に準し軍艦を不置して不可也二湊の軍艦實用を得て海上の警備嚴整也と可謂以上内外の守備全き則ハ一旦不虞の變ありと云とも何そ恐るゝに足らん雖然守備は形也作戰は勢也勢を制するの法審に究めすんは有へからす其法如何曰近歳賊虜跋扈して萬民塗炭に陷らんとすかけまくもかしこき

聖主赫然として　宸怒し玉ひ戎虜を一掃して萬民を安定し玉ふ　叡慮ゝ御座まして今般破約攘夷の　勅命あり天下の民孰れか死を以て盡忠せさらんや萬一不虞の變に臨み兵勢を振興せんと欲せは恐多くも　鳳輦を伏見の要地に　臨幸御座し親王阪城へ御出駕軍務を統轄し玉はゝ六軍の氣殊更に奮張して戎虜を盡殲するの勢他日に百倍せむこと顯著明白也是勢を制するの法也古昔

聖帝逆賊を　親征し玉ひ王子夷戎を攘逐し玉ひし先蹤歴々とましませは仰願くは方今非常の世非常の英斷あらせられ日月の錦織を九重の外に進め玉ハゝ戎虜一掃之神績必然にして萬世德澤に浴し奉るへきなり

宮部増實
佐々直介　等謹識
山田信道

十二月廿九日松平淡路守長岡護美を來訪す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄〕良之助様御上京中日記〕

十二月廿九日　晴陰

一松平淡路守様今朝四半時之御供揃ニ而南禪寺御旅館に御出夕八半時比被成御歸館候事

一伊達伊豫守様ニ茂御出之筈之處御差支御斷ニ相成

十二月某日幕府は將軍上洛に際し陪從其他總て簡易質實を主とすへき旨を達す

〔御國江戸大坂返達御用狀扣、御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

水野和泉守樣御渡

大　目　付に

來二月御上洛ニ付御供並別上京之面々方今之時勢ニ候間不據寛永先蹤各疲弊無之樣精々省略質素之心得專要ニ候旨京都より　御沙汰有之候省略之儀ニ付而ハ兼而相達候次第も有之候得共猶又厚相心得彌質素を守り格別ニ省略御趣意行屆候樣可被心得候

右之趣萬石以上以下都而上京之面々に不洩樣可被達候

十一月

文久三癸亥年正月五日一橋慶喜上洛す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助樣御上京中日記〕

正月六日晴（中略）

一一橋中納言樣昨日　御京着付而今日元田參上伺動有之　御當地　御着付奉伺御機嫌越中守に申遣度參上仕候

細川越中守留守居

元田八右衛門

別紙

越中守弟長岡良之助儀舊臘上京仕せ候處暫滯在御警衛仕候樣ニ被仰付置候此段申上候

正月六日長岡護美三條實美を訪ふ

〔文久二年十一月ゟ同三年十一月迄良之助樣御上京中日記〕

（正月六日の條）

一今日八半時之御供揃ニ而七時過より三條中納言樣に御對面として　彼方御差支御一左右着之上御出門御出夜八時比被成御歸館候事

正月八日長岡護美三條實美に謁し尋て青蓮院宮家に伺候す

〔文久二年十一月ゟ同三年十一月迄良之助樣御上京中日記〕

正月八日

一今朝六半時之御供揃ニ而正親町三條樣に御逢御出追々御懸合有之今已刻比之內御差支無毎已刻過半比ハ御參內之由　夫ゟ青蓮院宮樣に御出御滯座宮樣昨日御懸合濟尤御饗應御進答之由　宮樣ゟハ周旋方被召連候樣尤名前を當朝迄に差廻候樣との事ニ付右馬允ゟ昨夕良之助樣に被奉伺候處屹ト周旋方も被仰付置候人体者無之先日拜謁之面々ハ有之候へ共御用多差支も有之事ニ付此節ハ右馬允ゟ下津久馬兩人之名前を差出置候方と被仰聞候由仍今朝共手數爲被取計有之候由

一左之通暮六時過申來候事

細川良之助殿

御留守居中

以手紙致啓上候然者一橋殿に御逗被成度儀も御座候ハ、御都合次第今日東本願寺旅館に御越ニ相成候ハ、御逢被申候ニ而可有御座候明日者傳奏衆に被相廻候間同日者差支候儀ニ御座候右之段可得御意如此御座候以上

正月八日

文久三年

御右筆組頭

堅田大五郎

正月八日尾張前大納言上洛す

〔文久二年十一月ゟ同三年十一月迄 良之助様御上京中日記〕（正月九日の條）

一尾張前大納言様昨日御上京近衛様河原御殿ニ御旅館ニ相成候付伺勤之儀及達八右衛門相勤候

正月九日六條有容長岡護美を來訪す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄 良之助様御上京中日記〕

正月九日晴後曇陰

一今日六條侍從様午刻之御出門ニ而御旅館ニ御出ニ相成暮六時比被成御歸館候事

〔仝書〕

一昨日六條侍從様御滯坐御出付而右之通御屆有之候方可然申談勤及達

但御他例聞合候得共御例無之因州様ニ而者御出有之候得之御屆之心得ニ候段返答來

御所司代

牧野備前守様ニ

長岡良之助旅館南禪寺ニ昨九日六條侍從殿入來暫滯座茂御座候間此段申上置候以上

正月十日

細川越中守内

青地源右衛門

正月九日長岡監物上京の途中書を裁して長岡護美の手簡に答ふ

〔文久二年より元治元年迄 自筆狀控〕

一昨七日之尊翰奉拜誦候處益御安泰被爲成御超歳恐悦奉存候太守様益御機嫌能段々被遊御旅行奉恐悦候然者御發駕之御模様逐一被遊御承知畢竟此砌御氣遣被爲在候處より御配慮被遊候御儀と乍恐奉深察候得共御國元之御都合無御據御譯も被爲在是等之儀之無程出京仕候上可奉申上候私儀無存騒蒙御内勅今度御供被仰付冥加至極難有仕合御座候得共不容易御用向不束之私差寄當惑之仕合奉存候出京之上者萬端奉蒙御教示涯分丈者勤上不申而者難相濟儀之勿論御座候得共前後見亘茂付兼幾重ニ茂奉繕御差圖を奉伏願候外他事無御座候將又青門様嗣白様議奏衆抔追々御面會被遊私事御噂茂御座候段を茂被仰下誠以難有仕合奉存上候右之御方々何茂無御度臘御相談被爲在且因州侯を初諸侯方之御面會御厚配之御筋茂可被爲在候得共諸事御都合御宜被爲在候旨難有奉存候諸侯方茂段々御入替一橋公御京着不日ニ春嶽様も御上京被爲在候處ニ而之一躰之御模様茂打替可申哉と奉恐察候先々御請申上度如是御座候恐惶謹言

正月十日　　長岡監物

良之助

猶以申上候未々餘寒退兼乍恐御自愛被遊候様奉願候不遠奉拜尊顔萬般可申上候以上

正月十一日顯光院鳳臺院兩夫人伏見に着す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄 良之助様御上京中日記〕

正月十一日晴

一顯光院様鳳臺院様益御機嫌能段々御旅行今日伏見御茶屋ニ御着被遊御止宿候事

一右御着ニ付　良之助様今朝六半時之御供揃ニ而御機嫌御伺として伏見御茶屋ニ被成御出夜五半時被成御歸館候事

正月十二日本藩主夫人着京して一條邸に入る

〔文久二年十一月より同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

正月十二日晴

一御前様益御機嫌能今朝大津驛五半時之御供揃蹴上御休ニ而直ニ一條様に被爲入候

一條様ゟ爲御迎御用人伊地知豐前介蹴上迄被差出候由青士雜色等御屋入有之青地御先乘等留局所掌也

正月十二日三條實美長岡護美を來訪す

〔文久二年十一月より同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

（正月十二日の條）

一三條中納言様今夕申刻比ゟ御出之御約定追々御懸合有之南禪寺御旅館に御出御滯座二汁五菜（略下）

〔仝　書〕

一今日御屆左之通櫻田覺助相勤

御所司代　牧野備前守様に

長岡良之助旅館南禪寺に昨十二日三條中納言殿入來暫滯座茂御坐候間此段申上置候以上

細川越中守内

青地源右衛門

正月十三日

正月十二日本藩政府は米壹萬五千俵禁裏に献納の件幕府の認可を得たる旨を在京長岡監物に報す

〔文久二年より京都江戸狀扣〕

以別紙申達候米臺萬五千俵今度　禁裏に御献納被遊度段公邊相伺茂相濟候付於大坂取計候様及達候此段爲可申達如是御座候以上

正月十二日

長岡監物殿

佐渡省

惣連名

正月十二日幕吏竹内下野守遣外使節としての功勞により祿三百石を增加せらる

〔尊攘錄皇武令〕

正月十二日

御座間

御勘定奉行

外國奉行兼帶

竹内下野守

佛蘭西英吉利國其外國々に使者として差遣各別骨折候ニ付三百石御加增

右於御前被仰付之

正月十三日長岡護美旅館を二條川東妙傳寺に移す

〔文久二年十一月より同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

正月十三日晴

一……今朝五半時之御供揃ニ而御前様爲御對顏一條様に御出候（略下）

一良之助様今日妙傳寺に御引移被仰出置候付一條様御歸方直ニ傳妙寺に被爲入（中略）
御同人様に（所司代牧野備前守）
細川越中守弟長岡良之助儀南禪寺に止宿罷在候處越中守儀近々同所に着仕候筈ニ付良之助儀者今十三日二條川東妙傳寺に引移申候此段申上置候以上

細川越中守内　青地源右衛門

正月十三日

〔文久二年戊十月良之助様御上京一件〕

一別啓良之助様御事是迄南禪寺に被成御旅宿候處同寺之儀者太守様御旅宿ニ被遊御治定候付今十三日五半時之御供揃ニ而一條様に御出御前様御對顔等被爲濟夫より直ニ妙傳寺に御引移夜四時前同寺に被成御着候此段申達候以上

正月十三日　清水縫殿殿（以下略）　藪右馬允

正月十四日長岡護美關白近衛忠熙に謁す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

正月十四日　小雨夕晴

一良之助様今日近衛様御出之由御供揃等不申來

一太守様御途中正條より御用狀今暮前屆來

來ル十七日伏見ゟ京御入之由

正月十五日幕府は來月廿六日を以て將軍海路上洛の途に就くべき旨を發表す

〔文久三年正月御國江戸大坂返達御用狀扣〕

正月十五日水野和泉守ゟ貞阿彌を以御城附共に一紙ニ而相渡候書付寫

御軍艦ニ而　御上洛被遊候付　御乘船御日限

二月廿六日

右之通被仰出候此段可申上候

正月十五日藩主慶順大坂の藩邸に着す

〔御國江戸京都返達御用狀扣〕

御途中より

正月十五日　正月廿二日着

宮村尾藤河口より

從大坂屋飛脚立候間致啓達候　太守様益御機嫌能段々御旅行今十五日正六時之御供揃ニ而西宮御發駕九時比大坂被遊御着奉恐悦候（下略）

〔文久二年戊十月良之助様御上京一件〕

太守様御途中大坂仕出之屋脚同十六日着左之通

一筆致啓達太守様益御機嫌能去ル五日藝州西條四日市驛に被遊御着候迄之御儀者同所ゟ申達候通御座候其後御日積之通段々御旅行今十五日大坂御屋敷被遊御着彌以御機嫌能御壓等御快被召上奉恐悦候明朝者六時之御供揃より御屋敷前ゟ

淀川御乗船伏見御屋敷ニ御着卽夕例之通御禮被遊御受明後十七日朝六半時之御供揃ニ而被遊御着京筈御座候顯光院様鳳臺院様益御機嫌能段々御旅行昨十四日攝州西宮驛ニおゐて被遊御相宿候付　太守様御方々様御本陣ニ被爲入御對顏被爲濟重疊奉恐悦候御前様益御機嫌能段々御旅行去ル十二日御出京一條様ニ被爲入彌以御機嫌能御膳等御快被召上候段御到來有之重疊奉恐悦候御方々様彌御平安被成御座目出度御儀奉存候當所ゟ雁飛脚立候付此段爲可申達如是御座候恐々謹言

正月十五日

尾藤健之助
田中八郎兵衛
宮村平馬
大木織部

藪右馬允殿

尙々右之趣松野亘殿ニ別段不申達候間御達方宜御取計可被下候以上

正月十五日長岡護美毛利定廣を訪ふ

〔良之助様御上京中日記〕（文久二年十一月ゟ同三年二月迄）

正月十五日　晴折々遠山雪降

一良之助様今暮後松平長門守様ニ御出右ニ付御用人奉札を以御希進候由御念入之御馳走有之御供中御徒士以上御吸物御酒等出候由翌日彼方様ゟ御挨拶御側役被來此方様ゟも大矢野文郎八勤候由

正月十五日本藩山田十郎京都より書を在國永島三平に贈り幕勢の振興薩長土の形勢及び三平身上周旋の狀況を報す

〔永島文書〕

新暦之御吉慶芽出度申納候御揃愈御堅固御超歳被成珍重ニ奉存候私儀も無異ニ加齡仕候間御放念可被下候扨出立之砌ゟ往來之中一寸奉伺候筈ニ御座候處案之外御供立ニ而心底ニ任セ不申其御不禮申上候勝藏君ゟ山鹿迄遠路御出張も有之忝々御序ニ宜敷奉願候近頃者御病氣如何御座候哉懸念不少候彌以御甘キトハ奉存候得共隨分御自愛爲天下祈申候然處當時天下之形勢長歎息ニ堪エ不申候幕府之日新之勢ニ而一橋尾州初春嶽公抔引續上京ニ而外者勢を以迫り奉り內ハ金錢を以すかし候趣ニ而金洞之雲上人如何御變化有之茂難計長土之二藩抔之粉骨碎身諸藩有志之徒ハ鬱悶ニ耐兼此儘ニ打過キ候ハヽ大暴發ゟ外有之間敷唯々血涙號哭茂及被不申候元建之御代ニ茂前狼後虎之復轍御座候處今日茂亦昔時ニ不異候薩禍心を抱キ近衛殿下　靑門様初奉り幕意を以攀閉し長土諸藩有志之國々及離間致し當時之勢ニ而者薩ゟ外之建議等之一切御用ひ無御座夫と申候茂長土之人物一偏之正直人迄ニ而左右之幾々候人材無之處ゟ如是鼻を越サゟ候と被思候何様僕ゟ見ニ而關東と角力合兼申候今少シ藩風之ゟ候而小過を免し材力之士茂擢キ不申而之千萬苦身候而も無益之事と奉存候僕若此論を吐キ候得ハ忽是を山子之様ニ申成候位ニ而只々子供角力ニ而歎息之かきりニ御座候老兄愚兄抔之躰ハ未タ無用ニ屬し申候併し老兄之儀ハ裏辻様に精々御賴申上置候處　靑門様應司殿下之中ニいつゟ卒心配可仕と大慨請合程ニ承引ニ相成候間其中ニ之模様も相分可申相分申候ハヽ急速御知セ可申上候宮部轟茂余程苦身仕候得共右之様子且ハ微力ニ而事之一寸茂之こひ不申誠ニ氣毒之儀ニ御座候何事茂及言上度儀之大野ニ咽合置候間贅言不仕右迄ニ而擱筆仕候巨細ハ是ゟ御聞可被下候右迄早略如是御座候恐々謹言

正月十五日　　山田十郎

永島歸山様

別啓仕候巻かけ兄及一寸尋申候處田中重次郎同道ニ而遠在被參居候由ニ而面會不仕甚殘念ニ奉存候いつゟ當時上候之

老兄御尋申上候ト奉察候

一奥様御初御本宅之奥様方ニ茂宜敷御傳奉願候勝藏君ニ之別段書狀差出候筈ニ候得共取紛屆兼候間是又宜田代ニ茂宜敷奉願候以上

正月十六日藩主慶順伏見に着す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄 良之助様御上京中日記〕

正月十六日　晴

一太守様今日伏見御着ニ付　良之助様四半時之御借揃ニ而同所ニ被成御出（堅例ニ懸ケ）被成御歸館候事

一右御出ニ付左之通御屆之儀及達候

傳奏御月番

坊城大納言様ニ

私兄越中守儀爲上京今十七日伏見屋敷着仕候付爲對面罷越候筈御坐候此段以使者御屆仕候

（中略）

一太守様今朝六時之御借揃ニ而大坂ゟ川御座舟被爲召夜九半時過伏見御着□□御茶屋へ被爲入

一伏見御着ニ付同所御奉行林肥後守様ニ御案内御使者御供之内相勤候

一同所　御發駕之御案内御同人様ニ牧田壽太郎相勤候

正月十七日藩主慶順長岡監物以下を隨へて着京し南禪寺の旅館に入る

〔文久二年十一月ゟ同二月迄 良之助様御上京中日記〕

正月十七日　朝少陰后晴

一太守様今朝伏見七半時之御供揃ニ而御發駕稲荷御小立ニ而四時比南禪寺御旅館ニ御着□時之御供揃ニ而御廻勤左之通

長岡監物茂被召連

坊城大納言様
中山大納言様
野宮宰相中將様
三條中納言様
近衛關白様
一條左大臣様

一條様近衛様　御口上書上

私儀今日御當地着仕候付致伺公候此段諸大夫中迄申達候

家老長岡監物茂召連申候

細川越中守

右之外御四家様ニハ

、、、致伺公候

右同斷

細川越中守

一條様ニ而被爲仰述候趣

私儀追々蒙　御内命誠以冥加之至難有仕合奉存御禮申上候且又弟良之助儀暫滯在御警衛被仰付家老長岡監物蒙御内沙汰候御禮茂申上候

〔文久三年正月
御國江戸大坂返達御用狀扣〕

二月十一日　松下吉田　清田吉弘　安田より　同十七日着　（一節）

別紙を以申達候　太守樣京都御着南禪寺に被遊御止宿候段御屆之儀被仰付越候通ニ付御案文取調奥御右筆組頭樋口喜左衛門殿に新兵衛罷出及御打合候處御存寄無之被差出候樣被御申聞候依之右御屆出御京着即日之御日付ニ仕御用番松平豐前守樣に去朔日御留守居代眞下梶之助持參差上候處被成御落手右寫差上申候

〔仝　書〕

二月朔日御用番松平豐前守樣に被遊御差出候御屆書寫　細川越中守

私儀今十七日京師着仕候依之洛東南禪寺に致止宿候此段御屆仕候以上

正月十七日　細川越中守

同
私家老長岡監物儀先代以來國忠盡力之趣兼而被聞召候付召連上京仕候樣　御内々御沙汰被爲在候段一條殿より傳達有之候付此節召連致上京候此段御聞置可被下候以上

正月十七日　細川越中守

正月十七日藩主慶順使を所司代邸に遣し豫め緒紳諸家往訪のことを通告せしむ

〔文久三年正月より
御記錄〕

（牧野京都所司代へ）

拙者儀蒙　御内勅候付此節致上京候付緣家一條殿其外近衛殿傳奏方議奏方に追々罷越可申候此段御屆以使者申達候

正月十七日細川若狹將軍上洛中非常の節幸橋門外に出兵すべきを命せらる

〔文久三年正月
御國江戸大坂返達御用狀扣〕

正月十七日御用番井上河内守樣より被成御渡候御書付寫　ツマニ　細川若狹守に　細川若狹守

御上洛御留守中非常等之節幸橋御門外に人數可被指出候委細之儀者松平對馬守酒井但馬守京極能登守長井五右衛門八木多三郎可被承合候

正月十八日田安大納言願に依り官位一等を降り隱居を命せらる

〔尊攘錄皇武合〕

正月十八日御沙汰之内　御使　水野和泉守　井上河内守　田安大納言殿

右御願之通御官位御一等御辭退御隱居被仰出御賄料拾萬石御嫡子壽千代殿に被遣旨被仰出之

〔萬延元年十月より
御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕

（正月廿日井上河内守渡大目付へ）

大目付に

田安大納言殿御事御後見中御政事向御不都合之事共有之被對京都深く被恐入候ニ付御官位一等御辭退且御隱居御願之趣都而無御據被思召候ニ付京都にも被仰進今度御願之通御官位一等御辭退之被遊御聞屆御隱居之儀も御願之通被仰

出只今迄被遣候拾萬石德川壽千代殿に被遣候旨被仰出候此段爲心得向々に可被達候

正月十八日藩主夫人京都を發して熊本に下る

〔文久二年十一月より同三年二月迄
良之助様御上京中日記〕

正月十八日　微雨

一御前様去十二日より一條様に被遊御逗留候處今日四時之御供揃に而益御機嫌能被遊御發輿候事

一右御發輿に付而御屆左之通

御所司代
牧野備前守様に

細川越中守妻一條殿に逗留之儀最前御屆仕置候處今日御當地致發途候此段申上候様越中守申付候以上

細川越中守内
青地源右衛門

正月十八日

正月廿日長岡護美三條實美を訪ふ

〔文久二年十一月より同三年二月迄
良之助様御上京中日記〕

正月廿日　晴

一良之助様今日三條様に御出之由……御歸懸南禪寺に被成御出候事

正月廿日我藩在京藩士の心得方を達し他藩交際出入門限等につき取締を嚴にす

〔安津免久佐〕

今度　御上洛に付諸藩方茂數多滯京之事に付不慮之儀差起申間敷哉と被遊　御懸念候間此砌諸事深心を用士風正敷彌以　御發駕前被　仰渡且別段及達置候通堅相守他所人應接文通等一切相斷可申候外出之儀先御用之外ハ被差留候條若無據用向有之外出いたし候ハヽ其段所々に相達差圖を可請候

一來ル廿五日方御門札を以出入被　仰付候間右日限前御奉行に懸合受取組頭手元に預置御門外之節名前張札相渡可被申候御門限ハ暮六時に被　仰出候間右刻限前無遲滯罷歸候様

一御門外に下宿有之面々ハ通勤之外道寄等不致若無據用向有之節ハ何方に立寄候との儀組頭に屆置候様

右之通相心得可申旨被仰出候條奉得貴意組支配方にも屹ト可被示置候以上

正月廿日

尙本文之趣良之助殿御供之面々に茂爲心得可被示置候以上

正月廿二日朝廷藩主慶順に來廿七日を以て參内すべきを命せらる

〔文久三年
慶順公御上京御參内一件〕

正月廿二日傳奏坊城大納言様雜掌淺野主膳山科筑前守より以切紙御用に付御達被申候儀有之候間只今早々坊城家に御入來候様申來候付御留守居筆役櫻田覺助參上之處左之通雜掌を以御達有之

來ル廿七日巳刻　御參内　被仰出之

一右に付卽刻　御請之御使者被差出候付御家老松野亘勤有之御留守居同道いたし候

越中守儀來ル廿七日未刻參　内被　仰付候旨御達之趣難有仕合奉存候右御請申上候

正月廿二日蜂須賀齊祐依願陸軍總裁職海軍方兼帶を免せらる

〔尊攘錄皇武合〕

同廿二日　　御座間　　松平阿波守

内願之通陸軍總裁職海軍方兼帶御免被成候

右於御墨書院溜老中列座河内守申渡之

正月廿三日關白近衛忠熙職を辭し鷹司輔熙之に代る

〔文久三年慶順公御上京御參内一件〕

近衛様正月廿三日關白様御辭退鷹司様關白宣下被蒙　仰候付右之御歡旁正月廿五日被遊御直勤候御口上左之通

御口上書ソテニ張札

鷹司様に

今般御當職　宣下之段目出度奉存候私儀明後日參　内仕候様被　仰出難有仕合奉存候

伺公仕候此段諸太夫中迄申達候

細川越中守

〔文久三年正月御國江戸京都返達御用狀扣〕

二月十日　二月廿二日着

藤本河口よ梨

左之稜々爲御心得申進候

近衛關白様

鷹司前右府様

關白御辭退

隨身兵杖

内覽如元

關白　宣下

此長者隨身

兵杖内覽宣下

近衛様關白職御辭退候得共内覽如元と申所ニ而内實關白之御勤稜者有之由依而當時之姿者關白様御二人之様成ものニ而御座候

正月廿三日池内大學の首を大坂難波橋際に梟する者あり

〔採摘錄〕　　池内大學伏誅之事　　池内大學

此者從來高貴之御方々之恩顧を蒙り戊午之比正義之士ニ從ひ種々周旋いたし居候處遂ニ反覆いたし姦吏に相通諸藩誠忠之士多數多斃し苟も自ら免れ其罪惡不容天地依之加誅戮令梟首者也　亥正月廿三日之夜也

右大坂難波橋捨札但し當日山内容堂公と面謁いたし深更まて對談歸途本文之通ニ被處候時と容堂公は關東より夷様船ニて御上京大坂ニ御一宿之夜也

〔安津免久佐〕

大學兩耳を切り關白様に書付を添差出夫方如何之間違ニ候哉傳奏議奏之手ニ亘り追詰京都町奉行之手方大坂町奉行ニ

御引渡ニ相成候由首ハ家内之者に下さゞ候との事

正月廿四日青蓮院宮近衛鷹司兩家及び傳議兩奏の各邸に投書して朝廷の廓清を計らんことを迫る者あり

〔投筆餘編〕

栗田口御殿等へ投文之事

乍恐謹而奉申上候近來御役人様ニ而御國事職之事同く姑息偸安之御處置ニ渉候宇和島等之邪說ニ御惑據夷之事は萬事關東之處置ニ任せ滯京之諸大名等は其國々々ゝ歸候而も宜敷ふとゝ之說御唱之御方不少由其敷ニ至候而は野史太平記等之如く大ニ名分及誤候事ニ均しき說及御唱之御方も有之由不忠不孝無此上事實ニ國賊と云へし其上御築地内賄賂横行之說も有之有志之士大ニ望及失ひ候中山公正親町三條公等は先年久我家之反復ニ御隨從逆賊酒井若狹守等へ御内通被成候儀表冠之御身として奸賊ニ使令せられし事其本及二ゝまるのミならす不忠至極實ニ御罪科ある御身今日ニ至いまた御改心無之表ゝは正議及御唱内實ハ因循之說御主張賄賂等も數多御受納被成候由風聞世ニ反覆程罪大ふるもの無之候如此御方々　廟堂ニ被爲在候而は決而難相成不日ニ屹度御退可被遊候全躰御新政之初ニ付殿下様御初御役人様は不及申上堂上方御一躰遠大之御志深遠之御策略ふくてハ決而一新難相成候ゑさひ衣冠之御身と雖奸賊ニ使令せられ候而は實ニ國家之蠹賊と云へし就ては反覆之御方は一(不詳脱)を御用言路を御開　朝廷及御清被遊今日より斷然果敢之御處置非常之御新政　朝議確乎として御勤ふく千載之御計事及御定可被遊候申上候迄も無之幕威ニ畏候ものゝ說決而御惑無之樣伏而奉願上候誠恐誠惶頓首々々　正月

以手紙得貴意候然は此一封御主人ニ早速御指出可被成萬一用封遲帶ニ及候ハヽ島田宇卿之如く加天誅可申候以上

表包へ「進藤豐後守殿早々御披露」と有之　右は　近衛鷹司坊城野宮(青蓮院宮淨大夫)兩殿下兩傳奏　正親町三條　中山　同　同　同上　阿野七家へも投有之候由正月廿四日之夜也

正月廿六日傳奏坊城俊克藩主慶順參内に關する順序禮式を指示す

〔慶順公御上京御參内一件、文久三年正月より　御　記　錄〕文久三年

(正月二十六日坊城傳奏ヨリ)

參　内　之　儀

一細川越中守參内鶴間着座

一傳奏出會越中守自分口上被申述傳奏退入言上之後更出席告可有　御對面之由

一出御之後傳奏鶴間出席誘引小御所取合廊下北方着座

一越中守自分御禮貫首申次御太刀折紙持參置下段於廂被拜

龍顏

一越中守於下段　天盃頂戴

一關白殿於麝香間被謁

一於鶴間御禮申述退出

正月廿六日長岡護美三條實美を訪ふ

〔良之助様御上京中日記〕文久二年十一月ゟ同三年二月迄

正　月　廿　六　日　微雨

一今朝五時之御供揃ニテ三條中納言樣に御出云々

正月廿七日朝廷藩主慶順に滯京警衛を命じ長岡護美の任を解かる

〔御記錄、文久三年正月より　文久三年江戸京大坂肥崎長崎返達御用狀扣〕

前冬以　勅使攘夷之事被仰出候ニ付而者諸蠻ニ漏聞難計帝都非常之御備之儀同關東ニ被仰出候右等之御時節故先達被爲有御沙汰候處今度登京ニ付暫滞在有之警衛之儀被仰出候事

正月

御口達

良之助樣ニ者御警衛被仰付置候得共御用濟被爲在候との御旨候事

〔良之助樣御上京中日記　文久二年十一月より同三年二月迄〕

正月廿八日陰雨

一太守樣暫御滞在御警衛之儀昨夜被爲蒙良之助樣ニ者御用濟之段も御口達有之候事

正月廿七日阿州世子松平淡路守長圖護美を來訪す

〔良之助樣御上京中日記　文久二年十一月より同三年二月迄〕

正月廿七日小雨雪交

一松平淡路守樣妙傳寺御旅館ニ御出御滞座之由

正月廿七日本藩住江甚兵衛宮部鼎藏佐々淳次郎山田十郎河上彦齋諸藩の有志者と京都東山の翠紅館に會し時事を議す

〔防長回天史〕

京都に於て正月廿七日諸藩の有志者東山の翠紅館に會し時事を議す會する者肥後藩士住江甚兵衛宮部鼎藏佐々淳次郎山田十郎河上彦齋土佐藩士武市半平太平井修次郎對島藩士多田莊藏青木達右衛門津和野藩士福羽文三郎水戸藩士梶清次右衛門下野隼次郎金子勇次郎山口德之允住谷七之允大胡聿藏高畑孝藏林五郎三郎岡部藤助大野謙助西宮和三郎川又才助林長左衛門赤須銀三及び我長藩士中村九郎佐々木男也久坂玄瑞松島剛藏寺島忠三郎世子の從衛神村齊宮大和彌八郎長嶺内藏太志道聞太等なり世子偶郊遊して其側を過ぎ亦之れに臨む

正月廿八日幕府は將軍上洛後府下の警備を嚴ならしむべきことを達す

〔御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

（正月廿八日）

大目付ニ

方今之時勢不虞之備無之而者難相成殊ニ此度御上洛御留守中者御締肝要ニ付御門番其外夫々御警衛被仰付候得共猶非常之節者其餘之向々ニ茂差圖次第人數之多少ニ不拘早速差出候樣可被致候

右之通万石以上以下之面々ニ可被相觸候

正月

正月廿八日藩主慶順は滞京警衛の命を拜したる旨を幕府に申報し且つ留守居をして守兵を藩地より召致すべき由を申告せしむ

〔御記錄　文久三年正月より〕

御老中樣ニ

舊冬以　勅使攘夷之事被仰出候付而者諸蠻ニ漏聞難計帝都非常之御備之儀同關東ニ被仰出候右等之御時節故先達被爲

有　御沙汰候處今度登京仕候付暫滞在御警衛之儀被仰出候段昨夜坊城大納言殿より家來之者被召呼御書付被相渡候此段御屆仕候以上

正月廿八日　　細川越中守

私儀今度登京ニ付暫滞在御警衛之儀被仰出候付爲非常手當國許より備之人數呼登候筈御座候此段申上置候樣申付越候以上

正月廿八日　　細川越中守家來　御留守居名

正月廿八日本藩相州の警備を免せられんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用一件〕

私儀今度　帝都御警衛之儀被　仰出之趣奉敬守早速國許ヶ備人數呼登諸事手當等申付筈御座候然處先代以來相模國御備場御用被　仰付置候付而ハ全東西兩樣之手當と相成殊更國許懸隔候事ニ茂候得者何分行屆候見込無之自然東西共手薄相成屆兼候而者難相濟恐入奉存儀ニ御座候先般所々御改革被　仰出候節國許より懸隔候場所御警衛之儀付而者追而被　仰出品茂可有之段御達之趣も御座候通ニ付相州御備場御用者何卒御用捨被成下　帝都御警衛一編ニ入精候樣被仰付度乍恐　叡慮御遵奉　公武御一和之御折柄旁不顧憚御内意奉願候此段可然樣奉賴候以上

正月廿八日　　細川越中守

正月廿八日長岡護美青蓮院宮に謁す

〔良之助樣御上京中日記〕（文久二年十一月ゟ同三年二月迄）（正月廿七日の條）

一良之助樣明日九時之御供揃ニ而青蓮院宮樣ニ被成御出旨御用人中ヶ申來　廿八日御出被爲濟

正月廿九日青蓮院宮に還俗あるへき旨仰出さる

〔京都諸扣〕（文久三年）

御用之儀有之候間重立候御家來壹人學習所ニ明朝日辰刻御出頭有之候樣尤兩役御面會ニ候間其御心得可有之候此段可申達旨被申付如是御座以上

正月廿九日　　兩傳奏

別啓　青蓮院宮御還俗　御内意被　仰出候付而者御歡として若參上并使者之方茂有之候ハヽ當時御假坊御狹少御無人ニ候間便宜之節漸々ニ參上いたし候樣被遊度無乾度可申入置内々御噂候事　　雜掌

〔古賀文書京都ミやけ〕

青蓮院宮

方今國事扶助精勤ニ付非常以格別之思召還俗御用意被仰出候事

正月廿九日

正月廿九日中山忠能正親町三條實愛議奏を免せらる

〔安津免久佐〕

一亥正月廿九日中山大納言忠能卿正親町三條大納言實愛卿兩人議奏御免

正月某日本藩儒臣井口呈助は横井平四郎の處分に關し意見書を松平春嶽に提出す

〔續冉夢紀事〕

是月(正月)日欠熊本藩井口呈助より意見書を出す左の如し　白木稿本

此節横井平四郎不慮之變事ニ立合處分屆兼候付而は不容易御招待を受居候身分恐入早速奉願弊藩ニ引取候存念ニ御座候處是迄　御國政は勿論總裁職被爲蒙仰候付而茂段々御爲合ニ爲相成儀も有之由ニ而此儘被差返候儀も御心外ニ被爲在候哉平四郎儀福井表ニ被差下候段承及申候自然無相違儀ニも御座候ハヽ是迄格別　御寵遇を受候身分此節ニ至り一旦ニ不被爲棄候御儀厚キ思召ニ而重疊尤之御情態とは奉窺候得共退而勘考仕候得は當時天下之形勢如斯衰頽ニ至候義畢竟三百年ニ近キ太平上下貴賤武士道に疎く罷成候と之儀ニ而外夷猖獗海内志士之義念を激成し大棚之御威光も立兼天下之御抑揚被爲屆兼候而以嘆敷次第ニ御座候處一橋公御當家樣今度海内之御人望を以御後見總裁職被爲蒙仰御政事向御大變革被仰出候御儀實ニ千緒萬端ニ可有御座候處其大要は元亀天正以來之武士道御興復被爲在候外有御座間敷候處右平四郎儀才力衆ニ秀非常之御目鏡を以御依頼被遊候之御儀ニは可有御座候得共此節ニ至り全く士道忘却仕候義世上共隱れ無御座候處矢張御咎願を蒙り福井表ニ被差越候而ハ越中守樣御家法ニ茂差碍り　御當家ニ於も此後如何ニ仁義道德を說キ嘉謀嘉猷を獻し御政事向ニは問然無之候共武道之本意相廢れ候而者天下之大勢御挽回之期者有御座間敷將又御當家樣ニは大度之思召ニ而曾子師友見之道を以御宥儀被爲在候思召ニ茂有之哉ニ御座候得共　皇國之士風自から漢士ニ異り曾子トいへとも差許かたき譯合ニ可有御座候得は最前平四郎願之通り熊本へ被差返越中守樣御家法之通り被仰付可然御儀歟と奉存候平四郎儀於弊藩は實ニ一介之士ニ而御座候得共御當家樣非常之御寵眷を蒙り候而は其名天下ニ隱無く此節御取扱振次第ニて人心之向背士氣之張弛ニ茂關係仕天下國家之御爲實ニ大切之御儀と奉存候右は私一書生身分兎ヤ角申出候義重疊恐多奉存候得共天下之公議誠以難默止聊表愚衷候迄ニ御座候疎漏之罪御宥恕奉願候恐惶頓首

細川越中守樣儒臣

井口呈助

文久三年

春嶽樣

御側御用人中樣

正月

正德花押

二月朔日朝廷在京の諸藩に命じ匿名投書を取調べしめ且つ告訴せんと欲する者は明に氏名を書して其筋に申立つべしとの旨を達せらる

〔文久三年京都諸扣〕

覺　御小姓頭に

學習所ニおいて御用有之候間重立候御家來罷出候樣傳奏衆より申來候間田中八郎兵衛被差出候處別紙之通被　仰渡勿論此方樣に右躰之族可有之共不被　思召上候得共此砌深く被遊　御懸念候間彌以加謹慎候樣被爲在御沙汰候條此段組支配方に申聞自然申出之趣も有之候ハヽ早々可被相達候以上

二月五日

一御用人　一下津久馬　一御奉行

二月八日

一御用人

支配方及吟味候處右樣之者無之候旨書達有之候事

近頃無名之投書者共來從國忠正議心底相興候儀ニ候得共却而人心可到懸揆候殊去月廿四日夜關白殿青蓮院宮前關白殿其外兩役家ニ投書有之候昨年十一月薩長土三藩中立之儀も有之候次第ニ付諸藩士ニ者右樣之儀者尤有之間敷候何人之所作ニ候哉取調有之度關白殿被命候事

但被寒言路候ニ者無之候以來致告訴度儀茂有之候ハヽ書姓名共筋に可申出候共上御採用有無者　朝廷之御處置ニ可有之候事

右之通左之御方々様御列座坊城大納言様被仰渡候事

坊城大納言様
飛鳥井中納言様
三條中納言様
野宮宰相中將様
阿野宰相中將様

以下之御書付渡ニ省

右卒而

取調候上者關白殿前關白殿ニ申出候様との事

右取調候迚おふきよふニは無之様穩便ニ有之候様との事

右貳稜之御口達ニ而御座候事

取調之趣之一封を以兩關白様之中申上候様申來候趣去ル三日之座シキ六アリ

二月朔日藩主慶順帝都警衛の任務を盡さんと欲し更に兵員招致の命を藩政府に下す

〔自筆狀控〕文久三年ノ元治元年迄

以飛脚令申候我等儀今度登京ニ付暫滯在御警衛被仰出難有仕合候連越候人數者有之候得共　朝命之重を奉し一ト備召登候筈候得共先此節者片手之人數早々差登可申候相殘候片手猶召登候頃合者追而可申入候尤此許異情之儀者無之候間共旨厚相心得國中人氣不致動搖様相示可申候委曲從長岡監物松野頁可相述候也

二月朔日　　越中守

二月朔日在府本藩老臣は都下の狀勢を藩政府に報じ且つ出兵諸隊の選擇を誤るなからんことを通議す

〔自筆狀扣〕文久三年ノ元治元年迄

家老中
中老中

至密申達候京地之形勢御國許に而致考察候趣とは大致相違先ッ　天朝幕府之御間者御合體之御模様候得共粟田口宮様正親町三條様天法院三條様方御定見被爲違薩長土藩專隨從いたし居右之次第ニ而混雜および期限今日と申說を致主張攘夷之策略厚薄深淺之譯茂可有之少ニても猶豫之說者因循と申唱ニ相成其困窮之時勢ニ相聞申候良之助殿ニ者堂上方を初諸侯方諸藩中必多度御面會被爲在候處御應接御程を被得至極之御都合ニ者被爲在候得共當時右之通之時勢ニ付御交中不一方御配慮被成候事ニ御座候間太守様御上京被遊候而者決而御宜不被爲在處より一條様奉初議奏衆方程能御取結いつ方も品能御推擧被成候付暫御發駕御見合之儀追々被仰進中西傳左衛門迄も被差下程之儀候處此節御上京之上御運ヒと之見亘も付兼御供申上候段思慮屈兼候段も重疊御斷申上候處良之助殿ニ者聊御遺念茂無御座御様子奉存候何様太守様永く御滯京不被爲在候様ニ取消良之助殿ニ茂猶御周旋候へ共御上洛來ル廿六日江戸御登是と被仰出御豫參御願濟ニも相成候處ニてハ夫迄ハ御待請不被遊候而者難相濟「以下段々事情認加候」且又今度御上京ニ付暫御滯在御警衛被爲蒙仰候付御備片手被召登旨御直書被下置候間可被右御頂戴候右者京師表異情之譯ニよつて被召呼ニ而者無之　朝命を被重候而之御儀ニ付一統其旨相心得可申決而動搖不仕様御示可被置と存候大筒手茂勿論片手被召呼候然處被差登候御備手者當年御手當請持之一番手より被差登候儀順路之御取扱と存候右之趣者太守様良之助殿にも同様被思召上候最前監物組を片手可被差登哉と中西傳左衛門ニ御書取御渡被置候得共今日只今御警衛被爲蒙仰候處ニてハ則當年請持之一

番手可被差登候而者異論差起可申且者尊慮茂石之通御座候間旁一番手坂崎忠左衛門組より片手被差登追而之御都合に
據忠左衛門始相殘片手可被召呼候今度之御人數御國元者速ニ被差立鶴崎より船路被差越海陸者左迄差急候ニ不及並之
處ニ而被差登可然候着坂之上者直ニ京地ニ罷越候樣御含可被置候此段爲可申達如是御座候以上

二月朔日　　長岡監物
　　松野頁

二月二日長岡護美關白鷹司輔熙に謁す

〔文久二年十一月〜同三年二月迄
良之助樣御上京中日記〕

二月二日　朝微雨后晴

一良之助樣今朝五半時之御供揃ニ而鷹司關白樣ニ御出御對顏云々

二月三日本藩京都警衛を命せられしを以て有司に其人選を命す

〔文久三年
京都諸扣〕

今度御警衛被仰出候付御固御人數平士三十五人之內廣吉半之允列ヵ十人被差出筈ニ付殘二十五人御小姓組御中小姓
并父兄召連罷登候無足之內より可被召仕候間人柄早々可被有御達旨候右無足之名附爲御見亘別紙差進申候以上

二月三日　　右田才助

御小姓頭衆中

今度　暫御滯在御警衛被爲蒙　仰候付非常之節天機伺且又　御築地近邊若出火之節其方儀御番頭代として被差出候條
可被得其意候以上

二月三日　　松野頁
　　長岡監物

猶々御物頭一人副士一人平士三十五人步御使番以下二十四人足輕等茂被差出候間此段可被承置候以上

住江甚兵衛殿

右同斷之節其方共內一人足輕三十人召連被差出候條可被得其意候尤請持名前相違引替候節々茂名付可被相達候以上

同日　　右同

猶々御番頭代住江甚兵衛被差出旨及達候條諸事可被申談候以上

井上加左衛門殿
堀內彈右衛門殿
小篠彦右衛門殿

右同斷之節御固御人數御差出候間魚住源次兵衛儀副士として被差出且又左之通

一平士三十五人之內

廣吉半之允　　小十郎弟
永井金吾　　岩間廣之助
山田十郎　　大八叔父
野尻右衛門　　小坂小半太

喜左衛門嫡子　長沼小十郎
陸助弟　佐々淳次郎

右之通候條源次兵衛に通達牛之允列に可被達候尤御番頭代として住江甚兵衛御物頭之内一人被差出候との儀も可被申聞候以上

同日

猶々

良之助殿御警衛被　仰付置候得共御用済被爲在候段御達有之候間此段爲心得申達置候以上

右同（長岡松野）

下津久馬殿

右同断之節御因御人數者別紙之通被差出候旨御屆相済候付住江甚兵衛其外之面々にも夫々及達候間最前右田才助より及内達せ候平士二十五人歩御使番以下二十人之處追而治定之名前者可被相達候へとも万々一之節者御在人方繰合被差出候様可被申談置候以上

九右衛門弟　今村乙五郎
小十郎育之従弟　岩間次郎助

御小姓頭衆中

出火之節差出候人數

番頭	一人	松野亘
物頭	二人	長岡監物
馬廻	三十五人	徒士 二十四人
		足軽 三十人
		中間 九人
		合百一人

此外又者等

右之通御座候以上

正月　細川越中守内　元田八右衛門

二月五日長岡護美三條實美を訪ふ

文久二年十一月より同三年二月迄

〔良之助様御上京中日記〕

二月五日

一今朝□時之御供揃ニ而三條中納言様に御出口時比御歸館夫より宇治に爲御遊覽被成御滯候事

二月六日藩に慶順舊臘幕府の諮問せる攘夷の策略につき公武一致必勝の明算を盡し斷然其方針を遂行せられんことを答申す

文久三年之元年迄

〔自筆　狀　控〕

至密内狀を以得御意申候攘夷之叡慮之於國東国ニ而御尊奉相成候儀之御案内之通候處期限之一條之皇國中一致ニ興起國力武備充實之上被定候儀之申迄無之御國議も同様之明合候處堂上方之内異說有之當時之形勢未タ一致ニ至兼候樣之浪士輩種々周旋いたし候處ニ堂上之内攘夷之期限今日と申御說御主張相成居陸長士之三藩勿論其筋ニ從順之藩中も右之趣ニ相聞其意之目度も違可申候得共御手を被出候御方茂無之哉ニ相見甚六ヶ敷御場合と恐考仕候仍而於此方樣之筆而御國議之趣被仰立御周旋可被遊との見込御當然共可申哉之處列藩御手を抑被居候中ニ此方樣ニ限被仰立候共決而相調候筋ニ無之其上積處一本立ニ相成八方之列藩相手と相成候儀ハ必定ニ有之是等之儀ニ付而之良之助殿御配慮之不及申深御存意被爲在候御模樣泰伺於此方樣之攘夷之　叡慮御遵奉被遊候間此上之公武御合躰御熟談之上斷然と被仰出何茂御差圖次第可被遊御心得との御趣意を以被遊御建白候方ニ相決則寫差進申候通ニ御座候京地之事情追々變化いた

し一橋公過日御着ニて相成候へ共未タ御周旋之御筋目承知不仕春嶽様ニも一昨日職御着京相成不遠御上洛被爲在候處ニて八一躰之御模様又打替可申何様天下之公論を以被決度只々懇願仕候計ニ御座候前條之通候處近日正親町三條様共外中山大納言様方御辭職相成御内輪混雜之様子ニ御座候殿上一致ニ至兼事情之種々打替實ニ當惑仕合御座候巨細之儀何分筆紙難盡候間不悪様御推察可被下候御不審も可有之と荒増得御意置申候以上

二月六日

松野亘
長岡監物

沼田勘解由殿

（別紙）

今度擁夷之　勅諚御遵奉被遊候付而銘々之策略被爲聞召度御尋之趣奉敬承候右ニ付謹而反復熟考仕候處策略之儀者神州安危存亡之所係重大之事件ニ御座候得者何卒必勝之明算有御座度奉存候然處私共一國之管見ニ而者天下之大計强チニ麁忽之下策建白難仕伏願日者右策略之儀者幕府之御籌算ニ被爲出度乍恐征夷之御職掌者從來之御委任ニ被爲在候得者兼而御深謀遠慮必勝之御明算御定策可有御座殊更戰守之要者臨機應變運用之秘計將軍之御方寸ニ可被在御儀ニ付別ニ麁忽之建言難仕御座候間右御明算秘計御上洛之上御直と　天朝ニ被爲仰立　宸廣豪旨御一致ニ而斷然と被仰出候ハヽ私共藩國之任早速ニ御指揮ニ應し遠攻近守一國之智力を盡し候而　天朝幕府ニ之忠勤を相勵可申と奉存候此段申上候以上

二月

細川遠中守

二月六日在京本藩老臣は擁夷策問答申のこと及ひ藩邸購入に關する件を藩政府に通牒す

（文久三年ゑ元治元年迄）
（自筆狀控）

至密申達候擁夷之儀　勅書之通被仰出候付策略被爲聞召度御見込之趣御上洛前可被差出旨御沙汰之趣於御途中被遊御承知不容易御軍柄ゑ付御着京之上可被遊御熟考義と申ニ相成扨策略期限之儀ゑ皇國中一致ニ興起國力武備充實之上被定度との儀ゑ御國議之通候處堂上方之內異說有之當時之形勢未タ一致ニ至兼候綾ゑ浪士躰種々致周旋候處方堂上方之內擁夷期限今日と申御說御主張相成其筋ニ從順之藩中も有之候趣ニ相聞眞意ゑ目度も遠可申候得共御手を被出候御方も無之哉ニ相見其六ヶ敷御場合と相成申候仍而此方様ゑ兼而御國議之趣被仰立御周旋可被遊との見亘御當然共可申候哉之處諸藩御手を扣被居候際ニ此方様ニ限被仰立候共決而相調候筋ニ無之積ル處一本立ニ相成八方之列藩相手ニ被取候儀ゑ必定ニ有之是等之儀良之助殿初發よヾ御見亘被爲在候御様子ゑ而御配慮ゑ不及申上深御存意被爲在候御模様を茂奉伺於此方様ゑ擁夷之叡慮御遵奉被遊候而此上ゑ公武御合躰御上洛之上ゑ御熟談被爲在候而斷然と被仰出候ハヽ何も御差圖次第可被御心得との御趣意を以去ル六日早打差立御建白御屆之取計いたし候則寫別紙差進申候右之通擁夷御登奉之上ゑ差寄御自國之御手當無之而ゑ片時も離相濟右之御主意被含良之助殿御配慮御座候處屹度御上洛被爲濟候ハヽ無程御歸國之御都合可相成哉之御口氣之御向茂御座候哉之趣ゑ付先ッ荒增見亘候處三月中旬比ニも御發駕可被爲出來哉右之御運ニ相成候得ゑ川尻之御船々廻坂ゑ迎茂御間ニ合申間敷候間鶴崎之御船不殘出帆被仰付不足分ゑ飛船等御借船を以御供可被仰付尤良之助殿にゑ當月末比ニゑ此元御發足可被爲出來左候ハヽ御人數乘組被差登候御船之內ニ被爲召是又御供中ゑ御借船被召仕筈御座候右段々之御都合ニ付一刻茂大坂に御船々被差登候様ニと良之助殿よヾも被仰付候事ニ御座候

一京都之形勢行末之處先日以來段々咄合候處江戸御往來ニゑ是非御出京　天機御伺無之而ゑ難相濟候處御通懸御立寄位ニ而ゑ相濟申間敷哉仍而相應之御屋敷御買上少々ゑ詰込も不被仰付而ゑ難相成御塲合ニ有之左候ハヽ　天朝被重候御信義も顯然仕夫等儀太宰様良之助殿被仰合御治定之儀被仰出候御塲所之儀ゑ岡崎村と申而南禪寺よヾ西手ニ當り七八丁も可有之哉至極可宜所柄と見込申候得共地代且年貢之都合等得斗承糾せ申筈御座候右ゑ一應御取遣之上御治定ニも

（付札合印）

可相成處諸侯方一統所々ニ屋敷御買上相成居候間此機會を失候ハヽ能キ場所御手ニ入不申上彌以高價ニも相成可申哉と見切申候岡崎村之内ニて一條様御屋敷ゝ而も有之候哉内々御世話被進候哉之趣も組承申候御作事之儀ゝ差寄白金御屋敷中御長屋解崩し之上龍口御裏も御不用ニ付是又解放被差廻可然ゝ御沙汰被爲在候何様御屋敷御買上之埒ニ至候ハヽ、御作事一手も相應可被差登哉夫等之儀ゝ追々及御取達可申委細ゝ才助より御奉行中ニ申向候由候間猶御聞取可被下誠種々御物入差湊候處ゝ重疊恐入候へ共不被得止御事躰相成猶其御許も御心配之程深々察入申候此段爲可申達如是御座候以上

二月十日　　早打之御飛脚ニ仕出

平野九郎右衛門殿
三淵志津摩殿
松井冒助殿
有吉將監殿

松野頁
長岡監物

○下ニ付札
京都御警衛相州御請持兩端ニ相成候而ゝ御國力續衰重疊御迷惑之至ニ付相州之方ゝ御解放被仰付度猶又周旋有之候様江戸表へゝ申向置候間追而ゝ御模様も可有之歟左候ハヽ、京都之御警衛迄ニ而本文之通御治定被遊候へハ御手厚相聞御都合可宜ゝ旁申談候柏木文右衛門儀早々出府可被仰付候間相州表御解放取扱筋之儀ゝ得斗御含被下度及御相談申候

二月六日長岡護美前關白近衛忠凞に謁す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄
良之助様御上京中日記〕

二月六日　陰

一今朝五時之御供揃ニ而近衛前關白様ニ御出□時比被成御歸館候事

二月六日千種有功の首級を斬りて之れを土州藩旅館の前に投する者あり

〔安津免久佐〕

文久三年二月六日之朝夜前ニ茂打果候哉之坊主首髮少々生立居候由　ゝ新ゝ風呂敷ニ包ミ土州侯御旅宿門際ニ川原町ニ條下ル二丁目銀屋敷二條川端捨有之其首ニ添居候書附左之通

此御方様先年ゟ重々様々姦謀手傳被致其身高位ニ乍有烏左近其餘之惡人ゝ心ゝ通シ家來加川初馬を以高位高官之御方々を惡道ニ引入實ニ有間敷國盗也依之乍憚首級を申受此所ニ持參仕候此上其御方ニ而可然御取計可有之候

國中浪士

右首千種有功卿之由

二月七日長岡護美青蓮院宮に伺候す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄
良之助様御上京中日記〕

二月七日　風雨

一今日八時之御供揃ニ而青蓮院宮様ニ御出□時比被成御歸館候事

二月九日藩主慶順參内して龍顏を拜し天盃を賜はる

〔慶順公御上京御參内一件〕

一二月九日朝六時之御供揃ニ而御裝束御狩衣被爲召　大臣家之御裝束一條様ゟ被進候　御出行一ト先一條様ニ被遊御中座夫より御束帶ニ而

御參夕八時比　内　龍顔御拜　天盃遊被御頂戴（禁中都而之御式正月廿六日坊城大納言樣ゟ御達御之御二通也在于前記略此可見合）右畢而關白樣に御謁等諸事無御滯被爲
濟七半時比御退出猶一條樣に被爲　入夫より御狩衣ニ　御召替左之通御廻勤夜四時過御歸館（中略）
宮中ニ而傳奏樣に御逢被爲　仰述候趣
今般承　御内　勅且又今日參　内被　仰付重疊難有仕合奉存候
關白樣に於麝香間御謁之節被爲　仰述候趣
今般冢　御内　勅且又今日參　内奉拜　龍顔　天盃頂戴仕冥加之至難有仕合奉存候
於鶴間御禮之節被爲　仰述候趣
奉拜　龍顔　天盃頂戴冥加之至難有仕合奉存候

二月十一日幕府は將軍陸路上洛につき本藩の浦賀警衛を撤して相州警備を嚴にすへきを命す

〔御國江戸大坂返達御用狀扣、御國江戸往來狀〕

（二月十一日）の條

御軍艦ニ而御上洛被遊候ニ付浦賀表御固之儀先達而相達置候處御都合も有之此度陸路御上洛可被遊旨被仰出候ニ付浦賀表御固ニ不及候間相州御備場御用別而手厚ニ可被心掛候

二月十一日本藩は將軍上洛後の府下戒嚴に關し示達を受けたりと雖とも目下在府の藩兵寡少なるを以て事變に臨み命に應する能はさることあるへき旨幕府に申告す

〔御國江戸大坂返達御用狀扣〕

御用番松平豐前守樣に差出候書付寫

方今之時勢不虞之備無之而者難相成此度御上洛御留守中者御締肝要に付御門番其外夫々御警衛被仰付候得共猶非常之節者其餘之向々に茂御差圖次第人數之多少ニ不拘早速差出候樣可仕旨御觸達御座候然處越中守相州御備場御用被仰付置候而者此度御上洛被遊候付御固之儀御留守中彌入念可相勤旨別段御達有之且越中守并弟長岡良之助儀追々ニ致上京良之助者京都表御警衛を茂被仰付候且又舊臘者越中守妻并母嫂儀茂兩度ニ御當地致發途國許に罷越候ニ付而者殊更人數分配いたし實ニ旅宿陣屋等之委ニ罷成居候處御上洛御留守中火之元之儀御觸達御座候付而者越中守屋敷々々內外共昼夜猶更締方等申付候儀ニ御座候然ルニ御當地詰合之人數前文之通至而之減少ニ而屋敷々々火之元取締方等ニ茂及不足重役共初深掛念罷在候勿論非常之節者臨時之差繰を以相勤可申儀とハ奉存候得共右之次第ニ付萬一之節御差圖御座候而茂別段差出候程之人數迚者無御座候間自然屆兼候儀も可有御座候と奉存候此段申上置候以上

細川越中守家來　吉弘加左衛門

二月十一日

二月十一日細川若狹守は將軍上洛中幸橋門外警衛の幕令に對し既に相州警備の任務を帶へるを以て兵備充分ならさる旨を辯疏す

〔御國江戸大坂返達御用狀扣〕（文久三年正月）

細川若狹守殿留守居助役　須藤官吾

右者御用番松平豐前守樣に今朝被指出候御屆書寫一通持參仕候

二月十一日　御留守居共

口上之覺

今般私儀　御上洛御留守中非常之節幸橋御門外に人數可差出旨被　仰付難有仕合奉存候然ル處本家細川越中守相模國

御備場御用相勤候以來右手當之内に私人數度相加兼而差遣置候付而之追々御屆申上置候通之儀ニ而兩樣之手當何分屆兼候得共此節之別段被　仰付候儀ニ付有合之人數ニ而相勤可申と奉存候併右之次第ニ付至而人數少ニ可有御座候此段御聞置可被下候以上

二月十一日　　細川若狭守

二月十一日松平相模守松平淡路守長岡護美を來訪す

〔文久二年十一月ノ同三年二月迄良之助樣御上京中日記〕

二月十一日

一今日妙傳寺に松平相模守樣松平淡路守樣爲御滯座御出ニ相成候事

二月十一日轟木武兵衛久坂義助寺島忠三郎鷹司關白に謁し言路を開き人材を擧げ攘夷期限を定むるの三策を献し卽日之を決定せられんことを迫る關白伏奏して其請願を許さる尋て三條實美等勅使として一橋慶喜の旅館に臨み攘夷期限の決定を促す

〔轟木武兵衛引取書〕

或日長州下宿ニ諸藩有志之者打寄種々時世之論ヨリ有志中兼々　將軍家御因循諸侯方御因循ト口癖之樣ニ申候得共其申候有志中スラ未タ因循ヲ被免不申左候而餘所ニ批判ヲ加ヘ候事重疊聞兼候ト武兵衛論破仕候末當時第一之急務者如何樣之事件ニ而可有之トノ論ニ移リ只今第一之急務者　朝廷之御基本何一相立候事無之當時之通ニ而御事業成就可仕樣無之連年　關東エ攘夷之儀被　仰越　御請者有之候而モ于今期限等之奏聞無之天下之人心疑懼ヲ生シ以往如何之變動差起可申も難計依而只今攘夷之期限ヲ定置期限迄ニハ是非鎖港ニ被決不申候而者何十ケ年立候而モ只今通ニ而積リ彼ヨリ併呑被致候樣成行可申者必然ニ而有之第二者堂上方御名者御近習ト被爲唱候得共實者一ケ年ニモ一度モ被拜天顔又者被爲蒙　御意等候位ニ而者　主上者始末官女之手ニ被爲居左候而　王業興復　皇威洪張抔ト申事者存懸モ無之事ニ有之第三者依召御登京之諸侯方御着京之上　朝廷ニ被　召出候者時世挽回之御大策等御伺取ニ相成美玉ヲ御拾取御歸國可有之トノ御考ニ而御登込ニ相成候處縱御由緒有之堂上方ニ最寄々々ニ御出ニ而　朝廷之御模樣御伺取ニ相成堂上方ニ者素リ御黨派相立居銘々之宗旨々々ニ御返答ニ相成根本右之通ニ而一致不仕諸侯方ニ者唯右往左往ニ而爲何御主意共不相分空敷御引拂ニ相成候而者重疊殘念之次第ニ而此度　朝廷ニ者古來無御例　天杯頂戴等モ被爲在全御破格ト相見候得共御手數迄ニ而有之此非常之御時節抔非常出格之御僉議被爲在詰込之諸侯不殘惣御參　内ニ相成　御簾前ニ被　召出　御直ト天下之形勢夷狄防禦之計策等被遊　御問候者諸侯ニモ難有事銘心肝各涯分ヲ盡シ言上ニ相成天杯頂戴ニ勝レ候事萬々ニ可有之第四者是迄國事懸被　仰付候堂上方三十人餘ニ及ヒ餘リ御多人數ニ而却而一致不仕國事懸者第一御人才ヲ被爲撰六七人ニ被　仰付候者御根本御一致ニ而各知所向可宜敷是等之儀方今之急務ニ而可有之相嘶候處孰モ同意致シ候間武兵衛尙又申候者右樣之儀急務と乍存論談迄ニ而事畢候者所謂因循ニ而可耻事ニ付右之四ケ條應司關白樣エ罷出御直ト拜謁奉願致言上候而者何程ニ可有之哉ト相嘶候處孰モ致同意一同罷出可申段申候得共左樣大勢罷出候而者强訴之樣ニ相成可申長州ヨリ寺島忠三郎九坂義助夫ニ武兵衛相加三人罷出若シ此事　御聞入無之候者退殿不仕於同御所餓死可仕ト申談一決致シ此上暫モ猶豫致候譯無之明朝未明ニ參殿致可申今夜者此所ニ夜明可致ト申談武兵衛儀者不容易事柄申談候ニ付而者此度詰申諸事　良之助樣思召相伺候上ニ而執計其上仕江甚兵衛方差圖ヲ可受旨　御着京翌日御附役ヲ以テ被　仰渡候儀ニ候得者甚兵衛方エ及相談思召ヲモ奉伺罷越可申筈之處事俄ニ差起其猶豫無之殊ニ死ヲ決シ罷越候儀ニ付其旨同道之鼎藏エ申談甚兵衛方エ付答候樣相賴差返其夜者一睡モ不仕武兵衛儀者前條申立之四ケ條ヲ上書之體ニ書認翌未明ニ三人同道致シ參殿拜謁願出候處　關白樣其砌御不例ニ而御引入中ニ付直ニ被　召出至而御坐近被爲　召寄今日罷出候儀定而當時之事ニ付心付之儀ニ而モ有之罷出候哉幸引入中之儀ニ付寛々夫ニ而申出候樣　御懇篤之御沙汰ニ付孰モ難有御禮申上替ル々々　御前ニ進出前條之趣申上別而攘夷之儀者　將軍樣御

上洛ニ差懸居此節一橋様御上京者攘夷筋御委任ニ而御登ニ相成候事ニ付只今之内鎖港之期限何月何日ト被遊御決議密
乎トシテ不被遊御動搖候者　將軍様御上洛ニ差懸居　御着之上奸吏如何ニ執計候而モ致方有之間敷左様無之候而者奸
吏共開港說取唱如何相計可申哉モ難測段申上候處　關白様不怪御感悅ニ而是程多人數致上京居候中ニケ様ニ差入致上
言候者是迄見合無之三人之志扨々被遊　御感心候段繰返被　仰聞　尊顏ヲ奉拜候得者　御落淚被遊候御様子ニ奉見受
難有仕合奉存候處只今申出候儀者献白書ニ致度段被　仰聞候間荒增之儀者認罷出候段申上武兵衛懷中致居候ヲ差上候
處被遊　御披見何モ左之儀ニ付此節之事柄者　御職掌ニ被爲易而モ是非從　朝廷御取揚有之候様　御執計可被遊旨ニ付
其儀者孰モ致安心候様被　仰聞其日者松平春嶽様松平容堂様鷹司様エ御參殿之筈ニ付引取尙罷出候様被　仰聞候間武
兵衛列ヨリ申上候者今日參殿仕候ニ付而者孰モ齋戒致沐浴若シ上言筋　御取揚ニ相成不申候者共儘於御殿如何様卒處
置可仕ト死ヲ決シ罷出候儀ニ付御客様被爲在候者何方ゾ御殿端ニ被囲被下候様奉願　御前ヨリ下リ候處右差出候献白
書ニ付都合三度被　召出文言等細ニ　御尋相成被　仰聞候ニ者武兵衛列考候處ニ而献白書之通最安ク被行可申ト心得
居可申候得共　朝廷ニモ色々之　御釣合有之中々容易ニ難被行第一内ヨリ引者無之候而者速ニ成功ニ至兼候間武兵衛
儀者只今ヨリ姉小路様裏松様エ罷出右上言趣委細申上候者直ニ三條様エ御噺合ニ相成可申左候者追而之御都合ニモ可
相成トノ旨被　仰聞候間　御前ヨリ下リ直ニ姉小路様罷出候處御留守ニ付裏松様エ罷出候處武兵衛列關白様エ罷出候
跡ニ而長州土州之者共其席ニ居候モ不居モ致憤興武兵衛列エ致助力不申候而者難濟段申合三條様姉小路様野々宮様阿
野様橋本様豐岡様滋野井様正親町様裏辻様等エ思ヒ々々ニ罷出同様之献言致候間武兵衛裏辻様エ罷出候節者疾ク御承
知相成居尙又武兵衛ヨリ委細御聞屆ニ相成直ニ御參　内ニ相成前文之九卿一同御申談ニ而　關白様之様ニ御出ニ而強
而御病床ヨリ御引立ニ相成被爲有御參内武兵衛鷹司様エ罷歸候節者御留守ニ相成殿中ニ相控居候處夜九時過ニ　還御
ニ而武兵衛列被　召出今日申立之一條達　叡聞候處献白書ヲモ被爲有　叡覽畢而右書附ヲ　御机上ニ被爲囲申出候事
尤當世之急務ニ而如何ニモ御採用可被在筋ニ付早々施行候様扨々誠忠之者共ニ而有之此上彌以報國盡忠可致旨被　仰
出　御感之餘　龍顏ニ被爲灑　御涙候段　關白様ヨリ御直ト被　仰聞誠以冥加至極難有仕合奉存候段申上候處上書之内
攘夷之一條者前文九卿從　朝廷直ニ一橋エ越ニ相成居間追付様子相分可申御近習之一條者今夜直ニ被差改國事懸者共
御役之内ヨリ三人參政ト申御役名被　仰付猶御參内之儀者御手數事ニ付來ル十六日迄ニ御執行ニ可相成被　仰出候旨
被　仰聞候然處曉七時前段九卿　關白様エ御出ニ相成於一橋様御評定之次第者武家方ニ者春嶽様容堂様松平肥後守様
御出有之攘夷之儀今直　將軍様御上洛有之御歸府後二十日之　御宥免ニ而無相違拒絶ニ相成可申段一橋様ヨリ御請有
之依而　將軍様此節之御滯京者十日ヲ限可申旨從　朝廷可被　御出御都合ニ付二月廿二日　御出帆之筈ニ付海上御往返
風波之障無之候得者四月中旬之内期限ニ相成可申依之　御歸府ヨリ廿日　御猶豫ト申儀ニ御請相成候由被　仰聞候然
處武兵衛列關白様エ未明ヨリ罷出候ニ付而者朝御膳頂戴被　仰付候處孰モ御禮迄申上頂戴不仕候間御膳番ヨリ頻ニ相
勸候得共頂戴不仕候ニ付大ニ怪罷在書御膳出候而モ同様ニ付番之者ヨリ役人之越度ニ相成候間是非被頂戴候様申聞候
間頂戴致候段及返答側ニ差置給不申武兵衛裏辻様ヨリ罷歸候而モ右同斷ニ付御膳番頻ニ致心痛議論之様ニ相勸候間孰
モ不得止今日之參殿　關白様迄願出候一條有之若御取揚無之孰も殿中ニ而餓死可仕覺悟ニ而罷出候間致心配奚申間敷
申聞候間此事者　關白様御聽ニモ相達候由又武兵衛列右之通參殿仕候ニ付而者長州土州邊ヨリ致氣遣大勢ニ而替ルル
々見繕ニ參混雜甚敷甚兵衛方モ氣遣ト相見ヘ參殿ニ相成裏辻様ヨリ罷歸候節鳥渡見受候得共混雜ニ而辭者懸不申其外
中西傳左衛門粟津忠太郎モ同様之由左候而武兵衛儀者　關白様致退殿直ニ甚兵衛方ニ罷越大方右之所行仕候而者被叱
可申ト相考罷越候得共何之尋モ無之爲差申聞モ無之候間良之助様御次ニ罷出實者前條踏切候致所行候儀可被遊　御滿
足ト心中ニ者夫而已日當ニ致シ押行ヒ候事ニ御座候得共表分ニ者　思召モ不奉窺差入候所行致候次第重疊奉畏入候段
身分心得方奉伺候處御附役ヨリ　御差構不被爲在旨ニ付引取私ニ一日相恒翌日　關白様迄御禮ニ罷出申候事ニ御座候

〔一條忠香日記抄〕

二月十二日

今日辰半過比御用之儀に付近衛左大將忠房卿入來父子面會候處去日堂上之内國事掛之外之人躰攘夷之儀關東より御請は申上候事なから一橋中納言越前春嶽等上京に有之候得共唯今に何等之樣子も不奏聞候間押て被仰出候樣兩殿下聊風邪平臥なから面會を被願被申述候次第夫より昨日は細川越中守家禮軍衛方轟武兵衛長州家來久坂玄瑞同寺島忠三郎三人鷹司殿下家へ推參致何卒今日中攘夷期限御治定有之候樣にと段々相願候御勘考之儀は不承引何迄も待居との事故殿下所勞なから參朝にて被伺候儀兩役衆赤心堂上一同集會にて色々と御評議有之上にも早々處置之邊取調候樣との御命夫より一橋旅館へ兩役衆始赤心堂上一同推參にて何分攘夷期限イツ頃に相始候迄之處返答聞歸り候樣被　仰付被遣候事也一橋家春嶽始皆々否と申儀有之候ハヽ早々存寄之通暴發候との儀也右に付書付寫持參被爲見一見寫後早々二條家へ及傳達之事

四つ折

卑賤之身を以不容易事件言上仕候段誠以奉恐入候得共時勢切迫イカニモ默座仕候に堪兼不顧萬死申上候先般勅諚を以攘夷之儀被仰出於關東御請申上候得共期限等奏聞無之に付天下人心騷擾罷在此往如何樣の變動出來も難計候間萬一大樹公御上洛御延引に相成候得者後見總裁職を以て速に期限奏聞被仰付度候實以未曾有之大冦を掃攘し皇威を海外に御鄙被爲立候に付ては既に非常之宸斷を以御親征をも思召被爲立候程之御事柄に候得者乍恐是迄之如く深宮に被爲在君臣之御間隔絶仕候ては不相叶第一言路御洞開雍蔽之患無之御近習衆は勿論堂上之御方々御前へ召出胸臆を被爲盡候樣有之度候且國事御用掛御多人數被仰付候處何卒御員數御減少にて御人材御精選被爲遊日々列藩之情實國家之大計等不聞召候ては不相叶候近來諸大名追々參内仕天盃頂戴をも被仰付候程之事に候へは是非常之御破格を以御直に赤心御聞届被爲遊度一日之安は千歳之禍に付片時も早く攘夷之御大業其御基本被爲立度此儀御裁斷被仰付候迄は差扣罷在候間何卒速に御評決乍恐奉希上候以上

細川越中守家來　轟武兵衛
松平大膳大夫家來　久阪玄瑞
同　寺島忠三郎

右早々二條家へ及相談返書來之事

〔續再夢紀事〕

同日(十二日)夜五半時出門一橋中納言殿の旅館に赴かる本日夜に入りて傳議及ひ國事掛り諸卿旅館ニ臨まれたれハ急に參會ある樣にと一橋殿より申遣ハされし故なり此時旅館に臨まれし諸卿は三條中納言殿(實美)野宮宰相中將殿(傳奏)阿野宰相中將殿(實緝)橋本宰相中將殿(國事掛以下皆同し)豐岡大藏卿殿澁野井中將殿正親町少將殿姉ヶ小路少將殿にて參會せられし諸侯ハ一橋殿の外公(春嶽)及ひ松平肥後守殿松平容堂殿ふりさて應答の大意ハ三條殿以下幕府已ニ攘夷拒絶の勅旨を奉承せられけれといまた實施の期限を定められす斯くては折角奉承せられたる詮なけれハ即時ニ其期限を定めて上答あるべしとの叡慮ふりと申されしか一橋殿以下攘夷拒絶の期限を定むるか如きハ天下の重事ふれハ何程急にと在らせられても即時には定めかたしと答へられ反覆辯論に及はれけれと諸卿は强て上答を促され遂に翌十二日曉に達せしかハ一橋殿會津殿土佐殿此上辯論しても其甲斐あらさるへけれハ何とか刻限を定めて上答すへしとありしを公ハ攘夷といひ拒絶といひ已に奉承せられてハあれと實は至難の事にて天下の人心一致一和の上ふらては實行し得べからざるふり然るに天下の人心ハいふもさらふり公武の御間すらいまた眞の一致一和にいたらさる今日是か期限を定むるは輕卒の甚しきものにて至難の上に至難を重ねるふりとありて固く同意せられさりしか一橋殿以下三侯ハ輕卒にもあるへく又至難の上

に至難を重ぬるにはあるへけれと今日の場合上答せすて止を得へきにあらされは兎角大凡の期限を定めて上答すへしと申され遂に公の意見は行はれす大樹公上洛の上滞京を十日間と假定し歸東後廿日に當る日を以て其期限たるへきに決し上答書を指出されきさて諸卿のしか切迫なる催促に及はれしハ今朝轟武兵衛久坂元瑞寺島忠三郎の三名連署して指出せる建白書に起因せるふりとぞ上答書及轟已下三名の建白書左の如し（編年備忘　甲子新報）

上答書

一將軍歸府後二十日の御宥免を蒙り無相違拒絶致候段御受申上候禮京之儀は十日限り朝廷より可被仰出御都合之事

建白書

卑賤之身を以不容易事件言上仕候段云々（一條忠香日記抄に同じ故に略之）

〔元治夢物語〕

先達テ一橋殿御後見トシテ既ニ上京シ給ヒ政治總裁職越前春嶽侯ニモ頃日上京セラレケレバ攘夷ノ期限速ニ確定ノ令ヲ示サルヘキ旨有志ノ輩ヲ始草莽士等頻リニ申立殿下ニ迫り或ハ議奏傳奏衆ニ促シケレバ二月十一日三條黄門實美卿阿野中將公誠朝臣正親町少將公董朝臣姉小路少將公知朝臣橋本少將實梁朝臣以下八人一橋殿ノ旅館ヘ推參セラレ各詰問ニ及レシカバ又毛利長州定廣侯ハ嵯峨天龍寺ニ在陣セラレシカ今夜關白殿ヘ馳參シ期限を頻リニ促サレ翌十二日土州容堂侯因州中將慶德侯等始八人ノ堂上同道ニテ一橋殿ヘ頻リニ切迫ノ情實ヲ述ヘラレ關東御不都合ニ至ラサル樣苦心盡力セラレケレハ慶喜卿春嶽侯小閣老（小笠原長行）答ヘ申サレケルハ頃日關東ニハ昨年島津三郎生麥ノ一件ニ付彼是混雜シ彼地ニ於テモ外夷ノ事情切迫ニ逮ヒ大樹公ニモ夫故御上洛延引セリ不日御上洛ノ上關東ノ事情篤ト承知し双方打合シ急度期限ヲ決定セラルベシ夫迄ノ所有志ノ面々ヲ宥有テ然ルベシト答ヘラレシカハ各承諾シテ退出セラレシトカヤ

二月十二日長岡護美關白鷹司輔熙に謁す

〔良之助樣御上京中日記〕（文久二年十一月ゟ同三年二月迄）

二月十二日

一今朝六半時之御供揃ニ而南禪寺御本陣ニ御出御歸後鷹司樣に被遊御出候事

二月十二日本藩は京都警衛の命を蒙りしを以て備組の内番頭一人組共鐵砲頭半分組共大筒手片手に上京を命ずる旨を達す

〔御國江戸往來狀扣〕（文久四年）

太守樣今度御上京ニ付暫御滯在御警衛被爲蒙　仰候趣坊城大納言樣ゟ御書付被成御渡候段御到來有之奉恐悦候

一右之通ニ付御備組之内御番頭一人組共御鐵炮頭半分組共大筒手片手暫之間被召寄置候京都表異狀之儀ゑ無之候得共朝命を被重候而之　御趣意候條其旨厚相心得人氣不致動搖樣精々相示可申旨　御直書を以被　仰下候

右之通候條奉得其意組々ニ茂可被達候以上

二月十二日

月番　　奉行所

御備頭殿（宛名ハ〔太守樣御上京良之助殿御出京一卷〕ニ據ル）

〔太守樣御上京良之助殿御出京一卷〕

畳　　御番頭　志水久馬助

右之面々今度京都御警衛被爲蒙仰候付私組御番頭一人組共御鐵炮頭半分組共用意濟次第出京被　仰付候付申渡御請相濟申候以上

二月十三日

御鐵炮頭　松村十之進
金森兵左衛門
野田一之助

御鐵炮三拾挺副頭　白木五兵衛

〔仝書〕

覺

右者今度京都御警衛被爲蒙　仰候付副頭之場ニ而出京被　仰付旨申渡御請相濟申候此段御達仕候以上

二月十四日

私組　志水亀之允
坂崎忠左衛門

二月十三日將軍家茂上洛の途に就く

〔御内勅等書拔、御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

大目付ニ

坂崎忠左衛門

明十三日陸路御發駕被仰出來月三日比二條御着城被遊候積ニ付東海道筋旅行之儀者通御以後七日相立八日目より通行候樣向々ニ可被達候

二月

〔御國江戸京都御用狀扣〕

二月十一日　安田より　二月廿二日着

一公方樣御軍艦ニ而御上洛被遊候付當月廿一日御乘船可被遊段被　仰出置候處御都合茂有之候付明後十三日御發駕東海道筋御上洛可被遊旨被仰出候尤御省略方之儀者兼々厚被仰出候趣茂有之候得共猶一際御供方其外格別ニ御減略可被遊旨被　仰出候段昨朝御觸達有之候恐々謹言

〔自筆御用狀控〕（文久三年ヶ元治元年迄）

以別紙申達候京地之事躰打替候儀ハ追々申進候通御座候處將軍樣去ル十三日御發駕東海道御通行御日積通ニ候得之來月三日比二條御着城之御模樣ニ有之扨攘夷之　叡慮之彌以御貫徹被遊御上洛御滯在日數十日ヶ御治定御歸府後廿日御猶豫被下攘夷期限諸藩ニ御申向之儀一橋公春嶽樣松平肥前守樣松平容堂樣ゟ御請御申上ニ相成候間御上洛之上之公武御合躰斷然ヶ被　仰出ニ而可有之御運ヶ相伺申候右之御都合ニ付良之助殿ニ之海岸場廣之御國元防禦筋御手當之被仰立ニ而御當地御發途相成候間御歸着之上此元之事情且防禦筋等之事も得斗御伺取可被成候期限斷然ヶ被仰出候上之御自國之御手當御取締筋急務之事ニ而炮器類を初玉藥之御備未タ實備ニ至兼甚以掛念仕候條此上之屹御差入武備充實を盡候樣御周旋有之度重疊及御相談申候先當今右之事躰一ト通爲可申達如是御座候以上

二月廿四日

松野亘
長岡監物

惣　連　名　殿

二月十三日長岡護美一條忠香を訪ふ

〔文久二年十一月より同三年二月迄
良之助様御上京中日記〕

二月十三日晴

一今九半時之御供揃ニ而一條様ニ被成御出候事

二月十四日一橋慶喜松平春嶽等攘夷期限の決定豫測を上陳す

〔文久二年正月より
御記録、文久三年京都諸扣〕

松平容堂
松平肥後守
松平春嶽
一橋中納言

攘夷拒絶期限被聞食度御沙汰ニ付別紙之通書付差出候間内々被爲見候事

右一通

大樹公上洛滯在日數十ヶ日と御治定相成候間二月廿二日出帆より海上往反風波之障等無御座候得者四月中旬之内攘夷期限ニ相成申候尤歸着日より廿日御猶豫被下度儀者先夜茂泰申上候通之儀ニ而右之日積ニ相成候事

二月十四日

二月十五日藩主慶順は匿名投書に關する調査の狀を具し尚ほ速に攘夷を斷行あらは投書の弊自ら消滅すべき旨を奉答す

〔文久三年京都諸控〕

（二月十五日の條に出つ）

（朱ノ書込）此御書附御直筆を以被差出候也

先日於學習院被仰渡候投書取調之趣奉敬承候精々取調申候處私家來ニも右様心得違之者と決而無御座左様思召取可被成下奉存候乍恐方今之勢を相考候ニ被仰出置候攘夷之期限關東治定之儀斷然天下ニ顯赫仕速ニ御事實相相候ゑ人心復一致投書等者相止可申と奉存候以上

細川越中守

二月

二月十五日兩傳奏雜掌は關白以下の諸官將軍及び各藩主等の途上禮節を改められし條項を各藩に通達す

〔文久三年正月より
御記録、京都ミやけ〕

口上覺

坊城殿雜掌
野宮殿雜掌

此度依御改革別紙之通御禮節振御改正被仰出候ニ付御達被申候御家來末々至る迄右ニ准シ不作法無之様厚御示置可有之様兩傳奏被申付候仍此段御達申入候以上

二月十五日

右一通

關白　大臣　宮方
乘輿之納言不下乘參議已下下乘禮節歩行之公卿殿上人是迄之通禮節
攝家納言以下
公卿乘輿歩行共行逸無禮節殿上人下乘禮節
攝家殿上人
乘輿之節公卿行逸但公卿歩行之節攝家下乘禮節殿上人乘輿歩行共行逸無禮節
堂上
公卿
是迄之通相互ニ禮節歩行之殿上人ニ逢行逸無禮節
殿上人
是迄之通相互ニ禮節歩行公卿ニ逢下乘禮節
六位藏人
是迄之通
攝家門跡
僧正
公卿殿上人乘輿歩行共逸無禮節
僧都
歩行公卿ニ逢下乘禮節上人行逸無禮節
本願寺以下同例
僧正
乘輿之公卿ニ被行逸無禮節歩行之公卿ニ逢下乘禮節
乘輿歩行之殿上人ニ逢行逸不禮節
僧都
乘輿之公卿ニ逢行逸不禮節歩行之公卿ニ逢下乘禮節
乘輿之殿上人ニ逢行逸不禮節歩行之殿上人ニ逢下乘禮節
德川家
依時之官位禮節
諸大名高家
堂上同格相互ニ禮節
非藏人
地下官人
旗本
公武諸家々來
已上堂上ニ逢並諸大名之時下乘下馬
但供之時同斷

肩衣小袴着用之堂上ニ逢之輩不及下乘下馬羽織着用之諸大名行逢節は堂上より不及禮節尤羽織體之諸大名よりハ下乘下馬禮節可有之候事

二月十五日長岡護美三條實美を訪ふ

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

二月十五日晴

一今朝正五時之御供揃ニ而三條中納言様ニ御出被成候事

二月十五日本藩留守居は轟木武兵衛鷹司邸參向の理由を幕吏永井主水正に開陳す

〔文久三年正月より御記錄〕

口上手控

轟木武兵衛儀去ル十一日鷹司様ニ致參殿候儀ニ付御尋之趣承知仕候當人手許承糺候處右者是迄も追々拜謁仕候事ニ付當日は參殿之儀は時體之儀を言上仕候由時體之儀と申ハ近日別而人心動搖致し居候付一日も御取鎮之御仕法被爲在度段も言上仕候段申出候尤同人儀兼而申付置候儀茂御座候處右之通之致方ニ而ハ猶屹度申付當人儀も深恐入罷在候間向後之處者右様之致方無之様精々申付置候此段申上候以上

細川越中守
元田八右衛門
青地源右衛門

二月十五日

右者兼弘政之助持參永井主水正様御取次ニ相達候事

二月十六日顯光院鳳臺院兩夫人熊本に着す

文久三年

〔文久三年機密間日記〕

晴陰　二月十六日

一顯光院様　鳳臺院様今朝六時之御供揃ニ而植木被遊御發輿九時過二丸御屋形ニ被遊御着候事

一右付而二丸御屋形ニ席中不殘罷上り御歡申上候事

一右御一宿より將監昨夜罷歸候付御傳言之趣拜聞仕八代欠席ニ者廻文仕出候事

一筆致啓上候太守様今度御上京ニ付暫御滞在御警衛之儀被仰出候旨先月廿七日傳奏坊城大納言様より學習所ニ御家來御呼出御書付御渡有之候段御到來御座候此段可得貴意旨被仰付越候左衛門尉殿山城守殿ニ茂御同様申進候様との御事ニ御座候恐惶謹言

二月十六日　　御用番

細主米輔様

二月十六日長岡護美關白鷹司輔熙に謁す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

二月十六日曇

一今朝六半時之御供揃ニ而鷹司關白様ニ被成御出□比被成御歸館候事

二月十七日青蓮院宮中川宮と改稱せらる

〔京都ミやけ〕

青蓮院宮

自今中川宮と被稱候旨被仰出候也

癸亥二月十七日

二月十七日藩主慶順は攘夷決行に際し藩地の戰略等指示を要するを以て長岡護美の賜暇歸藩を請願す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助様御上京中日記、文久三年正月より御記錄〕

攘夷御決定付而者國許一般之決議守衛人數之計略專務之折柄私並弟長岡良之助共滞京仕候而者遠境諸事行屆兼候間先良之助を差下爲致指揮度依之良之助儀此節國許ニ之御暇被下置候様奉願候尤御用之節者早速上京仕せ可申と奉存候以上

細川越中守

二月十七日

二月十七日長岡護美松平春嶽を訪ふ

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助様御上京中日記〕

二月十七日曇夕雨

一今夕七時之御供揃ニ而御乘切松平春嶽様ニ御出被成候事

二月十八日朝廷在京諸侯の參朝を命じ攘夷期限の決定及び言路洞開に關する勅諚を傳へ且つ神宮警衛遠島防禦に就きての策問あり

〔一條忠香日記抄〕

關白輔熙より封中來

左大臣殿　　輔熙

机下

愈御安康之條承度存候抑今日上京諸大名於小御所御對面被仰渡演舌書二通交名一通入覽候如例御傳達可有存候早々如此候也恐々謹言

二月十八日

裏見返しに

於御前輔熙より申渡演舌

近來醜夷逞黠謀數覬覦皇國實不容易形勢ニ付萬一於有汚國體缺神器之事者被爲對列祖之神靈是全當今寡德之故と深被痛宸衷候付攘夷拒絶之期限被仰出候間各深重之叡思を欽戴し固有之忠勇を奮起し速建攘之功上は安宸襟下救萬民命黠虜永絶覬覦之念不汚神州不損國體樣と之叡慮に被爲在候事入御後輔熙より申渡演舌

一神宮御警衛事云々（二月廿日鍋島閑叟より順達せる神宮警衛及ひ蝦夷對馬諸島防禦に關する勅問書に同じ）

交名

尾張前大納言　松平淡路守
一橋中納言　松平美濃守
松平阿波守　肥前前中將
越前前中將　伊達伊豫守
松平肥後守　上杉彈正大弼
松平參河守　土佐前侍從
松平相模守　細川越中守
松平出羽守　松平出羽守

不參

松平長門守　毛利左京亮
佐竹右京大夫　池田信濃守
松平安藝守　松平主殿頭
中川修理大夫

〔御記錄、文久三年正月より　京都諸控、京都ミやけ、文久三年〕

攘夷拒絶之期限於一定者闔國之人民戮力可勵忠誠者勿論之儀候先年來有志之輩以誠忠報國之純忠致周施候儀　叡感不斜候依之猶又被洞開言路雖草莽微賤之言達　叡聞忠告至當之論不論沒塵寒樣と之深重之　思召ニ候間各不韜忠言學書院に參上御用掛之人々に可揭言被仰出候間亂雜之儀無之樣相心得可申出候事

連日從巳刻限申刻於九之日廿六日者自午刻限申刻

今日（二月十八日）御參內之御衆樣（我藩主慶順外）左之通

尾張前大納言樣　一橋中納言樣　松平春嶽樣　松平肥後守樣
松平淡路守樣　松平美濃守樣　御斷松平閑叟樣　上杉彈正大弼樣　松平容堂樣
松平出羽守樣　佐竹右京大夫樣　松平安藝守樣　中川修理大夫樣　池田信濃守樣
松平主殿頭樣

左之御方々樣ハ今日初而御參內之由

松平阿波守樣　松平三河守樣　伊達伊豫守樣　毛利左京大夫樣（亮賊マ、）

〔御記錄、文久三年正月より（二月廿日鍋島閑叟より順達）〕

御口上手扣左之通

一昨夜關白殿より被相渡候御趣意振御書付松平阿波守より通達有之候由ニ而松平出羽守より以使者差越候付則御書付順達書共以使者致進達之候

（口上手覺）別段

御書付御承知之上早々御順達有之留り之御方より阿波守方に御返却有之候樣との趣申來候此段茂申述候

御趣意書

一神宮御警衛兼而藤堂に茂被　仰渡有之候得共　宗廟之事故攘夷御治定ニおゐてハ一際御手當之謀略被　聞食度事

一隱岐對馬の如き皇國地勢ヲ離れ候箇所々々隣國ハ勿論互ニ合力防禦之手當　被聞食度事

御順達御名前書

松平美濃守樣　松平閑叟樣　上杉彈正大弼樣　松平出羽守樣　松平長門守樣

細川越中守樣　松平安藝守樣　佐竹右京大夫樣　松平容堂樣　伊達伊豫守樣

二月十八日藩主夫人態本に着す

（文久三年）〔機密間日記〕

晴　二月十八日

一御前樣今朝五半時之御供揃ニ而植木被遊御發輿夕七時御裏に被遊御着候事

一右ニ付而御裏に席中不殘罷上り御歎申上候事

一右御一宿ヨリ九郎右衛門罷歸候付御傳言之趣拜聞仕八代欠席にと廻文仕出候事

二月十八日大村藩は自國海岸並に長崎市中の防禦を嚴にし且つ帝都近海非常の節は警衛の任に當るべしとの勅諚を受けたる旨を我藩に報告す

〔他所御往復〕

一筆啓上仕候去月廿七日　傳奏坊城大納言殿ゟ依御達大坂藏屋敷に差置候家來之者罷出候處就疊夷之儀深被惱宸襟之處報國盡忠之厚志有之由達　叡聞御感之御事ニ候尙　皇國之御爲抽丹誠自國海岸并長崎市中等防禦嚴整可有之且　帝都近海非常之節御警衛之　御沙汰茂候者早々可致上京旨　勅諚之御書付頂戴之難有仕合奉存候右之段爲可得貴意呈愚札候恐惶謹言

二月十八日

大村丹後守

純熙

細川越中守樣

參人々御中

二月十九日朝廷長岡護美に暫く滯京せんことを命せらる

〔一條忠香日記抄〕

二月十九日

諸奏加勢廣橋左大辨宰相より封中來

別紙之通被仰出候此段申上候宜賴入候也

二月十九日

左大臣殿　諸大夫中

胤保

長岡良之助

今度自國防禦に付歸國之願尤には被思召候得共大樹上洛攘夷期限策略等可言上折柄暫之處滯在被仰出候事

二月十九日英國代理公使ジョンニール幕府に對し生麥事件の賠償を要求す

〔元治元年 尊攘錄探索書〕

外國奉行支配組頭衆ゟ御城使里內官右衛門伺取候趣

此節神奈川に英國軍船數艘渡來いたし居候由ゝ付夷情爲探索御用御頼外國奉行支配組頭白石忠太夫殿方に罷越內々樣子相伺候處右之全昨秋生麥村夷變一件之跡尻ニ而此節差出候書翰之趣意ハ生麥村ニて英人を殺害いたし逃去候ものを差出首を刎其上殺害ニ逢候妻子養育料として貳万五千トル受取申度薩州に押寄及懸合可申依之重立候御役人雪人通詞壹人御乘組被仰付候樣且是迄追々之異變有之候ハ日本人氣居合不申とハ乍申全日本政府不行屆故之事ゝ付右謝儀として相應受取申度との趣横濱へ兼而在留之ミンストルより書翰ニて御返翰之來ル三月十日迄ニ承知いたし度右日限まてニ御返答無之候ハヽミンストル取扱相斷船將ゟ懸合可申との趣も相見就而ハ右御返翰之趣御評定之上生麥ニ而逃去候薩州家來未行衛不相分追々嚴敷尋中ニ付召捕次第首刎可申妻子養育料ハ政府ゟ差出可申候間軍艦薩州に相廻ニ不及謝儀之儀ハ御留守中ニ付追而評議之上可差遣旨之御返翰御旅中ニ伺ニ相成候由自然十日までに御治定難相成節ハ尙日延之儀御懸合ニも可相成候得とも此節京地ニて彌攘夷御決定相成候ハヽ右樣養育料謝儀等差出ニ不及趣ニも可相成歟左樣相成候ハヽミンストル手を引軍艦船將ゟ直ゝ應接ニも可相成も難計此節神奈川灣船之軍艦拾貳艘ニ候得共英船計ニも無之佛船も四五艘有之格別之儀も仕出申間敷哉ニ相聞此節致流布候英國書翰ハ全右ミンストルゟ之書翰之趣增補致し候ものニも可有之哉之由ニ御座候

一御返翰御旅中に御伺ニ相成候由ニ付其邊之御模樣ハ尙近日相伺候樣可仕候

〔文久二年三月以來 探索書〕

一左之書付吉弘加左衛門より差出

當亥二月十九日英國軍艦より差出候書翰之大意

英國之士官を生麥ニおゐて殺害ハ為し候島津三郎并一類之者不殘召捕へ英人立合之上ニ而首級を刎子候樣致度此儀日本政府之御威勢薄くして御所置難相成候ハヽ償ひ金として五拾万ボンドステルリング（日本三十萬兩程ニ當ル）を御差出可有之其上ニ而薩州鹿兒島へ相廻り島津家より殺害ニ逢候英人妻子養育料として三万トルラルを請取可申若相拒ミ候節ハ直ニ戰爭ニ可及候間日本政府ゟ重き御役人壹人檢使として是非とも御乘組之儀相願度存候右ハ今十九日ゟ廿日廿四時之間（此廿四時ハ本國政府之命ニ無之全く船將手切の驅豫有之由）に御返答被下度猶豫之刻限（此期限來ル三月九日ニ當ル）相過候ハヽ即刻軍艦を廻し大坂を始長崎箱館其外之諸港ニおゐて出入之船を奪ひ且江戶を燒拂ひ候樣是ハ英國之旗章并條約に對し日本政府之越度有之候故無據此事件ニ及ひ申候

〔文久三癸亥年 尊攘錄探索書〕

遠山三右衛門ヨリ河添彌右衛門平川俊太ヘノ書

彼方へ罷越及談話候處姓名之處ゑ書顯し不申樣且其筋々へ申出候分不苦樣子ニ候得共外々へ口外仕儀ゑ堅く斷りゝ相成申候間姓名等總而書記不仕候

英國來翰之大意

去年島津三郎先行列於生麥英人を切害いたし尤英人共不法無禮を相働候と申ゝても無之殘暴之次第在留英國ミニストルより本國政府ニ申越本國政府ゝて評議致一決今般軍艦一隊を仕立日本へ差越罪を糺し候趣ニ而元來前段之如キ暴戾不法之所爲出來いたし候ゑ畢竟日本政府之法令行屆不申處より事起り候儀ニ付日本致府政令不取締之罪を問償銀四十万兩（トルラル）餘を差出可申○當時御留主ニ付言上往復之日數廿日限り可申去ル十九日よりゑ日永ゝて來月九日迄期定ゝ御座候

右之日限過候而も治定之返答無之候ハヽ、屹度水軍提督之所存可有之旨ニ候〇扨又薩州家ニ而島津三郎之所爲暴虐不仁之至と可申因而右英人を切害いたし候薩人を尋出し英人眼前ニ而斬戮いたし其上逢切害候英人妻子も有之事ニ付養育料として十万ドル相贈可申左候ハヽ、穩便ニ聞屆可申是又談判之日期五日を限り若日限過候ハヽ、屹度所存有之趣ゝ候

先來翰之大意右之通ニ御座候餘程長キ文面ゝ之候得共惣而右之趣意を又復辯明いたし候迄ニ而別段之趣意ゝ無之由

彼人内話ニ御座候右書翰飜譯殊外八ケ間敷外國掛りニ而も承知いたし候者ゝ五六人ふらてハ無之よしニ御座候

彼人内話之稜々左ニ録上仕候

一先日横濱へ渡來之英國軍艦八艘此間致出帆薩州表へ相廻候由ニ候得共相考候ゝ薩州計りニ而ゝ有之間敷外々へも風行候儀と相見薩州へゝ四五艘も參り可申迎も薩州ゝて程能キ應接ゝ致出來間敷必定爭端を開キ可申左候ハヽ、香港乍浦邊り英國軍船呼寄セ大事ニ可相成と被存候薩州地方へ速ニ取懸り不申候ハヽ、必流虹大島を攻取可申左候得ゝ何分救援も手ニ及不申共以無謀之所爲と相見へ申候

一横濱ニ來船いたし居候フロイス船者英夷之趣意とゝ別儀ニ而更ゝ憂ふる筋ニ無之由

一此度薩州ニ而及戰爭候ハヽ、鎖國者難叶趣旨ニ貫通可致と被存候由

一薩州表彌及戰爭候共他國ゝ境を堅メ手を出不申傍觀仕居方可爲上策元來ゝ薩州より事を好候儀故萬一鬪爭利を失ひ助を他邦ニ求候者必定和談ゝ趣キ可申よし

右之外種々新聞等有之候得共至急ニ認兼候間後日ニ可奉申上候以上

二月廿日草莽微賤の者と雖も學習院に至りて時事を建言することを許さる

〔京都ミやけ〕

一攘夷御一決之此節御改革被仰出候付而ハ舊弊一新人心協和候樣無之候而ハ不相成儀ニ候處近來鞏轂之下私ニ殺害等有之畢竟言語壅蔽諸有志不行屆之處致深恐入候次第ニ付上下之情意貫達致し　皇國之御爲御不爲ニ係り候儀ハ勿論内外大小事とふく善惡共隱匿致居候事共聊無憚筋々へ可申出候

但憚忌諱候儀も有之候ハヽ、封事候而直樣差出可申又自身聞回候儀も可有之候

右之趣武家弁町在共不洩樣可被相觸候

二月廿日長岡護美鷹司關白中川宮等に伺候す

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助樣御上京中日記〕

二月廿日　雨

一今朝六半時之御供揃ニ而鷹司樣ニ御出御歸懸三條樣ニ御出御同道ニ而中川宮樣に御出歸館之上高桐院ニ御參詣被成候事

二月廿日朝廷長岡護美の歸國を許さる

〔文久二年十一月ゟ同三年二月迄良之助樣御上京中日記〕

（二月廿日の條）

一傳奏野宮宰相中將樣より今晩五時過御呼出ニ付元田八右衛門參上之處左之御書付雜掌を以御渡有之御直ニ可被成御渡處御參内中ニ付御直ニ被成御渡候振ニ相心得候樣との儀も被仰付置候段雜掌申聞候

長岡良之助

近々大樹上洛攘夷期限策略等可有言上折柄ニ付今暫滯京之樣被仰出度之處自國防禦等之儀ニ付歸國之願無據次第ニ茂思食候間賜御暇候事

二月

〔御國江戸京都返達御用狀扣〕

二月廿一日　　二月廿八日着

宮村藤木尾藤河口より

一昨夜傳奏野宮宰相中將樣より御留守居御呼出ニ付元田八右衛門參上之處　良之助樣御事御呵被　仰出候段之御書付宰相中將樣より御直ニ御達ニ相成申候依之明後廿三日五時之御供揃ニ而御當地御發駕播磨路御船中小倉路御旅行可被成旨被仰出恐悦奉存候別紙御書付寫差遣申候（別紙は前ニ出せるものと同じ）

右之通松平肥後守殿御沙汰ニ付洛中洛外へ不洩樣可相觸者也

癸亥二月

二月廿一日長岡護美一條忠香に謁し轟木武兵衛を從へ歸國する旨を誥く

〔一條忠香日記抄〕

二月二十四日

去二十一日良之助入來之節被申候は轟武兵衛是は召連歸國候積り可有安心候樣被申

二月廿二日東久世通禧は長岡護美歸國するを以て住江甚兵衛河上彦齋其他同志の者を留めて國事に盡力せしむへしとの鷹司關白の命を傳ふ

〔御記錄〕（文久三年正月より）

（東久世ヨリ傳達）

住江甚兵衛
川上乾齋（マヽ）

右之者共格別精忠之聞有之候間越中守滯京中輔佐可有之歸國之由ニも有之候間滯京之樣關白殿被命候事

但其他同志之面々申合滯在可有之候事

二月廿二日長岡護美は朝命により住江川上其他の同志者に滯京を命せらるゝに當り同志者の覺悟に關し在京の有司に示す所あり

〔投筆餘編〕

良之助君御歸國有志輩滯京被命候時執事へ御示命之事附執政初捧　良之助君演舌書之事

甚兵衛列滯在被　仰付候儀者　天朝之御模樣有之太守樣深思召被爲在精々御示諭御沙汰一々奉敬承候末之儀ニ付堂上方ニ推參建白等且激論等無之樣等之儀者一々拙者より申付置候右ニ付是非自己之論及張候樣之儀ハ不致旨ニ候右之次第ニ付組方一統相互ニ私意無之樣頼入候

二月廿二日　　長岡良之助

今度攘夷之期限御治定ニ付而者向後とも彌以　天朝之御主意遵奉衆力一致可奉輝　御國威奉存候住江甚兵衛列之論至當之筋同意ニ御座候得者涯分及盡し可申候間乍恐被遊　御安心御歸國候樣奉存候以上

二月　　長岡監物
松野亘
詰合中

二月廿二日三輪田元綱等十餘人等持院に安置せる足利將軍の木像の首を執て之れを三條河原に梟す

〔江戸京大坂鶴崎長崎返達御用狀扣、（文久三年）京都諸控、京都ミやけ〕

三條河原ニ木像之首三ツを板ニ乘せ竹竿ゝて高く上ケさらし笹札ニ記有之候寫

正名分之今日ニ當り鎌倉以來之逆臣一々遂吟味可處誅戮之處此三賊巨魁たるに依而先其醜像に加天誅をの也

文久三年
癸亥一月廿三日

右証札

逆賊

初代　等持院殿　尊氏　足利尊氏
二代　寶篋院殿　義詮　同義詮
三代　鹿苑院殿　義滿　同義滿

右位牌三ツ首之下ニ釣テ有之

逆賊足利十五代

此者共之惡逆は既先哲之所辯駁萬人之能所知ニして今更不及申といへとも今度此影像共を令斬戮ニ付而ハ贅言なから聊共罪狀を示すへし抑此の大皇國之大道たるや只々忠義二字を以て大本とするは　神代以來之御風習なるを賊魁鎌倉頼朝世ニ出て奉懶　朝廷不臣之手始をいたし尋て北條足利ニ至てハ共罪惡實ニ不可容天地神人共ニ誅する所なり雖然當時天下錯亂名分紛擾之世　朝廷御微力にして共罪を糺し給ふ事能ハす遺憾豈可不悲泣や今彼等か遺物等を見るに至ても眞ニ憤激ニ堪す我々不敏なりといへとも五百年昔之世ニ出たらんニハ生首引拔んものをと握拳切齒片時も不能止今や萬事復古舊弊一新之時運逐々不臣之奴原之罪科を糺へきの機會也故ニ我々申合せ先其巨賊大罪を詞し大義名分を明さんか爲昨夜等持院ニあるところの高氏始其子孫之奴等の影像を取出し首を刎て之を梟首し聊散舊來之蓄憤すもの也

亥一一月廿三日

大將軍織田公に至り右之賊流斷滅ス些ク愉快といふへし然るに夫より爾來今世ニ至此奸賊に向超過し候ものあり共黨許多にして共罪惡足利等之右ニ出若夫等之輩眞ニ舊惡を悔忠節を抽鎌倉以來之惡弊を掃除し　朝廷を奉輔佐て古昔ニ復し積惡を償の所道なくんハ滿天下有志追々大舉して可糺罪科もの也
右者三日の間さらし置もの也若取捨候者屹度可行罪科もの也

〔元治夢物語〕

此所業ノ者共ヲ守護職會津少將手ノ者ニ命シテ嚴密ニ穿鑿ヲ遂ゲラレシカハ共黨ハ衣棚二條住草莽士三輪田綱一郎師岡節齋宮和田雄太郎建部建一郎青柳健之助等ハ召捕ラレ高松起之助仙石佐太郎ハ共場ニ討レ共外長澤誠平大場匡平長尾郁三郎山田彌夫等ハ處々ニテ召捕ラレ何レモ入牢セシメ共外ニモ黨有シカモ遂電シテ行衛知レスナリヌ此事ニ就テ長州定廣侯　朝廷へ奏ス奏セラレケルハ等持院足利氏木像ノ梟首仕ル浪士ノ者共召捕ラレ入牢仕候段承及候全ク右ノ者共粗暴ノ處置ニハ候得共足利氏ノ强逆ヲ惡ミ名分ヲ明カニナスノ所意ヨリ起リタル事ニテ聊モ私心ヲ抱キ候儀ニハ無之間寛典ノ御處置ニテ謝罪在セラレ度旨ヲ建言セラレケレバ共旨傳奏衆ヨリ總裁職へ達セラレケレハ春嶽侯容保侯相談セラレ御答ニハ此度召捕候浪士ノ儀ハ朝廷ヲ憚カラス人心騷擾イタサセ候者全ク不正ノ徒ニ付決シテ出牢叶ヒカタキ旨ヲ返答セラレケレハ是ヨリ浮浪士ハ愈毛利家ヲ慕フ事主將ノ如ク尊敬セシカハ毛利家ノ威光海内ニ竝フモノナ

シ

二月廿三日本藩住江甚兵衛廣吉半之允山田十郎宮部鼎藏河上彦齋加屋榮太に暫く滞京を命し且つ其旨を朝廷に具申す

〔文久三年京都諸扣〕

其方儀御模様有之暫滞京被　仰付候條可被得其意候以上

二月廿三日

尙々

廣吉半之允
山田十郎
宮部鼎藏
河上彦齋
加屋榮太

右之面々其方同様滞京被　仰付半之允十郎儀者大木織部其方仮支配被　仰付鼎藏列茂支配有之筈之段及達候間左様相心得諸事心を用可有差圖候以上

松野亘
長岡監物

住江甚兵衛殿

〔文久三年正月より記錄〕

越中守家來住江甚兵衛河上彦齋儀滞京之儀者御請申上置候右之外左之通滞在仕せ申候

以上

廣吉半之允
山田十郎
宮部鼎藏
加屋榮太

二月廿三日

細川越中守内
青地源右衛門

二月廿四日長岡護美京都を發し歸國の途に就く

〔御國江戸京都返達御用狀扣〕

二月廿四日　三月朔日着
藤本河口より

一良之助様御事御暇被　仰出昨廿三日御當地被成御發駕旨被　仰出置候處御用事被爲在一日御延引今廿四日五時之御供揃ニ而彌御平安御當地被成御發駕目出度御儀奉存候恐々謹言

〔文久二年良之助様御上京一途〕

二月廿四日

一今朝五時之御供揃ニ而京二條新地妙傳寺御發駕壹九時比伏見御茶屋ニ被爲入御供揃次第淀川御乘船曉九半時過大坂御着御茶屋ニ被爲入候事

今日石清水社ニ御忍ニ而御參詣

〔文久二年戌十月良之助様御上京一件〕

二月廿四日大坂御着ニ付同廿五日京都ニ雇飛脚差立候付左之通

一筆致啓達候太守様上々様益御機嫌能被遊御座奉恐悦候良之助様彌御平安昨日稲荷前御小休ニ而晝九時伏見御茶屋ニ被爲入御膳等被爲濟無程同所御立京橋ヶ御乘舟淀川御下り夜九半時大坂御屋敷ニ被成御着彌以御平安御膳等御快被召上重疊目出度御儀奉存候今日者當所御滯留明日九時之御供揃ヱて當所被成御發途筈御座候雇飛脚差立此段爲可申上如斯御座候恐々謹言

二月廿五日　　藪右馬允

大木織部殿
宮村平馬殿
田中八郎兵衛殿
尾藤健之助殿

尙々右之趣御家老中ニ別段不申達候間御達方宜御取計可被下候以上

二月廿五日本藩政府は京都警衛として派遣すべき藩士に訓示する所あり

〔太守様御上京良之助殿御出京一途〕

覺

旅詰之面々心得之儀付而者兼而別紙之通被仰付置候事ニ候處方今一統不穩折柄諸藩より茂數多滯京之事ニ付猶更無油斷心を用士風正敷有之度他所人并浪人體ニ者懇意之向たり共應接文通等一切相斷無據用向之外者外出を茂遠慮いたし諸事別而相慎候樣家來末々ニ至迄屹ト可被示置候事

　但道中筋成丈ケ簡易ニ通行有之道寄者可爲無用事

右の趣組中ニ茂可被申渡候以上

二月　二十五日

上ニ付札本文之趣御物頭并副頭ニ者可有通達候

志水久馬助ニ

二月某日幕府井伊掃部頭の差控を赦し横濱より川崎に至る海邊の警衛を命ず

〔魚住文書尊攘雜錄〕

御用有之指扣被成御免候

井伊掃部頭

此度江戸表へ英國軍艦差向三月八日迄相待御答無之候ハヽ、戰爭可及之旨申立候右之御承引可相成筋ニ無之候間御一戰之御覺悟ニ有之候付其方へ横濱より川崎之邊御警衛被仰付候間早々人數出防禦身紛骨可致旨被仰出候（竿カ本ノマヽ）

同　人ニ

二月廿六日尾張慶勝一橋慶喜松平春嶽共に關白邸に候し英人と應接の結果を慮り水戸慶篤に江戸守衛を命し瀕海の諸侯を歸藩せしめんことを請ふ

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣ヶ元田ニ御借被成候爲の一節）

昨戌年八月島津三郎儀江戸出立之節於生麥英吉利人兩人討果候付英吉利人應接方茂有之候付其節之始末存居候者呼出し理非相糺可申其趣相達候處未差出候內此度英國より軍艦差向別紙申立之通開戸不申候ハヽ、直樣戰爭可及旨且將軍留

守中之儀故京都迄承ニ差越候日積を以申立候日ゟ廿日を相待返答無之候ハヽ直様戰爭仕掛候歟之書面ニ御座候右廿日
ゟ三月八日ニ相當り申立之趣ハ素り難承屆儀ニ付何ニ茂戰爭ニ及候ゟ必然ゟ付別而ゟ大坂湊之儀者早々警衛一致依而
者諸大名夫々ニ差遣候樣仕度江戸之方茂和宮御方其外茂在城之儀有之留守中小人數ニ而者守衛難行屆夫々手配申付度
右ニ付水戸中納言儀最早旅中ゟ存候間早々引歸し江戸守衛可致旨申遣度奉存候大樹旅中故不取敢此段奉言上候以上

二月廿六日

尾張大納言
一橋中納言
松平春嶽

右一紙

此度横濱港ニ英吉利軍艦渡來仕昨年島津三郎儀江戸出立之節於生麥三郎家來英吉利人を及殺害候付三ヶ條申立何ゟ茂
難開屆候付而速ニ可開兵端茂難計候間諸大名銘々藩屏之任相立候樣差向海國之者ニ御暇被仰出候樣仕度奉存候得共尚
叡慮如何可被爲在哉奉伺候以上

二月廿六日

慶勝
慶喜
慶永
容保
豐信

右一紙

大意

一今日奉申上候儀者將軍ゟ直ニ可奉申上候處若年ゟて不行屆之事ゟ付名代として奉申上候事
一幼年ニ付井伊掃部頭等ニ萬端打任候處不政之事罷有之由追々承知仕深恐縮之至奉存候以後盡力奉安叡慮度候事
一和宮御方御下向之御禮
　但右等ニ付而ゟ久世大和守等不政之取計有之深く奉恐入候事
一去月廿六日夜尾張大納言一橋中納言松平春嶽殿下ニ釜上以書狀申上別紙二通
一前條ニ付翌廿七日一橋春嶽等釜内右前夜之條言上ニ相成候申立之ヶ條難差宥儀ニ付其旨相答於右者從彼可開兵端之間
　其心得等江戸表ニ申遣置候由言上

二月廿七日朝廷本藩に對し英船渡來につき防備の爲め藩主國に就くことあらば特に京都警衛として多少の兵を留め置くべき旨を命せらる

〔江戸京大坂 鹿崎長崎 返達御用狀扣、文久二年十二月 御記錄〕

二月廿七日夜傳奏樣方學習院ニ御留守居御呼出釜政姉小路樣方御渡之御書付寫
今度英吉利船渡來ニ付夫々防禦之次第も可有之就而者歸國ニ可相成哉若於歸國ハ精選之士應在京之人數多少　朝廷爲
御警衛當地滯在有之候樣關白殿被命候事

二月廿七日所司代牧野忠恭本藩留守居を召喚し英人の要求聽許し難きを以て或は開戰の避くべからざるに至らんことを告げ之に備ふる所あらしむ

〔江戸京大坂 鹿崎長崎 返達御用狀扣、文久三年 京都諸扣〕

（二月廿七日所司代ヨリ）

此度横濱湊ニ英吉利軍艦渡來昨年島津三郎儀江戸出立懸ケ生麥に於て三郎家來英吉利人を殺害および候儀ニ付三ヶ條
ツマニ
細川越中守家來に

之儀申立何れ茂難聞屆筋ニ付其趣を以可及應接候間速ニ兵端を開き候哉茂難計仍而者銘々藩屏之任ニ有之候ニ付夫々備向手當も可有之候間爲心得相達候事

二月廿七日幕府英人と應接の結果を慮り在京の諸侯に歸國を命じ兵備を盡さしむ

〔魚住文書尊攘雜錄〕

文久三亥二月イ

一此度横濱港ニ英吉利軍艦渡來三ケ條之儀申立何之も難聞屆筋ニ付其趣を以及應接候仍而速ニ爭端相開候事ニ付　御暇被　仰出候間藩屏之任不失樣可盡粉骨候

右之通ニ而京地出立之面々左之通イ

松平出羽守
青山因幡守
松平越中守
加賀中納言
松平隱岐守
（榊原式部少輔
松平兵部太輔
溝口主膳正
松平淡路守
同　越前守）

此御兩家猶御留

因州樣肥前樣御隱居藤堂樣其外ニも段々御願下ニ相成昨今近々京地御出立此方樣ニ之京地御警衛之儀被爲蒙　仰只今分ニ而之御歸國茂何程ニ可被爲在哉薩州ニ之最早疾軍艦押廻り候抔と風說之通ニ候得之御國元も彼是御混雜哉ゝ相聞候事

亥四月十二日寫之

二月廿七日足利將軍の木像を梟首せし者を捕ふ

〔投筆餘編〕

師岡節齋　常陸ノ人
建部建一郎　下總ノ人平田門人
宮輪田雄太郎　信濃人追捕ノ時殞命
三輪田綱一郎　常陸人
青柳竹之助　會津領ノ人平田門人
長澤眞古登　京町人
高松越之助　因州末家鳥取藩生追捕ノ時殞命平田門人
長尾郁三郎　會津藩間諜
仙石定雄
大庭恭平

右二月廿七日昧爽會津藩之者共より召捕

〔京都諸扣、江戸京大坂長崎返達御用狀扣、御記錄〕　文久三年

文久二年十二月

當月廿二日之夜尊王之名義を假り私意を以横行ニおよひ足利三將軍木像之首を拔取梟首ハ為し種々之雜言を書顯候聞へ有之者共召捕候畢竟　朝廷官位之重を不憚奉輕蔑　天朝之至宥免難相成猶吟味之上罪科ニ可處事ニ候乍去精忠正義實ニ尊攘を志候者之於　朝廷固り被遊御滿足幕府ニ而茂御採用相成候事ニ候得之聊疑心無之忠義を可勵候若不心得之者過激之所業ニ及ひ　帝都を爲騷候者有之候ハヽ急度取鎭方可被取計候

二月廿七日

右之趣松平肥後守殿依御沙汰各樣ニ茂申達候樣被申付候以上

二月廿七日

永井主水正組與力
關根環三郎
石橋仲太郎

諸　大　名　方
諸　御　旗　本　方
御家來中

右之通御心得可被成候以上

二月廿八日

青地源右衛門　様
中神齋之助　様

眞野一太郎
木付源八郎
木多富彌太郎
石島牧之助

萩野祐七郎

〔山田十郎引取書〕

浮浪之徒足利將軍之尊像等持院ニ有之候ヲ盜出於三條河原奉誅不都合之書付等御首ニ添置候事有之會藩エ召捕候樣被仰付候間潛伏之ケ所々々搜索ニ相成差押或ハ討取捕縛之面々御所置方之儀諸侯方エ御問下ニ相成候趣長藩人ヨリ承候間自然此方樣エ御問下有之候者右寄之次第上言可仕ト存草稿認置候次第左之通

神葬微賤之私共愚迂管見不憚奉歎願候儀實以恐懼之至奉存候得共先般刻薨之言御採用被遊候段難有被仰付有之候ニ付鄙衷ヲ隱シ罷在候儀ハ却而奉恐入候間心情ヲ盡上言仕候此節浮浪之者共不容易亂行相働候ニ付被召捕候段承及候全躰右之者所行貴賤之分別無之且種々雜言等書顯候始末其罪科素難通儀候處其心情ヲ推察仕候得者全ク私意ヲ挾候儀ニモ無之尊攘之義心ヨリ狂發仕候儀ニ奉存候平素之所行承及候ニ報國盡忠之志有之候者ニ相違無御座候得者何卒

寛大之御仁恵ヲ以昨年大赦被仰付候井伊家ヲ及斬殺候者共之御的例ヲ以非常之大赦被仰付候樣幾重ニモ奉願候萬一右之者共重科ニモ被處候樣成行候得者天下義勇之者且々憤候而離散解體仕候乎又ハ暴横之振舞ニモ及候儀ハ顯然ニ御座候如此聖明之時ニ至候而右樣成行候而者乍恐朝廷之御主意ニモ相叶申間敷候間乍恐深ク御考察被遊寛大之御處置被爲在度且又今般學習院ヨリ諸藩エ御問下ニ相成候趣奉拜承候處浮浪有志之者共夫々御處置被爲在度思召之由ニ御座候然ニ右之通疑懼之心ヲ抱候者共一人トシテ盡力仕候樣モ無御座候得者何卒右被召捕候者共御免被仰付非常出攘之儀ヲ以テ此者共ヨリ夫々御採用被爲在度左候得者當時迄疑懼ヲ抱居候者共モ奮興仕愈以死力ヲ振ヒ報國盡忠可仕奉存候是漢高雍齒ヲ封候古典ニテ可有御座哉ト奉存候近頃承候得者幕府ニモ報國盡忠之浪士餘多召抱ニ相成候內人相書ヲ以追捕ニ相成候大科人清川八郎抔モ初發ニ召抱ニ相成候樣成的例モ御座候間何卒非常出攘寛大之御仁惠ヲ以大赦被仰付度乍恐重疊奉願候野卑之私共天下之禮典素ヨリ奉存候儀無御座候得共如此　聖明之時ニ當テ毫モ人氣ニ懸候樣成事柄者何分傍觀坐視仕候ニ不忍不顧死罪言上仕候恐惶謹言頓首々々

二月廿九日朝廷國事掛は本藩周旋方を學習院に召喚し浪士を以て攘夷先鋒の部隊を編制する事等に關し意見を徵す

〔江戸京大坂 肥崎長崎 返達御用狀扣、文久三年京都諸扣〕

今廿九日午刻學習院ニ周旋方一兩人御呼出ニ付田中八郎兵衛參上之處參政之御方御三人御出席御口達之上御書付御渡有之候尤御主人方ニ御達ニ相成候ニ付無之周旋方見込之御答明日午刻迄之內學習院ニ申達候樣被仰聞候

浮浪有志之輩自然攘夷先鋒被仰付候節者烏合之衆ニ而ハ可混亂左候ハヽハ部伍隊長無之候テハ不叶儀共上惣都督之儀幕府之役人ニ被仰付候テモ攘夷先鋒ト有之候ハヽ忠勤可相勵心得ニ候哉

但先鋒なと之儀ハ不好儀ニ候哉周旋方見込之程令承知度候事（本文答申は三月朔日提出したり）

二月廿九日松平春嶽は英艦の要求に應せさるの方針なるを以て速に爭端を開かんことを虞り特に帝都の警備を嚴ならしむべしとの叙旨を我藩に傳ふ

〔江戸京大坂鄭崎長崎返達御用狀扣〕

二月廿九日松平春嶽様より御家來御呼出御渡之御書付

細川越中守家來に

細川越中守

此度横濱湊に英吉利軍艦渡來三ヶ條之儀申立何れ茂難聞屈筋ニ付其趣を以及應接候ニ付而者速ニ爭端相開候事ニ付何時攝海に軍艦差向候も難計仍而者京地御警衛之儀嚴重ニ被成置度依之其方に御警衛被仰付候條厚相心得守備嚴重ニ行屆奉安　叙慮候樣被仰出候

二月

二月晦日朝廷藩主慶順に更に滯京を命せらる

〔江戸京大坂鄭崎長崎返達御用狀扣〕

二月晦日野宮宰相中將樣より御留守居御呼出御渡之御書付

細川越中守

寫

英夷軍艦渡來不容易形勢ニ付自國防禦茂可有之　思召候得共過日良之助歸國候間越中守猶京師滯在有之候樣尤先頃以來滯京ニハ候得共更　御沙汰候事

二月

三月朔日藩主慶順京地火の番兼務を命せらる

〔日記、御國江戸京都返達御用狀扣〕文久三年二月

三月朔日御所司代牧野備前守樣より御留守居御呼出御渡之

細川越中守家來に

細川越中守

書付寫

此度京地御警衛之儀被仰付候處猶又火之番茂被仰付候條可被得其意候尤上杉彈正大弼に茂同樣被仰付候間可被申合候

三月朔日本藩は浮浪有志の士を以て攘夷先鋒部隊編制等の下問に對し意見書を學習院に提出す

〔江戸京大坂鄭崎長崎返達御用狀扣、御記錄〕文久二年十二月

浮浪有志之輩御處置方之儀御問下之趣奉得其意候然處右有志之輩に攘夷之先鋒被仰付候ハヽ當時藩屏方面之任を受候武士之氣合何程ニ可有御座哉申上候迄茂無之候得共於死戰之場人ニ先を被取候者武門第一之耻辱ニ有之候間後を以先ニ超候振合ニ相成候而者局面ニ當居候者決而承服仕間敷奉存候依而右御處置之儀者文武之大教場を被遊御創立器械衣食を給し學生ニ被成置其器量ニ應し遊軍奇兵と鄭禁門警衛と鄭何そ御用之節々被召仕候御仕法相立候ハヽ孰茂浮浪之名を免一統安堵緩急彌以忠勤相勵可申左候ハヽ兼而總督隊長部伍之制法無之候而者不相叶尤首長之任者忠直謀慮有實行而人々疑惑を不挾人體ニ無之候而者不協儀と奉存候右費用之儀者御目鑑を以向々に被仰付候ハヽ御便利ニ相成可申儀と奉存候以上（本文は二月廿九日下問の答申也）

細川越中守内

三月

下付札　近日彌以切迫之時勢ニ付教場御出來迄之處大寺院歟其外可然御場所段々御用ひ被遊候樣有御坐度候事

青地源右衛門

三月二日在京本藩老臣は藩主慶順の農兵募集汽船購入の儀を認容したるを以て其實行を計るべく藩政府に通牒す

〔文久三年ゟ元治元年迄　自筆　狀　控〕

以別紙申達候此節横濱ニ英國軍艦追々渡來及二十艘有之昨年於生麥島津三郎殿家來英人を致殺害を名として三ヶ條之儀申立勿論可有御聞屆筋ニ無之樣子ニ付而之必定兵端を可開候處對幕府憤怒を抱候事件ゟ無之候間軍艦之薩州ニ可差向との風聞有之就而之御隣境ニ付時宜ニ寄後援茂可有之候得共御留守之御儀ニ茂被爲在候得之被遊御案勞候且又天草之儀守衛等も無之異船碇泊上陸共可爲勝手所柄異人彼處を足溜ニもいたし候ハヽ御領内之患無申計不被得止事御時宜ニ付京都御警衛之儀之御解放被下候樣御内願被仰上御歸國之御含ニ被爲在候得共御差障之筋も御座候而未右之御手數被至兼候間追而御歸國迄之間万事被遊御委任候間瑕瑾不相成樣との旨宮内御二方樣并御一門衆御席中被成下御直書旨候條此上之武備充實之儀之申迄茂無之候得共第一大小炮銃御備御手薄有之候付實ニ繩ふれニ而候得共御國中仕手方之者共重疊倡立候得之一ヶ月四十挺位之出來之見込ニ有之候由太田黑亥和太兼坂熊四郎より内意申出候趣茂有之御内聽奉伺候處可相成丈之新挺出來可被仰付旨被仰出候間彼是御用辨之爲メニ池部啓太并右兩人近日御國元ニ被差下筈御座候間得斗御聞糺可然御差圖候樣有候尤右三人蒸氣船御買揚之儀茂内意申出且啓太より之書付をも相達候付先便差進置候通候然處ヶ樣御出方筋差湊候處ニてハ蒸氣船御買上之儀御參談付可申哉此砌要用之品ゟ之有之何樣得斗可被仰談ゟ存候以上

三月二日

松野亘

連名殿

長岡監物

尙々兼坂熊四郎太田黑亥和太兩人蒸氣船御買上御用懸ニ而勘解由申含候趣茂有先月廿八日致出京候啓太初拙者共ニ内意申出候趣左之通御座候

一此節攘夷拒絶之期限も相決且英國軍艦薩州表ニ差向候付而之速ニ兵端を開キ可申時宜ニ相成申候處御國許外樣足輕人數之相揃居候得共現ニ御用ニ相立候者ハ五六百も可有之歟跡之老人若年之者も有之哉ニ而若御隣境援兵且東西海岸御堅メ等被差出候日ニ相成候而之實ニ奉恐入候次第ニも相成可申哉ゟ付何卒農兵御募被爲在度且小筒も御不足ニ付於所々新規出來被仰付蒸氣船も早々御買上被仰付度右之事ニ臨俄ニ御手も相廻り兼可申候得共啓太列見込之趣も御座候付奉伺尊慮候處思召不被爲在候付右之趣申向候樣被遊御沙汰候付可然御讃談有之度存候尤委細之儀之啓太列ゟ御聞取可被下候以上

三月二日在京本藩老臣は三條實美姉小路公知其他國事掛の堂上等と長州及び諸浪士との連絡公卿の分派等につきて藩政府に報告す

〔文久三年ゟ元治元年迄　自筆　狀　控〕

先月廿二日其御地仕出之雇一昨夜着迄々此元ゟ申達候趣事足不申候付被仰談候稜々御問合之趣御不審も相立御手數相成候段心外之至御座候當時之時勢其御許ニ申向候跡之不日ニ事情打替候事而已ニ御座候而姉小路樣三條樣其外參政懸り之御方々御權威強く關白職之御手を不被經御取切り之事件多く夫と申茂長州侯當表御引拂相成候節万石ニ一人宛之割合を以三十七人之貢士を被遣置其外諸藩浮浪之輩姉小路樣三條樣國事懸之堂上方ニ從順いたし候處ゟ種々煩敷御都合も有之眼前御治世之道之相見候得共強而世殘被成候樣之御都合ニ相趣キ候事時運とは乍申扨々遺憾之次第ニ御座候

併當今丸泰始青蓮宮様兩關白様一橋様春嶽様之御問之御一致之御模様ニ御座候へ共前文浮浪之徒周旋ニ寄正義之言路閉塞いたし長歎息之至ニ御座候何卒御上洛之上眞之御合躰上下一致之場ニ至候得之無此上天下之幸甚候得共甚以無心元御内輪おゐてハ堂上方も三鼻ニ相成居候由相聞然ルニ期限之被仰出殊ニ英國軍艦渡來被是を以見百候得之如何成行可申哉實ニ存亡之秋ニ至申候春嶽様御内話之由江戸表ニ而被仰談置候趣とゝ雲泥之御違何一ッ被仰立之出來被兼候付萬端　叡慮次第とゝ御心得被成候外之無之是も天とゝ御覺悟之由承申候扨備前方出立當月上旬ニも候へ之上とゝ御行違相成可申候御發駕後ニ至候而茂別ニ御用筋被爲在候と申儀之如何成御用ニ而可有御座哉自然被差登候御人數指揮之譯候ハ、御備頭出京當前若又寺院等御借受相成居候跡捌之為ニ候ハ、御奉行御留守居附屬之面々被差出置取扱候而茂相濟可申との經勿論其通之御儀御座候根元太守様之御上洛ニ付而御出京被遊候を帝都御警衛被爲蒙仰此儀之初發良之助殿被仰付置候を太守様御京着ニ付御持直被爲蒙仰候御模様と前以相分候處追而御解放無圖斗御發駕御六ケ敷御様子ニ付御備片手被召登夫ニ御家老一人被差置とゝ申譯を以太守様御發駕猶御備頭被差登候處ニ而備前方被罷下段々と細メ不申付札

當時兩人詰込居候得共百儀之江戸長詰茂被仰付不慮ニ致滯京候事ゝ候得之此上習ふゝらも詰込雖被仰付一人之御供被仰付思召候よゝ本文之通之御儀と奉考候事ニ御座候

而之何分御都合不宜其上備前方之快氣次第出京を茂被仰付置旁前條之通御主意ニ御座候將又御人數登之儀茂御警衛無程御解放ニも可相成御模様御座候ハ、暫之間之儀ニ而御見合被置候而も可宜哉ニ御考殊ニ關東ゟ御警衛等之儀之段々被仰付も可有之候ハ、別段江戸表御伺抔ニ而詰込被仰付と申茂如何程可有御座哉御人數之當分之事候哉永久之積ニ御座候哉後々御問合且御付紙之趣具致承知候然處御人數等之儀江戸御伺と申儀之無御座候且永久詰込と申譯とゝ相見不申候昨朝御警衛猶又被爲蒙仰候次第之別紙申進候通御座候間得斗御勘考被下候而御良策茂御座候ハ、被仰越候様存候御屋敷御買上之一條一ト通被申進候通ニて列藩之振合ニ躍合手數合之様成筋ニ無之候岡崎村地代之案外下直ニ相聞候得共年貢懸り物等之處委敷分り兼申候付岡崎村と未治定至兼申候内英國軍艦渡來事品ニ寄兵端を開可申哉差迫り候時勢差臨居候付被是申談等事繁く御屋敷所柄見分も出來兼其上御警衛御解放御歎訴之通被仰出候御都合ニも相成申候ハ、暫御不用之儀と被考候付先ッ御屋敷御買上之儀と見合可申候追而平穩ニ至候ハ、猶御買上之取計も可仕最前迄之事情と良之助殿御着之上得斗御伺御承知可被下候今日早打之御飛脚被差立候間不取敢御報迄申進候事ニ御座候以上

三月二日　　松野亘

連名殿　　長岡監物

三月三日幕府諸侯を江戸城に會し攘夷に關する評議を開く

〔嘉永七年風説帳〕

一窪田先生ゟ清田殿借受ニ相成候寫

昨三日尾州様溜詰衆御登城ニ相成候處公方様御旅館ニ　勅使參り候而兼而攘夷之儀御請被申上有之候處此度一橋初メ申談期限之決定も有之候ハ、當時旅中ニ而も右之決定ニ可致との　勅命ニ付而ハ早々上洛引返し攘夷可致當時横濱ニ而イキリス軍艦ゟ應接之儀も最早期限も相定候間相斷攘夷可致付而と水戸様ニ茂族館ニ　勅書被下早々關東ニ引返し攘夷可致との儀を大目付竹本甲斐守様早馬ニ而參り昨日尾州様溜詰御登城御相談御決定ニ相成當月九日イキリス軍艦ニ　皇國折合不申候間三郎下死人償金之儀差出不申條約期限ニ相成居候間其段茂可及斷候ニ付承引不致軍仕懸ケ候ハ、御相手ニ相成可申段御答ニ相成申候勝敗之儀相考候而之逃(マヽ)攘夷出來不申　皇國を穢し候而ハ不相成敗軍ニおよひ候ハ、國人共灰ニ相成候而も　皇國之肝要と申　叡慮ニ御座候由明後日ハ惣出仕ニ相成何茂一疊悟を極メ可申との御沙汰ニ御座候

横濱之夷商人共追々荷物取片付船ニ運ひ居候由此度イキリス軍艦兼而備有之候故直ニ爭戰ニ可及旨早く御備相立候由

三月四日夕

文久三年

三月三日本藩相州備場の警衛を免せられんことを幕府に申請す

〔相州御備場御用一件、尊攘錄御建白御國議、京都御警衛一件〕

御所司代牧野備前守様に三月三日御使者御留守居を以被差出同十七日御付札御用御渡之

御書付寫

私儀暫滯京　帝都御警衛被　仰出置候處此節横濱港に英吉利軍艦渡來三ヶ條之儀申立難被聞屆筋候付速に爭端を開何時接海に軍艦差向候茂難計仍而者京地御警衛之儀嚴重に被成置度依之御警衛被仰付候條厚相心得守備嚴重に行屆奉安叡慮候樣被　仰出猶又京地火之番茂被　仰付候間急度致手當勤上候覺悟に御座候然處右英船之薩州に差向候との風說專有之左候得ハ必定隣境より兵端を開可申領分之儀海岸茂場廣に而薩海引續居候付一際嚴重之手當不致候而之難相成候處先代以來相州御備場御用被仰付置候付東西懸隔三方之手當重疊無心元當惑心痛仕候昨年品々御改革被　仰出候砌國許より懸隔候場所御警衛之儀付而之追而被　仰出品茂可有之段御達之通に付相州御備場之儀之御用捨被　仰付被下候樣奉願候左候ハヽ彼地出張之人數等早々御當地に引移　帝都御警衛に差加申度奉存候御用多之砌茂以恐入候得共何卒急に被成御沙汰可被下候以上

三月三日　　細川越中守

御差圖之御付札

書面之趣之事實無餘儀次第に付頼之通相州御備場御警衛　御免被成下に而可有之候尤當節夷國軍艦渡來申立之趣茂有之折柄に候間代り之者被　仰付候迄ハ是迄之通其儘可被相勤候

三月四日將軍家茂上洛して二條城に入る

〔文久三年京都諸扣〕

晴三月四日

一將軍樣今日大津驛より二條　御城に被遊　御着候事

一御國より參居候御飛脚今日江戸に差通候事

一公方樣今日二條に　御着　城付而六半時之御供揃に而被遊　御登　城旨被　仰出候段昨日達有之候事

一明朝之　御登　城御痼積氣に而御延引被　仰出置候處被爲押候而被遊　御登　城旨猶被　仰出御刻限之最前之通六半時に而候段達有之候事

但最前之　御出且御延引之儀扣略之

三月四日來十一日攘夷祈願の爲め加茂行幸將軍家茂供奉すべき旨を仰出さる

〔文久三年京都諸扣〕

昨夜坊城大納言樣より御留守居御呼出別紙御書付一通被成御渡候間則相達申候以上

三月五日　　御用人中

長岡監物殿

松野豆殿

來十一日卯刻賀茂下上社　行幸供奉被　仰出候事

衣冠單指貫帶劒之事

騎馬之事

三月四日在府閣老井上正直は英艦要求の條件許否に關し事變の發生を慮り特に警戒を嚴にすべき旨を各藩に通達す

〔御内勅等書拔、萬延元年十月ゟ御同席觸寫御目付樣御廻狀寫控〕

（三月四日井上河内守渡）

大　目　付に

此度神奈川表に英國軍艦數艘渡來重大之事件書翰を以申立來ル八日迄ニ御決答無之候ハヽ、船將之職掌を盡し可申旨申立候右者不容易儀故應接之模樣ニ寄可開兵端も難計候間差圖次第出張之心得を以人數等手當可被致候御固場所之儀者猶相達ニ而可有之候尤御留守中之儀ニも有之候間猥ニ動搖無之樣末々迄精々可被申付置候

右之趣萬石以上之面々に可被相觸候

三　月

別紙

大　目　付に

右同文差圖次第出府之心得を以人數等手當可被致候尤御留守中之儀ニも候間猥ニ動搖無之樣末々迄可被申付置候

右之趣關八州萬石以上之面々に可被相觸候

三　月

三月五日大政舊の如く將軍に委任すとの勅諚あり

〔尊攘錄皇武令〕

六條侍徒樣ゟ元田に御借被成候寫（抄）

一舊冬攘夷被仰出奉畏入追々奉伺候　叡慮之通人心一致ニ無之候而之難出來奉存候然處井伊掃部頭等不政之取計有之以來今ニ諸人疑惑仕號令不宜姿御座候是迄茂都而將軍に御委任之儀ニ之候得共猶又御委任被成下候儀ニ御座候ハヽ、天下ニ號令を下し外夷を掃除仕度此段奉伺候事

三　月　五　日　　慶　喜

征夷將軍之儀是迄通御委任被遊候上ハ彌以　叡慮遵奉君臣之名分相正闔國一致奏攘夷之成功人心歸服之處置可有之候國事之儀ニ付而者事柄ニ寄直ニ諸藩に御沙汰被爲在候間兼而御沙汰被成置候事

右一紙

〔嘉永七年風說帳〕

三月八日江戸より到來

一亥三月五日井上河内守樣御渡之御覺書寫

大　目　付に

覺

今度御上洛御在京御日數十日ゟるへき旨於京都被仰出候旨於御旅館被仰出候此段爲心得向々に可被達候事

三　月

三月六日在府閣老は對英談判の結果或は攘夷の決行となるべきを以て各報國の赤心を失はず忠節を盡すべしとの命を傳ふ

〔御内勅等書拔、嘉永七年風說帳、御江戸京都御返達御用狀扣〕

三月六日井上河内守樣御渡（風說帳には「三月六日惣出仕之上於席々達之豐」とあり）

此程相達候通英國軍艦渡來申立候趣實以不容易儀ニ候素より御兵備御充實ニも無之殊ニ御留守中之儀ニ付還御以後御決答可有之筈ニ候得共最前申立候趣も有之候間此上應接之次第ニ寄速ニ開兵端候儀無之とは難計自然右樣之時變ニ至

候時之假令御兵備御手薄御勝算無之候共不得止儀盡死力防戰之覺悟ニ而可有之旨此度御旅館より厚被仰越候趣も有之候間尙銘々報國之赤心を不失候樣厚心懸忠節を盡し候樣可被致候事

三月六日幕府は英艦渡來につき諸侯に命して江戸灣の防備を嚴にせしむ

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

三月六日

申渡候書付

間部安房守

此度神奈川表に英國軍艦數艘渡來候付御殿山下警衛被仰付候間最寄り寺院等へ穩便ニ人數揃置時宜次第可及差圖候間其節早速固メ場所に相詰警衛可被申付候

岩城左京大夫
津輕式部少輔
松平山城守
松平爲五郎
久世謙吉

同文言越中島調練所に

同文言濱御庭内に久世謙吉にも相達候間可被得其意候

同文言大森町打場并最寄に尤山内遠江守にも相達候間可被得其意候

右於御白書院緣頰老中列座河内守申渡之

此度神奈川表へ英國軍艦數艘渡來ニ付濱御庭に警衛被仰付候間御庭内へ穩便ニ人數揃置時宜次第可及差圖候間其節早速固場所へ相詰警衛候樣可被申付候尤松平山城守にも相達候間可被得其意候

安藤隣之助
山内遠江守

同文言

羽田表最寄寺院等へ穩便ニ人數揃置ゟ下同斷

同文言大森町打場同所内へ尤松平爲五郎にも相達候間可被得其意候

右於河内宅銘々家來呼書付渡之

河内守宅に銘々家來呼達候書付

松平阿波守
松平越前守
松平大和守
松平下總守
井伊掃部頭
松平隱岐守
酒井雅樂頭
眞田信濃守
小笠原大膳大夫

右之面々家來呼出別紙之通御警衛被仰付旨可被達候

文久三年

別紙

此度神奈川表へ英國軍艦數艘渡來ニ付御殿山下御警衛被仰付候間最寄寺院に樣便ニ人數揃置尤時宜次第可及差圖候間
其節早速固場所に相詰警衛候樣可被申付候

三月六日　　下總　馬二十
　　三百五十人
　　貳百人

三月六日本藩は幕府屢々英艦入港に關し不虞に備ふるの令達を發すと雖も我在府藩兵の寡少にして幕意に副ふ能はさる所以を開陳して其指示を求む

〔嘉永七年風說帳、御國江戸大坂返達御用狀扣、尊攘錄皇武令〕

御用番井上河内守樣に御内慮伺之書付寫并卽夕御差圖寫
此度神奈川表に英國軍艦數艘渡來付而御觸達御座候右者御在府並關八州之御方々樣に御差圖可被成儀と奉存候得共誠
不容易儀ニ付越中守留守中之儀ニは御座候得共有合之人數を以用意等可仕處京都表御警衛等彼是ニ而御當地詰込之人
數追々ニ分配いたし此砌別而減少いたし候付萬一之節御差圖御座候而茂差出候程之人數迎ハ無御座候間自然屆兼候儀
茂可有御座段先月御用番松平豐前守樣に申上置候通ニ而深懸念罷在候儀ニ御座候然處越中守儀者相州御備場御用被仰
付置候付御上洛御留守中別而手厚ニ可心掛旨別段御達之趣茂御座候付彼表之儀は彌以手厚ニ相固候心得ニ御座候處此
節者御當地御急務之儀と奉存候間自然之節は相州表詰合之人數呼寄候樣可仕哉右之趣　御内慮奉伺候以上

三月六日　　細川越中守家來　清田新兵衛

御書取

内意之趣尤ニハ候得共相州御備場之方も嚴重ニ無之候而ハ不相成儀ニ付御備場之儀ハ共儘差置當地之儀ハ萬一非常之
節ハ先有合之人數差出時宜ニより呼寄候樣可仕候事

三月六日日出藩使者を熊本に遣はして擁夷斷行に際し隨時本藩の策應救援を乞はしむ

〔御國江戸大坂返達御用狀扣〕

春暖相催候處越中守樣彌御勇健被成御座舊臘御國元御發駕御出京之趣承知仕御勤勞之儀ニ奉存候京地御見舞之使者差
出度心得ニ御座候得共彼地之御模樣計り兼候付御國許に以使者得貴意候一昨年以來家來之者より御家臣中に御賴談ニ
及申候處武器御世話被成下候段厚辱次第ニ奉存候猶此上追々相願候品茂有之萬事宜敷御沙汰被成下候樣奉願候委細者
御家臣中に可及御懸合候儀昨年格外之御變革武備充實之儀被仰出候處不如意之勝手向平世公務並家中扶助行屆兼候仕
合ニ而自然攘夷等之御手續ニ推移候而者領分内海とは乍申濱海之城郭迚茂自力防禦難出來深ク心痛罷在候加之分家内
匠助勝手向極々及窮迫是迄扶持相加候得共武備に至候而ハ何分行屆兼旁以當惑仕候申上候迄も無御座候得共先祖格別
之御由緒を以日出城築之刻三齊樣御直ニ御差圖被下置候而緩急之節者何時も御救援被成下候御誓約之趣今日ニ至迄家
來共一同承知仕居候然處昇平日久武備弛廢自然御疎遠ニ相成不行屆之段今更慙慚之至奉存候何卒今度改而御舊約ニ御
復し非常之節ハ御國元又は鶴崎表御警備之内より御救應被成下候樣以前共筋に被仰渡被成下度奉願上候左候者家來共
迄安堵可仕候方今諸家樣　皇朝幕府之御際御周旋ニ付越中守樣に　勅諚之旨被爲在御出京之儀ニ候得者可然時宜ニ於
拮据被仰付御幕下ニ屬し相應之忠勤遂候樣御差圖奉希度存念ニ御座候以上

木下飛驒守使者　米良介次郎

御家臣中ニ　飛驒守より

春暖彌御堅固、、、然ハ武備之儀ニ付ては是迄段々御世話ニ預り厚厚存候此度改而越中守樣ニ御賴申上度儀有之候付使者差上候宜敷御周旋被下度猶別段御賴談申入候ハ領分狹小所務至而減石平常ニ而茂家中扶助行屆兼候處自然出京可致歟又ハ攘夷之期ニ及候而ハ必至之窮迫狼狽ニ及可申候其申上兼候得共御融通金之內ニ而も拜借被成下候樣御取計之程偏ニ賴入申候委細ハ使者より御聞取候樣右御賴旁從前之御挨拶乍序申述候以上

木下飛彈守使者　　米良倉次郎

三月六日本藩外使日向德藏は横濱在留外人の動靜及ひ英人要求の概況を報告す

〔尊攘錄探索書、安津免久佐〕（文久三年）

覺

當時横濱表へ在留之異人動靜船數等之樣子承繕候樣被仰付一昨夕出立仕翌朝同所御出入今西宏藏方ニ罷越承繕候處英船十三艘佛船五艘蘭船三艘程渡來碇泊罷在尤英船八九艘佛船五六艘跡より本國出帆いつれも日本へ向渡來可致旨英國マトロスより申出候由

一右在留罷在候船々乘組人數之儀英國軍艦壹艘ニ千百人程乘組其外英佛船共三四百人位ッ、乘組居候由

一英人より申出之趣昨年同國英人を於生麥殺害致し候島津三郎樣一類之者御召捕夫々御仕置被仰付度自然右樣之儀難相成候ハ、償金として四百萬ドル御差出ニ相成候樣いたし度右御返答當月九日迄ニ承知仕度御留守中之趣ニ付自然夫等ニ而右日限迄ニ御返答無之候ハ、大阪ニ相廻り將軍家ニ及應接左候而御模樣次第ニ者薩州ニ軍艦差向可致戰爭旨申立候由此節渡來之異船いまた壹艘も出帆不仕いつれも在留罷在候由

右之通ニ而御應接振等委敷儀相尋候へ共宏藏一兩日不快ニ而引入罷在其後御應接有無之處同人相辨居不申巨細之儀難相分御座候惣體同所市中抔格別動搖之趣ニハ相見不申横濱內ニ近來凡四萬坪計之新地出來石場所ニ異人館取建之樣子ニ而普請最中ニ御座候且在留之異人横濱關門外ニ遊歩いたし候へ共英人之相見不申佛蘭西而已ニ御座候其外何そ相替候儀無御座候以上

三月六日　　日向德藏

三月上旬會藩士浪士放免に關する朝命を非とし傳奏に直訴す

〔京都みやけ〕

一三月五六日頃會藩士多分學習所へ罷出候由是ハ先頃被召捕候浮浪共之儀ニ付　朝廷方之御沙汰ニ有志之聞有之哉ニ付早々出牢爲致可申との事ニ付重々遂吟味候樣との御沙汰ふらハ御尤之儀早速御受可申上候へ共風聞を御取上ケニ而出牢爲致可申ハ餘り之御沙汰殊ニ罪狀も有之儀故早速御受難仕趣ニ而兩傳奏へ及直訴候處御兩役ニも御一言も無之由其後野々宮卿方春嶽公へ右御沙汰之節ハ病氣ニ而出勤不致頓斗不承知之旨御書翰爲有之由實ハ遁辭之由

三月七日將軍家茂參內して大政委任の勅諚を奉承す

〔京都みやけ〕

一三月七日　征夷將軍御參　內小御所御拜　天其後於學問所兩殿下左右大臣大將軍御侍座ニ而御親く御說話等有之御菓子抔被下之夜九ッ時御退出之事

〔尊攘錄皇武合〕

（六條侍從樣方元田ニ御借被成候寫の一節）

都而是迄之通御委任之儀蒙御沙汰奉畏候然上之御國政向都而前々之通差圖仕候事ニ御座候得共　叡慮之趣者無御伏臓相伺度候此段奉申上候事

三月七日

關東政事向不行屆之儀茂御座候ハヽ、無御遠慮御教諭被爲在候樣奉願候事

三月八日藩主慶順は支藩細川主米輔の參府を轉じ本藩に部屬して京師を守備せしめられんことを幕府に申請す

〔江戸・京・大坂・鶴崎・長崎返達御用狀扣、大守樣御上京良之助殿御出京一途〕

水野和泉守樣ニ御差出被成候御願出寫

末家細川主米輔儀正月中參府被仰出候付去冬中ニは在所表發足可仕處病氣ニ付延引仕漸々快方ニ付二月下旬押而致發足候ハ。筈之段申越候左候得者近々着阪仕ニ而可有御座候私儀暫滯京帝都御警衛被仰付置此度横濱港ニ渡來之英吉利軍艦より申立之趣付而者速ニ爭端を開何時攝海ニ軍艦差向候茂難計候付京地御警衛厚相心得守備嚴重ニ行屆奉安　叡慮候樣被仰出猶火之番茂被仰付候付而者夫々急度致手當勤上候覺悟ニ御座候然處右英船之急ニ薩州ニ差向候樣子ニ付必定彼地より兵端を開可申隣境之事ニ候得者國許之手當等尙更嚴重ニ不致候而者難相成就而者京地御警衛之人數十分呼登茂出來兼心痛罷在候折柄ニ御座候間主米輔儀私手ニ差加守衛仕せ度奉存候依之奉願候儀重疊恐入候次第御座候得共主米輔此節之參勤者御用捨被成下直ニ致登京帝都御警衛私手當之内ニ相加勤上候樣被仰付度奉願候非常之節私儀致出馬候得は勿論末家共茂召連候儀ニ付是迄相州御備場ニ人數茂差出せ置申候尤右備場之儀付而者委細御内意願茂差出置候通御座候間彼是厚御參談被成下何分ニ茂早々御沙汰之程可然樣奉願候以上（本文指令は同月十六日交附せられたり）

細川越中守

三月八日

末家細川若狹守細川主米輔儀之分知鎭置若狹守者定府ニ而相勤主米輔ハ參勤御暇共前々より本家同樣之割ニ被仰付置候然處先般參暇割合等各別御猶豫之儀被仰出越中守儀者來ル丑年夏詰主米輔儀之當亥年夏詰ニ被仰付候前々本家と參暇割合相狂候節之矢張同樣之割合ニ被成下候樣奉願共通被仰付候去冬茂右之趣を以奉願度奉存候得共各別成御猶豫被仰出候砌ニ付相憚且之主米輔參府比合ニも差向候事ニ付旁當年之共儘相勤後年之處之御繰替之儀追而奉願度存念ニ罷在候間何卒深御汲取被成下候樣仕度乍恐此段申上候事

（三月十六日指令）

細川主米輔此度之參勤御用捨被成下候間早々致登京共方御警衛手當之内ニ差加相勤候儀願之通被仰付候事

三月八日一橋慶喜は應司關白に諸侯の攘夷策略意見書を送り且つ對英談判恐く破裂に及ふへく此際人心の一致を肝要とする旨を陳ぶ

〔尊攘鉄皇武令〕

（六條侍從樣ゟ元田に御借被成候寫の一節）

一大樹上洛ニ付昨年奉申上候諸大名之策略見込差出候分奉差上候事

一英夷申立候廿日期限之儀ニ付應接申遣置候得共多分戰爭ニ可及事

一都而之策略豫メ屹度ハ難期海岸之向者御固之者胸中ニ可有之事

一人心一致肝要之事

一戰爭ハ彼より兵端相開可申事

三月八日

文久三年

殿　下に

三月十日藩主慶順英艦薩海に廻航すとの風聞あるを以て親書を老臣松野亘に授けて歸藩せしむ

〔文久三年京都諸扣〕

三月十日

一亘儀今日爰許被遊御差立候事

〔仝　書、文久二年、慶應元年迄自筆御用狀扣、神庫文書五十八印一番〕

方今不穩事體殊ニ夷船薩州に相廻候趣ニ付而者國中之人氣動搖茂難計早々歸國を茂奉願度候得共帝都御守衛被仰付置候事ニ付先名代として共方儀國許に差下候條自國之固者勿論人心鎮定麁忽之擧動無之樣澄之助良之助一門を初役々一致ニ盡力之程深賴入候存念之趣は猶可申聞候

三月十一日攘夷祈願の爲め車駕賀茂に幸す

〔文久三年京都諸扣〕

晴　三月十日

一亘儀今日爰許被遊御差立候事

明日　賀茂下上社に　行幸之　御供奉被　仰出候付今晩正四半時之御供揃ニ而一ト先一條樣に被爲　入夫より御揃所學習所に　御出左候而　御供奉被遊御勤旨被　仰出候此段相達申候以上

三月十日

猶々御供并　御目通ニ罷出候而々被禁服穢候以上

長岡監物殿

沼田勘解由殿

御用人中

〔仝　書〕

雨　三月十一日

一今日賀茂下上社　行幸供奉無御滯被遊　御勤奉恐悦候事

〔御國江戸京都返達御用狀扣〕

三月十六日　宮村、藤本、尾藤、河口より　三月廿三日着

一去十一日賀茂兩社　行幸ニ付御供奉無御滯被遊御勤御菓子御頂戴且又公方樣御拜領之御菓子御煮染茂御取分ニ而被遊御頂戴奉恐悦候

三月十一日在京本藩老臣は在府當局に對し英艦薩を襲ふの噂あるを以て自國海岸防禦等談合の爲め松野亘下國の件沼田上京郡出府の件時局を慮り田町藏米移轉の件及ひ在府不用家屋解崩の件等を通牒す

〔文久二年、慶應元年迄自筆御用狀扣〕

以別紙申達候京地之事情追々打替候段之先便ニ茂申進候通候處今般英國軍艦渡來薩州に茂押向候由風聞有之候付而之差寄御自國御防禦筋等之儀深被遊御懸念候付諸事爲御相談亘儀昨日爰許被遊御差立海上之早打小倉路中之急ニ而被差越候別紙御書取寫則差進申候

一勘解由儀此砌段々御用被爲在暫致滯京候樣被仰付候然處至密急ニ申上候儀御座候而供廻等ニ至迄簡易ニ而出京いたし

候末暫滞京被仰付此元時勢此儘難押移候付殘置候付家來武具等ニ至迄此許被取寄申筈ニ候左候而御用濟次第猶又歸府仕候得之程交代ニも差向往返ニ時日を費先之手數合せ迄之事ニ成行申候處當時江戸表之儀も御用多旁郡表則儀御家老代役として用意濟次第早々出府被仰付京地に茂立寄候樣被仰出候條被及其達候樣一昨九日早打御飛脚を以御國に申向置候事ニ候

一方今之事體兵粮乏敷候而之難相濟差寄田町御藏之儀海岸ニ臨万一之節甚無心元候間目白臺に兵粮貯之儀奉伺候處聊思召寄不被爲在候尤運送之便利等何程ニ可有之費濱町ニ而茂可然哉と御沙汰茂被爲在候得共成丈無心遣所柄之方可宜其許見込を以御藏取建田町御藏米を早々御移ニ相成候樣可被取計候

一於京都御屋敷御買上之儀茂場所等治定ニ至兼申候尤御地御屋敷々々御不用之御住居御長屋等解崩之儀之作頭見込之書付を以奉伺置候間不日ニ御沙汰之趣可被爲在右御模樣相分次第猶急便を以可申達候

一太守樣京地御引拂且相州御解放等之儀御留守居抔申談專ら心配いたし居候へとも猶公邊茂御事多折柄未御急埒ニ至兼申候御地御役々茂相揃居不申候付而之萬般至而御厚配可有之と致遙察候右等之趣爲可申達屈飛脚差立候事ニ御座候已上

三月十一日

松下鶴記殿　　沼田勘解由
　　長岡監物

三月十一日本藩偵吏は英國軍艦渡來に關する事情を探り幕府と英佛公使との交渉の概況を報告す

〔探索書〕（文久二年三月以來）

亥二月英國軍艦渡來致候事情大略申上候

文久二年戌五月英國ミニストル官名ニール人名旅館高輪東禪寺おゐて同所御固メ松平丹波守樣御家來ミニストル附番兵二人を殺害ハ為し當人ハ屋敷に引取自殺ハ為し候得共一体無謂亂暴之振舞ニ付ミニストル茂大ニ立腹色々苦情申立結極右殺害を受候二人之者之妻子扶助金として一万ボント（ポント）ハ大抵四ドル半ニ當ル を日本政府より御償ひ可被成旨申出候所彼是御返答延引ハ為ス居候内同年八月生麥村おゐて島津三郎家來英國商人壹人を殺害し其外同伴之者兩三人に疵付候儀ニ付御老中樣方より同國ミニストルに厚く御詫有之候得共中々承引不致此一條ニミニストル獨斷ニ而取計出來不申候ニ付本國に申遣本國政府より御挨拶可及旨申出何事も談判不致候付猶又御老中樣方より英國政府ニ直ニ御斷狀御遣相成候得共返答不來候其後ミニストル彼生麥一條ニ就而之何茂不申出東禪寺殺害一條之償金一万ボントの儀ニ付度々申立候得共公義ニ而御評決難相成因循相成候内亥二月初旬四五日比より横濱表ニ英國軍艦追々入津之風聞有之八日比ニ至り十艘余も入津ハ為し候尤右軍艦渡來之儀之去冬中ゟ亞米利加佛蘭西之ミニストルも内々爲御知申出候得共其邊ニ之一向御構無之此度之軍艦入津ハ為し候まてハ矢張右償金一万ボントを程能く御斷も被成度思召ニ而度々御懸合有之候公方樣御上洛御急き二月下旬御船ニ而御登り可被成趣ニ而既ニ御雇御船之爲メ「ライモン」と申ス蒸氣船を業々上海迄御注文相成右船二月八日來着ハ為し候所九日ニ至り海路御見合せ陸路ニ而彌十六日御發駕と御治定相成十一日御老中水野和泉守樣板倉周防守樣より御書翰を以之其趣各國ミニストルに爲御知被成右御書翰英國ミニストルに翌十二日相達候所即刻返事指返り其大意

公方樣御上洛之儀唯今承知仕候然處今般英國政府より船まて命令有之昨年來度々殺害等之儀ニ付大事件可申上旨被申付近日書面を以委細可申上積ニ御座候此度之儀之如何樣之御指支有之候とも急度御決答相願候儀ニ付御上洛御留守中抔之御辭柄ニ而御決答御延引不相成樣可被成萬一御遲滞之儀も御座候ハヽ御國之爲メ以之外之儀指起り可申此段爲念申上置候

右ミニストルより之書翰十一日夕刻相達し候所翌朝泉防兩公より左之御返翰御贈被成置公方様御供ニ而兩公とも御發駕相成候其書翰大意

昨日以書翰被申越候趣委細承知ハ゛し候得共最早今朝相成候得ゑ御支度も全く御出来今更御上洛御見合と申ス儀も難相成ニ付近日可申立儀も候ハ、御旅館より可然御挨拶可有之候

二月十九日英國ミニストルゟ長書翰指出し重大之事件申立候其大意

去夏東禪寺おゐて英國番兵二人殺害を蒙り未タ其落着無之内又候同秋生麥村ゑて島津三郎之臣下英人を害し候儀本國政府ゑて殊之外立腹ハ゛し急度御挨拶之致方も有之候得共御老中より本國に御詫之趣も有之候付東禪寺一條ハ以前より申上候通り其者妻子扶助として一萬ポント御償ひ生麥一條ハ元ト御不取締之儀ニ付日本國之罪科として政府より明細之通り證文御指出且償金十万ポント御拂可被成尤薩州にゑ別段軍艦指向ケ其罪人を吟味ハ゛し英人之眼前ニ而死刑ニ行ひ且償金として二万五千ポント爲指出可申治定ハ゛し候併し此儀は預メ薩州に爲知置度ニ付公義より薩に御役人御遣可被成若し左樣相成候處右役人之英國軍艦に爲乗込御送り可申且ツ今般申出候誤り證文并償金十万ポントゝ之儀ニ付大君ニも可被御上被是時日相かゝり候事ニ付御決答ハ二十日猶豫可致間早く御處置可被成一体今般之儀ニ付十万ポント御償之儀候而已日本政府ニおゐてハ決メ御損亡之譯ニ無之萬々一戰爭ニ而も相始り候節ハ是非共償金を英國に御指出之儀ニ付數百萬之御出費可有之其邊之所も篤と御勘考可被成候

二十二日御留守御老中松平豐前守樣井上河内守樣より不取敢御返翰御遣相成候大意

來翰之趣委細承知ハ゛し候得共御上洛御留守之儀ニ付何分決答之儀ゑ當所ニ而難取計（而落カ、）候間早速御旅館に可申上其上ニ而回答可及存候書中薩州に軍艦を指向候と申ス茂無據次第ニゑ候得共愛〇人心不居合之折柄右之儀有之候而ゑ一層之不都合を增し候儀掛著共おゐて誠ニ當惑致候何とか其邊諒察被致思留り候儀ゑ出來間敷や深く所希右之次第ニ付役人を薩に遣候儀も難出來候間其段承知被致度不取敢回答ニて申入候

右御返書御遣相成候極急飛脚ニ而英國ミニストルより之來翰を公方様御旅館に御指上相成候所三月朔日外國奉行兼帶大目付竹本甲斐守様四日市宿より御引歸り相成委細御旅館之御（都カ、）時合相分候然所當時御旅館ニ而之御内情ゑ英國より申立候一條ハ無據次第ニゑ候得共何分京師に被爲對其求ニ應し難きニ付雙重ニも談判ハ゛し程能相斷候方可然萬一承引不致候得ゑ不得止戰爭ニ及候とも無致方と申ス御趣意之由御座候右ニ付當所御留守御老中樣ニ而尚又御評議有之不取敢二十日之期限御延引可被成御趣意ニ而三月二日外國奉行衆を蛤御門利加之ミニストル方に御指遣シ右期限方御願尚又同四日英國ミニストルに御書翰御遣シ今般之儀早速公方様に申上候得共何分御旅中之事ニ而御決答難相成候付還御まて今日より三十日と積り其間猶豫致哀度段折入御願被仰越佛蘭西ミニストルに右一條ゑ付取扱方御願且竹本甲斐守様外國奉行柴田貞太郎樣横濱に御出佛蘭西ミニストルに御面談ニ而同樣御願翌五日若年寄有馬遠江守樣も同所に御出張佛蘭西ミニストル英國ミニストルにも精々御懇願相成候所同七日英國ミニストルより御老中に返翰指出候其大意

先月御書翰被下尚又竹本殿佛蘭西ミニストルに御話之趣承候得共全躰今般二十日之期限を御延引御願被成候ニ御趣意殆不相立元ト公方様御發駕前明白ニ申立置候儀も有之御留守中ニ而も萬事御決斷相成候樣被成置御上洛可有之筈之處無其儀何とも難心得儀ニ御座候併シ精々御懇願之趣も有之無御據事を乍存强而承引不致も不本意ニ付迚も還御まて三十日抔相待候事ハ出來不申候得共今一應御旅館まて御文通被成候日限として當月廿日より十五日之間猶豫可致其上ハ又候御談判有之候とも決メ承引難相成候尤薩州に軍艦指向之儀を私ニ而好き時節を見計指圖可致此儀ゑ全く私存意ニ有之候義ニ御座候

三月八日再ひ英國ミニストルゟ書翰指出候其大意

今般延期之儀ニ付有馬殿重而横濱に御出も可有之やニ承候得共私御決答之所ゑ昨日指出候書翰之通りニ付假令有馬殿御出被成候とも外ニ御談判ハ゛し候儀無之候此段申上候

三月九日御老中より右書翰に御再答御遣ニ相成候其大意

先日より延期之儀相頼候所格別之厚意を以て十五日間猶豫致呉候段千萬忝次第併此方ニ而之先月よりも申入候通何分公方様還御無之而之萬事不都合ニ付先ニ申入候通り三十日延引之處幾重ニも勘辨之上承諾致呉候様頼入候

三月十日未タ英國ミニストルより其返答無之一体今般之儀ハ佛蘭西も英吉利と同意ニ而既ニ三月四日佛蘭西ミニストルゟ御老中に書翰差出申候其大意

今般英國政府より殺害一條ニ付日本に請求致候儀有之此儀之佛蘭西政府おゐても英國之方を尤と存候子細之一体世界中之人民之互ニ親を以て附合可致萬國之通法ニ御座候所日本おゐてハ其通法絶而無之猥りニ外國人を殺害ニ及し候抔全ク戎狄之可致振舞ニ御座候此度英國より申立候義ハ實ニ正理と相心得候ゝ付佛蘭西おゐても斷然と英國之加勢致し江戸海ニ佛國の旗章を飜して亂暴相働き候積ニ付此段預メ申上置候

前段之通り佛蘭西も今般之儀ニ付英吉利も一味可致候得共佛蘭西之別段申立候儀有之候共ケ條之先般日本之使節佛蘭西に參り候節兵庫新潟兩港江戸大坂御開き之延期御頼相成彼方ニ而承引致候得共右御承引申上候代りものとして對馬嶋開き又外國人御國内を勝手ニ歩行相成候様可致等五六ケ條申立候儀有之委細ハ御使歸府之上日本在留佛蘭西ミニストルと御引合可相成御約束ニ而御歸帆相成候處其後御使之面々御病氣之御斷ニ而未タ佛蘭西ミニストルに御面會無之右之儀佛蘭西ニ而不快ニ存し近日軍艦を以大事件可申立由此儀ハ已ニ同國ミニストルゟも世話有之候儀ニ御座候三月十日柴田貞太郎様海路ニ而上坂被仰付同日御出帆相成候此は當月二日以來之事情御旅館に被申上今一度御評議御伺之爲メと奉存候

右之昨日迄承候事情大略申上候今日は何も不承候

文久三癸亥三月十一日

三月十二日朝廷の事多く長藩の議に出て三條實美姉小路公知政を專にすとの報あり

〔文久三癸亥至慶應三年半夏小笠原備前日錄〕

四月八日晴

三月十二日、江戸發之郵使至京、着京之公用書狀來、公武之事、今日如此、而明日又轉不一定、中間必有妨者、朝廷之事、多出於長藩之議、且轉法輪三條卿、姉小路卿、專政故如此乎、殊攘夷之令出、異人若拒、當討平之云々、

三月十二日長岡護美態本に歸着す

〔文久二年良之助様御上京一途〕

三月十二日

一今朝正六時之御供揃ニ而山鹿御發駕御馬下よゝ惣御行列ニ而二丸に被爲入八時宮内に被成御着候事

〔文久三年京都諸扣〕

去ル十三日御國仕出之屈飛脚今日着仕良之助様彌御平安去ル七日豐前小倉に被成御着候迄之御儀之同所より申來相達候通御座候其後御日積之通御旅行被成候得之去ル十三日熊本御着之筈ニ御座候處御模様被爲在一日御引揚同十二日曉七半時之御供揃ニ而山鹿御茶屋御立御馬下御小休より御行列立惣御供ゝ而二丸御屋形に被爲入　御方々様御對顔等被爲濟夕半時宮内御屋敷に被成御着候段御到來御座候此段相達申候以上

三月廿日

長岡監物殿

沼田勘解由殿

御用人中

三月十四日將軍滯京を延期す

文久三年

〔御國江戸京都返達御用狀扣〕

三月十六日　　三月廿三日着

藤本　河口　よ　梨

公方様御滯京之儀付而一昨十四日御觸達相成候寫一通爲御心得差進申候以上

尚々昨十五日御所司代様ゟ御留守居御呼出御渡之御書付寫茂差進申候右之二通共宮内に御差上ニ可相成ゝ存候已上

水野和泉守様御渡候御覺書一通相達候間被得貴意御同席中不殘様無遲滯早々可有通達候答之儀之先々從銘々不及挨拶

各より伊達美作守方に可被申聞候以上

三月十四日　　大目付

松平陸奥守殿

松平出羽守殿

右留守居

覺

御滯京可爲十ケ日御治定之旨　最前相達置候處猶　御所より被　仰出候趣茂有之候ニ付今暫御逗留被遊候旨被　仰出候　御發駕日限之儀者追而相達ニ而可有之候

右之趣向々に可被達候事

三月

三月十五日一橋慶喜御守衛の名目を以て親兵設置の議を奉承す

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從様ゟ元田に御借被成候寫の一節）

御親兵之儀者毎々被仰出候通是非共被設置度思召ニ相聞名目之儀者御守衛ゝ而茂御差支不被爲在候間十万石以上大名ゟ高割を以人數差出候様急ニ可被申達候事

右請

一致拜見候御親兵之儀是非共御設被思召候間名目者御守衛ゝ相成候而も御差支無之趣ニ被爲在候付十万石以上大名より高割を以人數差出候段奉畏候事

三月十五日　　一橋中納言

三月十五日藩主慶順京民賑恤の料として米一萬五千俵を献せんことを朝廷に申請す

〔太守様御上京良之助殿御出京一途、文久三年京都諸扣〕

應司開白様三條中納言様迄三月十五日御内意之御書付寫

行年京師人民賑給之料として肥後米壹萬五千俵乍聊獻納仕度奉存候尤古米者性合不宜候間當秋新穀を以大阪藏屋敷迄運漕同所に圍置御用之節直ニ御當地に差廻候様可仕と奉存候此段御内意奉伺候以上（獻米ハ三月廿三日　勅許あり）

三月　　細川越中守

〔一條忠香日記抄〕

三月十五日

細川越中守來對面之處應司家相願候一件ニ付寫差出也

（此間に獻米の伺書あれとも略之）

右之儀殿下輔熙公へ被願候處含被置候趣且三條家へも申入置候旨被申に付今日夕方より三條家へ被參趣也

三月十五日幕府は京都の地形に鑑み豫め運輸の便を計り奸商射利の弊を矯め以て事變に臨みて米穀薪炭等の缺亡を防止すべき旨を達す

〔御國江戸京都返達御用狀扣、御文久二年十二月記　錄〕

三月十五日御所司代牧野備前守樣より御留守居御呼出御渡之御書付寫
別紙之通可達旨周防守殿被申聞候間相達候事

三月

京地近海に蠣船渡來致候節ハ勿論平日迚茂帝都御守衛之諸家多人數入込相成候處古來より運送不辨利之土地柄故糧米以下市民食料薪炭等缺乏無之樣專手當之儀從　御所表厚　御沙汰之次第茂有之候條是迄西國北國筋より諸湊廻船致し來候向々定限之外米穀ハ猶更石數相增日用之品可成丈相廻可申候右ニ付水陸驛場問屋共仕來ニ泥ミ無謂手數を懸け運賃等貪候舊弊ハ速ニ相改猶船車造增或ハ新道新川等開拓之儀と茂心付候者ハ其筋に可申出候尤御料之御代官私領ハ領主地頭ニ而方今之御時勢相辨都而直積京着之上拂米等致し不苦事ニ候間何茂皇都非常之御備第一ニ心懸候樣可被取計候

三月

三月十五日本藩番頭志水久馬助以下の藩兵本日より十八日に亘り京都に着す

〔御國江戸往來狀扣文久三年〕

宮本傳右衛門（外二十一名氏名略ス）

右者出京被仰付置候付二月廿九日御國許差立三月十五日京着之事

外ニ輕輩二十一人一同着之事

右者二月廿六日御國許出立三月十五日京着之事

右者二月廿八日御國許差立三月十六日京着之事

右者二月晦日御國許差立三月十八日京着之事

瀬川一郎助（外二十名氏名略ス）

松村十之進（外四名氏名略ス）

志水久馬助（外十七名氏名略ス）

三月十六日在京本藩老臣は松平春嶽辭職の內意あることを藩政府に報告す

〔自筆狀扣文久三年元治元年迄〕

以別紙申達候當地之事情追々打替是ゝ申見居エ茂付兼居申候處今度期限被仰出將軍家十日之御滯在ニ而之英夷之事件茂有之公武御合躰人心歸向之御取計有之候迄之御滯在被爲在候樣ニと御沙汰有之暫之御滯京ゝ相見申候付以往御運ヒも付可申哉然處春岳樣御內輪無御據御譯御座候由ニて惣宰職御斷之御內意有之一橋公初御役々御咄合之筋も爲有之由候得共何分御不安心且御見耳も被付兼是非共表向御願書今日共被差出御模樣ニ付御問柄之譯を以御見舞旁勘解由被差越筥御座候萬一永ク御引入ゝ申ニ相成候得之天下之御爲ニ不宜如何成行可申哉掛念之次第御座候此方樣御歸國之儀も御役々專周旋仕候得共未タ聚ト御模樣茂分り兼申候迚茂御人數共一同御解放ゝ申御運ニハ至兼可申候甚以難濟之御場合ニ御座候併前條之通公方樣御滯京被仰出候付而之此末眞之御合躰全國一致之御處置奉懇祈候事ニ御座候御用人ゟ御

用有之雇飛脚差立候付當時之形勢一ト通申達候以上

三月十六日

沼田勘解由
長岡監物

連名殿

三月十七日朝廷將軍家茂の東歸を止め京師並に近海守衛の策を講じ攝海に於て英人と應接せんことを命せらる

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣ゟ元田に御借被成候寫の一節）

一十七日一橋水野板倉等被召猶小御所從殿下被仰渡尙大樹に申聞候旨奉答

〔御記錄、尊攘錄皇武令〕（文久三年正月より）

英夷渡來關東之事情切迫ニ付防禦之爲大樹歸府之儀尤之譯柄ニ之候得共京師幷近海之守備警衛之策略大樹自指揮可有之候且攘夷決戰之折柄君臣一和ゝ無之候而ハ不相叶之處大樹關東に歸府東西相離候而者君臣之際情意不相通自然間隔之姿ニ相成天下之形勢不可救之場ニ至可申候當節大樹歸城之儀者於　叡慮不被安候間滯在有之守衛之計略厚被相運奉安　宸襟候樣　思召候英夷應接之儀者浪華表に相廻し拒絶談判可有之開兵端候節者大樹自出張萬事被指揮候者皇國之元氣挽回之機會ニ可有之　思召候關東防禦之儀者可然人體相選被申付候樣　御沙汰候事

三月

右三月十七日於小御所關白殿より一橋樣に被相渡候云々

三月十七日幕府は朝旨を遵奉し時變に臨み攻守宜しきを制するの戰略を怠る可らざる旨を各藩に示達す

〔御內勅等書拔、萬延元年十月より御同席觸寫大目付樣御廻狀寫控〕

大目付に

此度英國軍艦渡來申立之趣茂有之候ニ付御警衛被仰付置候面々萬一兵端を開候節各其心得可有之候得共素より土地之形勢を計り銘々策略を以十分防戰之術を盡し候樣可被心得候

右之趣御警衛之面々に可被達候

三月

三月十七日神奈川奉行は對外交渉の結果を慮り横濱神奈川市民に諭し老幼病者等を避難せしむ

〔侯爵細川家書庫文書〕

五月十一日達

横濱神奈川市中來ル廿一日迄ニ引拂之趣今朝申上候處猶又彼地より申越候者同所在留罷在候五ケ國異人とも來ル廿二日迄ニ本國に引取候樣御達ニ相成候付無子細可引取儀ニ之候得共萬一期ニ至亂妨之所業可有哉も難計其節無余儀兵端をも開場合ニ可至候間廿一日迄ニ老人足弱病者等之先相立退男之儀ハ共儘罷在不取締之儀無之樣火之元入念可申付旨昨十七日神奈川奉行支配組頭若菜三男三郎樣御差圖ニ而被仰渡右ニ付彼地御警衛向々手當も可有之外國商館も追々取片付候趣ニ御座候且又異人とも無故引拂候而も諸浪人と唱候者海外ニ待受滯船いたし罷在候由ニ付何等之儀可仕出も難計此儀而已御掛念之趣右三男三郎樣御演說有之候由ニ御座候

右風聞承り候ニ付申上候以上

高輪名主

三月十八日　權左衛門

三月十八日一橋慶喜等參內して將軍の滯京を辭し且つ來る廿一日を以て將軍の東歸すべき旨を達す

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣ゟ元田に御借被成候寫の一節）

一十八日一橋以下參內大樹に申聞候處滯在之儀御請難申上候段言上云々

〔御內勅等書拔〕

三月十八日水野和泉守樣御渡

覺

來ル廿一日當地御發駕東海道還御可被遊旨被仰出候此段向々に可被達候事

三月

三月十八日幕府報旨を奉じて十萬石以上の諸侯に令し萬石一人の割を以て禁闕守護の兵を出すへき旨を達す

〔江戸京大坂鶴崎長崎返達御用狀扣、御內勅等書拔、嘉永七年風說帳、御記錄〕（文久三年四月より元治元年四月迄）

（三月十八日）水野和泉守樣於京地御渡

大目付に

禁裏御所爲御守衛十萬石以上之面々より一萬石ニ付家來一人ッヽ之割を以身體强壯行狀宜勇幹之者相撰京地に差出御警衛爲相勤可申候尤取締向者主人々々ニ而厚く世話致し一ケ年宛ニ而交代爲致可申候

右之趣　御所より御沙汰之趣茂有之候間被得其意早々人撰差出候樣可被致候委細之者牧野備前守可被承合候

右之趣十萬石以上之面々に不洩樣可被相觸候

三月

〔御記錄〕（文久三年四月より元治元年四月迄）（國より京都へ申向け）

右ニ付兵器食料等御手當之儀者諸家樣御仕來茂可有之候間於京都得ゝ申談其筋々に茂及御懸合宜取計有之候樣被仰付越哉と奉存候

一取締向之事者　公邊より御達ニ有之　朝廷より之御達面ニも拜見不申候得共撰士之分　朝廷に御差出置可相成儀ニ候ハヽ平素之御世話筋者可被出來兼候間其趣者程能御斷被仰達置候儀取計有之候樣被仰付越方哉と奉存候

三月十八日稻葉兵部少輔攝海砲臺建築視察及ひ神戶操練所創設差配として出張を命せらる

〔家茂公二度目御上洛一途〕

三月廿日

一御書方に左之通及上候事

藤木彌三郎殿　御留守居中

一三月十八日左之通

稻葉兵部少輔攝海御臺場築造見分并神戶操練所取建方爲差配被差遣候間相達可然向々に可被達候事

三月

三月十八日島津久光京師を發して歸國の途に就く

〔文久三年風説帳〕

亥四月一日

一江戸表ゟ左之通申來候事

御城使承込之趣

今日　御城ニ罷出京都之御模樣探索仕候處島津三郎殿京着ニ付此度英國軍艦渡來ニ而申立之趣取計方所分御尋有之候處只今外國ゟ相手ニ軍之出來不申候間右軍艦薩州ニ相廻り候樣御取計被下度左候ハヽ穩ニ取扱金子申請度との儀ニ候ハヽ金子茂遣交易いたし度との儀ニ候ハヽ於薩州交易可致旨申立置去ル十八日京都出立歸國ニ相成候由

一右軍艦之儀者　公方樣ニ御委任之旨被仰出候處　還御ニ相成候而ハ完而穩順之御取扱ニ可相成候間暫御滯京被仰出候由左候而右軍艦攝海ニ相廻し　大樹公御自身御指揮有之候樣との儀浪人共申立候哉ニ而其通り　勅命御座候由然處去ル廿二日不時之　御參内　被仰出候付而ハ此末善惡如何可有之哉之旨去ル廿一日京都御出立蒸氣船ニ而昨廿七日夜御歸府ニ相成候外國奉行菊地伊豫守樣御目付杉浦正一郎樣御登城ニ而御密談有之候を御出入御坊主山木宗節物蔭ゟ立聞いたし候由同人内話仕候（中略）

亥三月廿八日

園部善之丞

〔侯爵細川家書庫文書〕

島津三郎殿學習院ニ上書寫

五月十一日達

今般私儀奉蒙　御内命上京輦下之形勢詳ニ觀察仕候處　皇國危急旦夕ニ迫り候趣顯然ニ拜見得愚魯之身を以不顧恐公武之御重職方へ存慮十分獻言仕候得共御採用ニ相成候御模樣無之慷慨嘆息之外無之就而ハ無用之者長滯京仕候而ハ却而公武之御爲ニ不相成而已ニあらも讒口紛々ト沸騰仕候而ハ於目前騷亂ヲ相生し候茂難計深心配仕候攘夷御決議之上ハ國許之儀ハ三面之海岸寸地も醜虜ニ掠奪不被致候樣防禦之用意嚴重ニ不申付候而ハ御國威を奉貶ノ場ニ相至り別而恐入奉存候間不得止事明日發足仕候急速之儀御疑も可有之候得共右申上候外所存無之候間是等之趣不惡御聞取被下伏而奉願上候以上

三月十七日

三月十九日將軍家茂參内して滯京の命を奉承す

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣ゟ元田ニ御借被成候寫の一節）

一十九日大樹參内於御前御沙汰ニ相成滯在之儀大樹御請相成候

〔江戸京大坂鄕崎長崎返達御用狀扣、文久三年正月より御記錄、尊攘錄皇武令〕

今日召大樹御直ニ御熟談別紙ヶ條大樹御請被申上候就而者大樹公より申渡之儀も可有之爲心得可申達旨關白殿被命候事

三月十九日

右一通

右之通大樹歸府之事段々以勅諭被召止候事先日　御沙汰被爲在候通將軍職萬事是迄之通御委任ニ候就而ハ諸大名以下守衛萬端指揮於被致候者御安心ニ候事

一事ニ仍候ハヽ御親征も被爲遊度程之思召候事

三月　（投筆餘編ニ將軍直筆トアリ）長御請奉申上候

〔御内勅等書抜〕

御觸下

大　目　付に

明後廿一日當地御發駕可被遊處御所より被仰出候趣茂有之候付御發駕御延引暫御滯京被遊候旨被仰出候事

三月十九日

三月十九日幕府は將軍家茂攘夷の命を奉したる旨を達す

〔尊攘錄皇武令、江戸京大坂鶴崎長崎返達御用狀扣〕

三月十九日水野和泉守樣御渡之御同席觸寫

大　目　付に

攘夷之　詔御奉戴ニ付早々拒絶之應接ニ及ひ外夷承服不致節者速ニ打拂候樣被仰出候間一同厚相心得御國辱不相成樣可抽忠勤候

右之通萬石以上以下之面々に可被相達候

三月

三月廿一日本藩外使日向德藏は吏に横濱の形勢及ひ在留外人の動靜應接の狀況等を探りて之を報告す

〔風說帳〕

外使横濱ニ而承糖

當時横濱表に在留之異人動靜船數應接之模樣承糖候樣被仰付候付一昨十九日夕出立仕翌朝同所窪田泉太郎殿並定役今西宏藏方に罷越承糖候處英國軍艦拾艘佛國四艘和蘭同壹艘共外商船とも貳拾壹艘程茂渡來碇泊罷在申候由

一去ル十五日ゟ市中殊之外混亂仕申候右動搖之基ハ何ゟ茂江戸より出店ニ而江戸表市中動搖ニ付而騷立申候由ニ御座候尤其砌御役人方ゟも老人女子供之自然之儀有之候節怪我等茂有之候而ハ不相成候付近在に緣類有之者ハ立退候樣被仰渡候付一際混亂仕火事場同樣ニ而往來茂出來兼候程ニ付右樣動搖不致樣御役人方ゟ靜方被仰渡候得共一同之事ニ付何分御靜方屆兼候由御座候且異人より兼而雇置候日本人ニ而小遣妾ニ罷茂居候もの共の内異人所持之金子又之品物等盜逃去候者も有之彼是ニ而異人共大ニ不審ニ存召仕之小遣等に金子抔遺惣躰之人氣騷立候樣子内々相尋候者茂有之候處此度英國軍艦渡來殊ニ者戰爭茂難計旨ニ而右之通立退等いたし候由相答候者茂有之由就而之商館之異人共大ニ當惑仕候由御座候

一英國人戰爭之儀申立候趣亞國ミントスル不承知ニ而日本交易ハ亞國ゟ開候處英國ヨリ戰爭いたし候得ハ各國交易之道絶各國之難儀幾莫ぞや蘭國ミントスルも亞國同意ニ而英國と内論起り申候由ニ御座候又同所在留之英國商人共申立候ハ戰爭ニおよひ候而ハ商人難儀いたし候付英國に願候而茂戰爭相止ミ長く横濱ニ而交易致度旨同國之ミンストル船將に申出候由

一英國ミンストルゟ重大之事件申上度儀御座候ニ付可然御役人御出張被下度旨申出候ニ付大目付竹本甲斐守樣外國御奉行竹本軍人樣御越御應接ニ相成候處市中動搖ハ何故之儀ニ有之候哉之旨申出候付此儀其方ゟ申立之趣來ル廿八日迄ニ御決答ニ相成不申候ハヽ及戰爭歟之趣ニ付老人女子供立退せ申候旨御答御座候處夫ハ以之外之事ニ而　將軍に被對右樣之儀無御座長く和親仕度候江戸横濱等に軍艦大炮等差向候儀ハ毛頭無御座薩摩大守にハ義論も有之ニ付薩州に相廻り太守に面會之上船將之職掌を盡し義論可仕候得とも是迎茂　將軍家御家來之儀ニ付御返答承り候上ニ而決心仕候由申出候右之趣ニ候ハヽ　御上洛御留守中ニ付　還御迄之處相待候樣尤　還御相成候迎速ニ御決答と申譯ニハ難相成二百年以來將軍家百余里之處駕を被發候儀無之此度之儀御大禮ニ候得ハ於政府も御繁雜數日　御留守ニ付自國之御制度

も有之候間五六日ハ相掛り可申旨被仰聞候處夫々承諾仕候由御座候

一右御應接後市中相靜り昨廿日ゟ所々に運ひ候荷物取戻候向茂相見申候

一萬一之節御役人樣御家族立退場所程ゲ谷在に寺院五ケ寺御手當ニ相成焚出場所御出來ニ相成居候由

一市中之者立退場無之者ハ右同所在に御救小屋御手當ニ相成居候由

一英國船に死人積込渡來彼方願出候趣取沙汰ニ付是又相尋候處死人ニ而ハ無之疱瘡病人拾貳三人も有之船ニ而者療治も

屆兼殊ニ一同ニ移り候而ハ難議ニ付場所拝借願出候付五大力ゟ申船に矢倉取建御貸渡ニ相成候處右ニ而ハ療治屆兼不

辨利之由申出候得共未其儘ニ相成居申候由御座候

一一昨十九日横濱芝井町横通り貳丁目石商賣鎌倉屋忠右衛門手代之者佛國商人三番フレーイトに石賣候代金爲受取商舘

に罷越代金催促いたし候處一昨十九日四ツ時比鉄炮ニ而打殺され候由其末如何成行候哉相分兼申候

一非常之節急速御用意として横濱關門々々に定役衆八十人程ツ、詰方ニ相成居都合五百人程御座候由

右之通承膳申候間此段申上候以上

三月廿一日　一橋ヲ、　　日向德藏

三月廿一日一橋慶喜關白邸に至り將軍の歸府を請願す

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣ゟ元田に御借被成候寫の一節）

一廿一日一橋水野板倉等殿下に參上大樹滯在之儀ニ相成候歸府無之候而之關東指揮難行屆是非御暇相願度申上

三月廿一日幕府將軍家茂の明後廿三日を以て東歸すべき旨を達す

〔御内勅等書拔〕

三月廿一日水野和泉守樣御渡

覺

明後廿三日當地御發駕東海道還御可被遊旨被仰出候此段向々に可被達候事

三月廿一日

三月廿一日傳奏坊城俊克本藩留守居を召喚し速に禁闕守衛の兵を選出すべき旨を令達す

〔御記錄、尊攘錄皇武令、（文久三年正月より江戸京大坂鄙崎長崎）返達御用狀扣、（文久三年京都諸扣）〕

爲禁闕御守衛諸藩拾萬石以上高割ヲ以一萬石ニ付一人宛貢獻致し候儀於大樹公茂御請ニ相成候間志勇强悍之士ヲ精

選有之兵器食料是ニ准被差出候樣被仰出候猶御規則制度之儀者追々可被仰出候得共右選士急々取極可申出候事

三月廿一日松平春嶽勅許を待たずして京師を發し國に歸る

〔風說帳（文久三年）〕

一春嶽樣御事於京地御辭職之御願書御差出置去ル廿一日京都御出立御歸國ニ相成候由此儀之彼方樣類役申聞候事

亥三月廿八日　　關部善之丞

〔小楠遺稿〕

（文久三年三月廿日附宿本に贈る書）

一書拜呈仕候益御機嫌能奉恐悅此許相替り不申御安心可被下候然は京師御所置彌以外國御拒絶に相決し誠に恐入被存

候春嶽樣へは御役御斷にて明廿一日に京師御發駕と只今申來り候に付只今より源治郎泰吉を京師に大早にて遣し私存

念を小野殿敬之助迄申遣し候源治郎は直に御國へ歸し候筈にて泰吉は引返し候事に御座候源治郎不遠歸鄕可仕委細は

御承知可被成候（下略）

文久三年

三月廿二日將軍家茂に更に滯京すべきの勅命あり

〔尊攘錄皇武令〕

（六條侍從樣方元田に御借被成候寫の一節）

一廿二日被召大樹惟令歸府之而之人氣ニ茂拘候儀故滯在之儀更御沙汰

坊城大納言殿

野宮宰相中將殿

右一紙

三月廿二日水戸慶篤將軍目代として關東守衛英人應接の爲め東下を命せらる

〔京都諸扣、文久三年　尊攘錄皇武令〕

公方樣御滯京之儀　御請被遊候ニ付而者爲關東御守衛下向被　仰付候間早々出府防禦筋手厚相心得自然英夷開兵端候節盡力決戰有之候樣御沙汰之儀　被仰出候

水戸殿ニ

右之通昨日被　仰出候事

三月廿三日

三月廿二日我藩脫走安田喜助長藩士と共に應司關白の邸に候し將軍東歸阻止の事に盡力す

〔防長回天史〕

二十二日巷說あり云ふ將軍明日發程東に歸ると（中略）志士等應司關白の邸に候し將軍の去留と朝議の決とを聞かされば肯て退かずと稱す本藩の寺島忠三郎瀧彌太郎福原乙之進玉木彦助時山直八杉山松助堀眞五郎野村和作有吉熊次郎中村芳之助杉山初之進吉田榮太郎田村育造品川彌次郎秋良雄太郎白井小助周田半藏伊藤俊輔處士高杉東行肥後の處士安田喜ノ誤助等之れに與かる肥後の浪士堤松左衛門は此列に加へられざるを憤り即夜大日堂に自殺せり　夜丑牌後關白退朝して將軍抑留の議に決するを告く衆喜びて退く（堤自盡ノ理由ハ文久二年十二月十九日横井平四郎等襲擊の條に審也）

三月廿三日本藩獻米の請願を勅許せらる

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、文久三年正月より京都諸扣、文久三年　御記錄〕

（三月廿三日夜坊城大納言本藩留守居を召喚し授之）

細川越中守行年京師人民賑給料として肥後米壹萬五千俵獻納之旨被　聞食救助之志情御感之御事候間申立通獻上可有之　御沙汰候事　本文獻納米之儀ハ被成御免和筒三百挺獻上ニ相成候樣三條樣ゟ御沙汰之趣御內勅控之方ニキ六有リ八月七日

三月

三月廿三日朝廷再び將軍の東歸を留めて對外の大策を決し國家の基を固め人心を慰安すべき旨を諭さる

〔嘉永七年風說帳〕

於京地御沙汰寫

大樹歸府之事再應被相願候得共歸府有之候而者如何樣之變事出來も難計左候得者實以一大事之儀故被惱　宸襟候間天下之爲且ハ德川家之爲をも深く被　思召候故今暫滯在有之攘夷基本相立　叡慮御貫徹人心安堵之場合ニ至候而被奉安宸襟候樣周旋可有之御沙汰候事

三月廿三日被仰出候由

三月廿三日傳奏坊城俊克は水戸慶篤に關東守衛を命せられたる旨を各藩に達す

〔侯爵細川家書庫箱入文書〕

三月廿三日

一傳奏坊城大納言殿亭に在京。役御呼出御渡候御書付（脱落カ）

大樹滯京之儀御請ニ相成候ニ付而之爲關東守衛下向被仰付候間早々出府防禦筋手厚相心得自然英夷開兵端候節盡力決戰有之候樣

御沙汰候事

三月

一三月廿五日京都御發駕十七日御道中ニ而四月十一日江戸御着之由

右水戸樣御事之由

三月廿三日幕府我藩主外六名を二條城に召集す

〔御内勅等書拔〕

覺

松平陸奥守　上杉彈正大弼　細川越中守　伊達伊豫守

松平容堂　松平備前守　松平紀伊守

右之面々今廿三日四時二條城ニ罷出候樣可被達候事

三月廿三日

三月廿三日幕府は將軍の東歸を延期する旨を達す

〔御内勅等書拔〕

三月廿三日水野和泉守樣御渡

覺

御參内被遊候處再應御所より被仰出候趣茂有之候ニ付今廿三日當地御發駕御延引被仰出候御先ニ出立之面々一ト先上京候樣可致候

右之通向々ニ可被達候事

三月廿三日

三月廿三日在京本藩重臣は將軍退京日限不定の狀況諸侯の動靜及び親兵の設置等を藩政府に報告す

〔自筆狀控〕（文久三年元治元年）

以別紙申達候京地之事情見居エ茂付兼追々打替候段之申進置候通ニ而既ニ將軍樣御上洛　行幸之御供奉被爲濟一旬之御滯京被仰出之通候處誠ニ日淺之御事共ニ被爲在折節之御親睦間茂不被爲在方今外國御處置筋不容易御時節殊ニ當地之形勢御政令相立兼人心疑懼致し切迫之折柄此儘直ニ御引拂ヒ被爲在候而之向後　帝都之御鎭定何程可有御座哉　公武之御間深奉憂念候間是迄此方樣より格別御周旋之御儀不被爲在候間右等之趣を以　公武御双方ニ御建言被爲在可然御時節ヒ咄合被仰立之草稿茂大躰取調せ候處暫御滯京被仰出候付右建言之儀之御見合相成申候處去ル十九日俄ニ御暇之御參内廿一日御發駕被仰出候付最前之御建白被差出置候ハヽ御都合ニ茂可相成處殘念之至咄合候内　御所より被仰出之趣有之御發駕御延引之處猶今廿三日被遊御發駕旨被仰出右之御儀ニ付而ハ一昨夜半關白樣ゟ至急之御用向被爲在候間早々御出被進候樣御使參り近日御不例ニ付一應御斷猶被仰進候趣有之御長髪之儘御出夫より御登城茂再度被爲在

今日茂御登城被遊候右ハ將軍様御滯在之儀ニ付而之御相談ニ被爲在今廿三日之御發駕之御見合ニ相成申候　將軍家御發駕之大勢之御供廻且御道中人馬之入用諸事大造之儀ニ候處ケ様ニ朝夕御模様打替候程之事躰御内輪之混雜關白様方之夜白之御差別茂無之趣ニ而　此方様御歸國一條無油斷御手を被付候得共中々夫等之御事柄ニ被至兼決而御失念之不被爲在由粗御噂之御向茂有之何様天下之動靜此時と相伺申候因州侯兩度迄御發足有之候を御呼返島津三郎殿も御呼返之由藝州様之夜ニ入御暇被仰出即夜速ニ御發足之處　勅命を以相達候處ニ暫御滯被仰出神邊驛ニ御滯留之由雲上方四角八面ニ貫通不仕候得之忽チ右等之御都合ニ相成實々當惑之次第ニ御座候ケ様之御取扱而已有之而之何分人心歸向之場ニ至り兼長歎息之至御座候英國軍艦之十四日歟之日延之而横濱に御決答相待候由春岳様にと彌以惣宰職御斷被仰立一兩日跡此元御出立ニ相成いつゝ福井表に御歸郷と相見申候將又相州御解放之儀御手を被付候處實々無御餘儀次第ニ付御願之通御免被成下ニ而可有之候尤當時英國軍艦渡來申立之趣茂有之折柄代り被仰付候迄之是迄之通其儘可被遊御勤旨御差圖御座候仍而英船引拂候上之御模様茂可有之只今通押移候而之國力疲弊いたし其處おゐてと重疊恐入申候得共前件通之事躰何一ッ御運ヒと付兼恐懼之至御座候

一爲　禁闕御守衛諸藩拾万石以上高割を以一万石ニ付一人宛忠勇强幹之者差出可申旨坊城様井水野和泉守様より御書付御渡他年御用狀之通御座候譬此方様御歸國被爲在候而茂御警衛御人數被差出置候儀ニ候ハヽ夫ニ而事濟候様いたし度咄合迄ニ而未タ如何様共見込付兼申候　御所之御模様等得斗探取候上追而可申述候右躰之儀茂長州方根起爲有之段ニ相聞列藩より被差出候事ニ付後年迄都合能被行候筋とと更ニ見込茂無御座候早打之御飛脚差立候付當時之事躰爲可申達如是御座候以上

三月廿三日

沼田
長岡

惣連名殿

三月廿三日本藩政府は時局に鑑みる所あり有司に命して武器の修繕玉薬の準備を整へしむ

〔機密間日記〕　文久三年

覺　　御城内方御奉行に

近來之御時勢ニ付至急ニ武備充實之御手當被仰付候間御武器損居候分者御手入ニ相成御仕繕茂被仰付玉薬も十分之御備出來いたし候様一致ニ差入急速ニ相整候様御天守方に可被達候以上

三月廿三日

三月廿五日幕府は事變に際し銃砲武器類の城門通過に關する心得を達す

〔御同席觸寫並大目付様御廻狀寫〕

覺

英船渡來ニ付御門々々並橋々驛口勤番所共鐵炮其外武器通方之儀右員數書付萬石以上之面々ハ家來印紙書付差出可被致通行候尤非常ニ臨候節ハ通行之御門々々又者勤番所に附添之家來より口上ニ而相達可被致通行候

一御城内御警衛之面々ハ鐵炮武器類下馬所に相殘し置當番御目付より相達次第前文同様之振合を以繰入候様可被致候

右之通萬石以上以下之面々に可被相觸候事

三月

三月廿五日松平春嶽揣に歸國したるを以て免職逼塞を命せらる

〔御内勅等書拔〕

松平春嶽儀御政事總裁職御免願未御許容茂無之候處勝手ニ當地發足致し出立之後其段相屆且引戻之儀相達候處殘居候

家來相支其儘歸國之段如何之事ニ候　叡慮を以總裁職被仰付既ニ御免願茂達　叡聞御聞屆無之內前書之始末對　朝廷別而不束ニ付急度茂可被仰付候處是迄出精相勤候付出格之御宥免を以總裁職御免逼寒被仰付之事

三月廿六日傳奏坊城俊克は本藩留守居を召喚し石清水行幸及ひ親兵の件につき示達する所あり

〔京都諸扣〕（文久三年）

坊城大納言樣より今日御呼出ニ付參上仕候處左之稜々雜掌を以被仰聞候

一明廿七日學習院ニ御重役之內壹人已半刻被差出候樣との事

一石清水　行幸御供奉之節之御列付明日差出候樣御達ニ相成候處右者遠方之事ゟ付頃日よりと御人數相增被差出可然との事

一頃日御達ニ相成候親兵之儀來月廿四日頃迄ニ名前付御差出ニ相成候樣との事

以上

三月廿六日

青地源右衛門

〔仝書〕

坊城大納言樣雜掌淺野主膳山科筑前守ゟ左之通

以手紙致啓達候然者先刻御入來之節御達落致し候來月四日　石清水　行幸被爲在候付社頭警衛其　御主人樣ニ被仰出候尙御勤向之儀ゝ所司代ニ御談可被成旨御達可申之處手落ニ相成候間亦復御呼掛申茂御氣毒成儀ニ候乍大略書中ニ而得御意候如此御座候以上

三月廿六日

青地源右衛門樣

右御用人より添簡を以達右之候事

三月廿六日坊城家雜掌より石清水行幸供奉列書提出のことを達す

〔石清水社行幸一件〕

一三月廿六日坊城樣より左之通

肥後御屋敷

御留守居中

坊城殿

雜掌

以手紙致啓上候然ゝ來月四日　行幸供奉被　仰出候付御列書明日未刻迄ニ當家ニ御差出可被成候且四日は刻限丑刻ニ御座候此段乍略儀書中を以御達申候仍右可得御意如斯御座候以上

三月廿六日

猶以御列去月供奉之節之通ニ而宜御座候以上

三月廿六日小笠原長行英人應接の爲め東下を命せらる

〔侯爵細川家書庫文書〕

京都於御旅館被　仰出之趣

小笠原圖書頭

此度英國軍艦横濱港ニ渡來ニ付應接之儀其方ニ御委任被遊候間早々江戸表ニ相越十分取計候樣可被致候

三月廿六日

四月六日江府御着之事

三月廿六日本藩在京の藩士以下の員數を調査す

〔文久三年
京都諸扣〕

御上京之御供並不時登等士席以上百五十二人程
右同輕輩帶刀以上三百四十人程
御呼登之御人數士席以上七十人
右同輕輩足輕共百十一人

三月廿六日

右書付奥ニ差出候付爲見合扣置候事

三月廿七日朝廷本藩重臣を學習院に召喚して住江甚兵衛等同志中より貢献兵士を選出すべきことを命せらる

〔文久三年正月より
御　記　錄〕

此度撰士貢獻ニ付而者住江甚兵衛抔頗正議忠直之聞有之候間右等之輩撰出貢獻有之候ハ、殊更　御満足之旨無急度可申達關白殿被命候事

御出席之御名前左之通之由

滋野井中將
川鯰少將
姉小路少將
壬生修理權大夫
澤主水正

三月廿七日所司代牧野忠恭我藩留守居を召喚して石清水社行幸警備の令達を交附す

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、御　文久三年正月より　記　錄〕

（所司代牧野備前守ヨリ本藩留守居へ）

來月四日石清水社ニ　行幸被爲在候付社頭警衛被仰付候旨傳奏衆被申聞候間可被得其意候尤上杉彈正大弼ニ茂同樣被仰付候間諸事可被申合候

三月廿七日

三月廿八日藩主慶順時局に關し周旋すべきの内諭を奉したるを以て鷹司關白を經て天下の事皆將軍に委任し政令一致以て今日の危機に處するの必要なる所以を建白す

〔内密公武ニ御建白一件、尊攘錄御建白御國議、御内勅等書拔〕

今度將軍家御上洛御大禮首尾能被爲濟候而は早々御歸府之御日限茂被仰出置候處　思召を以御滯京被仰出乍恐御合體之御實意御深重ニ被爲在候御儀と難有奉感戴候然處將軍家ニは攘夷之期限次第ニ差迫方今横濱港英夷來泊御談判之イ。御處置茂御座候得は時勢切迫實ニ不被得止御時宜合故速ニ御歸府之儀再應御願立之由ニ御座候處　叡慮ニ者何分難被遊御安心猶御滯在之儀被仰出就而は在京之諸侯並越中守ニ茂周旋仕候樣御内諭之旨謹而奉敬承候越中守儀　勅ニ依而上京仕居聊報効之志願ニ罷在候處右樣御内諭を蒙り候付而は微衷を盡可申と深熟考仕候處今度將軍家御滯京日數十日之御日限被仰出置候儀を被改而御滯京被仰出候儀は畢竟時勢之變革ニ付而深將軍家を御眷顧被遊候而之　叡慮ニ可被爲在と奉恐察候而將軍職御委任諸大名守衛萬端指揮被仰付猶又此節之　叡慮ニは天下之爲且は德川家之爲を茂被　思召上攘夷之基本相立人心安堵之場合ニ至り候樣との旨ニ被爲在候由誠以深遠之　叡慮御懇惻之至　勅諭を奉拜聽。者誰かハ感泣奮發不仕哉況將軍家之御忠意早速ニ御敬承可有之者勿論之御儀と奉存候併折角之　御内諭を蒙り候付此砌之御

奉公今一際周旋仕度奉存候間乍恐猶一應　朝廷之御眞意茂奉伺且は區々之卑願茂奉申上度奉存候方今。時勢切迫人心不和ニ付而者　御憂慮之餘　朝廷より追々　御沙汰之旨茂被爲在將軍家ニ茂事々御指揮茂有之候處人心紛亂之折柄乍恐右樣御政令二致ニ相成候而者人心益以疑懼を生。可申哉と奉恐入候然處今度將軍職御委任萬端御指揮有之候樣との思召ニ被爲在候上は天下之御政令一致ニ相成人心安定可仕と雖有奉存候向後彌以御實意之御委任被爲在巨細之御政事將軍家ニ御沙汰被爲在將軍家　勅諭を以天下ニ御指揮有之候得は紀綱相立公平正大之御政道人心安堵可奉感戴と奉存候處萬一御委任被仰出置猶　朝廷より度數々　御沙汰被爲在候而は御政令二致ニ相成乍恐上者　朝廷之御威嚴を被損中者將軍家之御指揮茂御不行屆ニ相成下は人心之疑惑を生。將軍家如何に御滯京有之候而茂其御詮茂有御座間敷と奉恐入存候君臣眞之御合體より御政令一致ニ出候ハ、縱令東西御離隔被爲在候而茂御誠意貫通紀綱凛然乍恐　御憂念茂被爲在間敷哉と奉存候攘夷之儀は殊更神州之安危ニ係。一度御失策ニ相成候得は生民之塗炭國家之災害眼前之事ニ而益以宸襟を可被奉惱と深奉恐入候慮御定之期限茂差迫。英夷御談判茂難被延御時節各國人心不和守備不整此儘ニ而戰爭ニ相成候儀乍恐如何成御勝算被爲在候而　宸襟を可被奉安哉と眞以深奉恐入候然處攘夷之基本相立人心安堵之場合ニ至候樣との　叡慮ニ被爲在誠以有難　思召ニ而人々尊王之精神徹底仕。士氣振國力充各國全州之守備一般ニ相成候儀則萬全之御勝算と奉存候征夷之任は將軍家之御職掌ニ御座候得は應接談判等之御處置筋茂總而將軍家之胸算ニ被爲任一時之强弱を御計較不被遊始終之成功御仕遂被爲在候樣被遊度奉希望候今度御懇篤之　思召ニ付而は將軍家ニ者固より御敬承御滯京可有御座於越中守茂周旋盡力可仕と奉存候處乍恐自然御委任之御名義迄ニ而右申上候通眞實之御委任ニ而無御座候得は將軍家ニ茂御差入御請茂被出來間敷於越中守茂重疊奉恐入候得共何分周旋難仕當惑至極深奉恐入候仰願曰者向後御合體之御誠意始終御貫通被遊切々御參　內被仰付乍恐股肱水魚之御親ニ而君臣之御間靄然たる御誠意一毫之御間隙不被爲在天下之事萬つ將軍家ニ御委任被遊益以儼然之體深穆之德を以御鎭靜被遊候ハ、將軍家ニは銳意勵精叡慮を奉。而天下ニ御指揮可被爲在左候得は朝廷森嚴政令一致天下之人民仰感俯服今日切迫之時世忽。興隆之御創業。相成全國振起外夷畏服始而　宸襟を被奉安皇國生民之大幸不過之と奉存候右は誠ニ狂妄之建言不憚尊嚴申上候乃罪當萬死恐懼戰慄之至ニ奉存候得共今度　御內諭を蒙り候付愚存之趣奉申上候偏ニ　朝廷之御爲天下之爲と存込候迄之微心ニ御座候誠恐誠惶頓首。謹言

三月　　細川越中守

〔採薪錄〕

右者文久三年亥三月廿一日將軍家御歸國御願之節關白殿下より御周旋之　御內命被爲蒙候ゝ付同月廿八日此御書附殿下へ御直達被遊候處殿下深御採納ゝ而早速　朝廷へ御參達　叡覽ニも可被奉供段御返答有之候事

〔一條忠香日記抄〕

三月　晦日

細川越中守より建白差出殿下へも被爲見三條家を始め議奏中へ被差出被置也

三月廿八日本藩長崎留守居匂坂平右衛門は日英關係切迫により長崎騷擾の狀況長崎奉行より英國領事への交渉之に對する領事の回答及ひ領事より市民への告知書等を得て之れを藩政府に報告す

〔尊攘錄新聞紙並夷情探索等〕

長崎表より早打飛脚昨夜着いたし別紙之通中越候間別紙迄ニてゝ貫兼候譯茂御座候間內狀共相添相達申候御家老衆へも被及御達可被下候以上

文久三年

三月廿八日　　匂坂平右衛門

御奉行衆中

此許之儀昨廿四日町屋を以申上候通ニ而市中増々騒立候處昨日ハ異國コンシュル共御奉行所御呼出之風評有之如何之御模様哉と心懸居申候處夕刻ニ相成候而ハ異人共當港引拂之御沙汰有之由傳承仕候是以突留不申事ニ付今朝通詞手元承合申候處右異人共御呼出ニ而ハ無之彼者共より今度市中一躰不穏騒立候様子ニ付いまた如此混雜ニ不及共可宜段申出置ニ御奉行様御諫ニ罷出候由之處以之外之御挨拶ニ而此方存寄之筋有之右之通申付候尚廿三日江戸表之模様相分候ハヽ英船ニ候へと商船たり共打拂候様御沙汰之由就而異人共甚當惑之由ニ而種々御問答いたし候由ニ候得共屹と御返答ニ相成早々引拂候様との御申付ニ而商人共ハ早々引拂候様可仕段御受申出候由コンシュル共ハ妻子も有之一時ニ引拂成り兼暫滞留願出候由之處一旦と共儀難成との事ニ候得共種々歎願いたし江戸御模様相分申候迄ハ猶豫いたし可申候稲佐郷へふりと引除キ候様御申付有候段通詞より今朝承申候

一右之通咄之儘認置申候處今廿六日御達書手ニ入申候間差上申候書面之通ニ而彌以市中騒立軒別引拂日々諸道具運ひ不怪變動ニ相成申候

一右引拂ニ付地役人を初雜濤之向々ハ勤料等之内半金又ハ小前ニ至候而ハ竈銀等相應々々相渡候由

一引拂場所ハ頃日申上置候通大村御領ニ相究申候時津長江之方ニ相越候ハヽ御手船を以渡海之都合ニ相成居申候由

一玉名竹内兩家も一統之都合ニ而取片付置萬一異變之節立除候期ハ佐嘉御屋代共引拂之都合を見合家内ハ御國許ニ立除候覺悟仕居申候

右之通ニ而於爰許誠以難安仕合ニ罷在今日までも御便無御座奉懸忽候御屋敷御手當等之儀ハ下まらべも有之候へ共御人少第一鹽硝も無御座只々當惑之次第ニ奉存候御模様之儀ハ早々被仰聞可被下候此段爲可申上又々往來早打町屋を以申上候着之上宿賄等之儀ハ宜敷被成御達可被下候以上

三月廿六日　　石原善右衛門
平右衛門様　　林田玄作

一當月廿四日英軍艦ニ海軍總督乗組渡來ニ付神奈川表ゟ渡來いたし候哉之段御紙之處全く左様ニ無之此節ハ戰爭之儀付而態々當港ニ渡來且在留

コンシュルハ女王殿下之命令本文命令ハ如何樣手賦い令も有之候付其儀相濟次第是ゟ直ニ神奈川へ向ケ致出帆候段申出たし聞取御注進可申上候

候事

一同日直ニ碇泊之同軍艦壹艘神奈川へ向ケ出帆いたし候事

一此節軍艦三拾四艘備置其内拾五艘神奈川ニ差向跡船ハ近海ニ備置戰爭相始候ハヽ追々差向可申候

一外ニ上海邊ゟ青備之軍艦一備凡拾六艘之内四五日内ニハ當港ニ渡來可致申出候事

右之通御取紙之節申出候事

（別紙）

此度貴國軍艦神奈川港ニ渡來不容易事件申立候付而ハ談判不整して戰爭ニ及候ハヽ右戰爭中當地ニ於而双方之使者往來印旗兼而打合置不申而ハ麁忽之振舞有之哉も難計候付此方ハ日ノ丸國旗並白旗相用候筈ニ有之候間其段被心得軍艦船へ得と御通達有之度附而ハ貴國使者印旗兼而被申越候様いたし度存候故申進候謹言

大久保豐後守

英國

コンシュール

此度神奈川港ニ英國軍艦渡來不容易事件申立候趣ニ付若談判不整して戰爭ニ及一左右到來之節ハ於當地も英國と戰爭

文久三年

ニ相成候儀ニ付貴國商人共右戰場中ニ在留罷在何歟之儀相生候儀も難計左候迚別段警固之者附置手當行屆不申候付一ト先當地引拂候樣取計有之度此段賴入候謹言

大久保豐後守

英國之外
各國
コンシュール

英國と戰爭相成候節其許立退方之儀ニ付被申立候趣勘辨いたし候へ共何分警固之見据無之然ル上は商人一同一ト先退崎被致候樣賴入度事ニ候乍去一ト先在留決心ニ候ハヽ素より警固之手當行屆兼候得共稻佐寺院之内なりとも一郷ニ居留爲致支配向等附置候樣ニも可取計哉と存候尙勘辨有之度此段及相談候謹言

大久保豐後守

三月廿八日本藩田中彦右衛門は横濱市民動搖の狀況奉行の示達を探り之を在府藩當局に報告す

〔文久三癸亥年尊攘錄探索書〕

横濱表之聞取并御觸之寫

其外承り書二三ケ條共

一横濱表當月十七八日頃市中殊之外騷立銘々荷物等取片附夫々引取之用意相始り（加奈川臺之方も同斷大抵立退候由）此儀兼而觸置候譯ニ茂無之決答之日限相迫り候故之儀と被相考候由（尤名主ゟ申聞たる賊之由多分江戸表ト同樣妻子老人爲立退置候樣ニと いふニ而有之たるならんを彼之邊ニ而ハつよく聞込候儀ト被存候由）就而ハ異人館ニ入込居候日雇之者異人之品物等を奪取逃出し抔いたし或ハ呼寄セ置候女抔茂暇を取絕而異人取つゟひのもの無之樣ニ相成此騷立ニ而異人之方ニ而も荷物抔船に運ひ入候儀ニ相成車力ニ雇候者も無之ニ付南京人俄ニ車力とふつて船場持出し等いたし候有樣暫ハ市中賣買も止り候儀ニ而異人共辟易いたし召仕之日雇ニハ逃らゟ妾ニハ暇を取らゟ市中之者ニハ取合ゟす是ニハ大ニ困窮之躰ニ有之たる由且又アメリカ商館に貸金有之町人六七人連ニ而二ツニ分レ表口ゟ懸取ニ仕懸候處恐ゟたる躰ニ而裏口へ出んとゟるを裏ゟ廻り居候者押へ附ケ是非ノヽ懸を遣し候樣ニとて遂ニ押取ニして歸りたる由扨又同斷異人ニ（英夷賊之由）貸有之町人途中ニ而出逢是非ノヽ掛をつゟゟし候樣ニとせりつゟ候處異人鐵炮を差向ケおどし候由依而直樣飛るゝより組み附キ右鐵炮をもきとり散々ニ打擲いたし其節彼レ之劔抔曲りたる由異人殆ト息絕へ候程之事ニ而終ニ掛を出ゟと申出候由ニ而直樣商館に參り是又押シ取ニして歸りたる由右等之事ニ而實ニ困りたると相見各國ミニストル（内ニ英夷も居候由）一同神川奉行淺野伊賀守へ申出候ニハ何ニ故斯騷立候哉甚以諸事差支困り候と申出候由淺野返答ニ斯立退店仕舞等相觸候譯ニハ無之愚民共之儀ニ候得ハ戰爭ニ可相成歟ト恐ゟ用心ニ斯いたし候ト申向候處然らハ先ツ此節之處御應接通り日限如何樣卒相延候樣ニ可仕候間何卒右樣無之樣仕度ト申出たる歟之由依而此節日延之應接は格別言語を不費右市中之騷立ニ而異人もこまりて半ハ彼ゟ乞候ゟたちニ有之たる歟之由世間風聞ニ此度之日延ハ彼ゟ願出たると申ハ此事ト被相考候由實ハ此方ゟ日延之應接ニ懸り居候處に右市中之騷立有之候御藤ニ而容易ニ日延ニ相成候儀と被存候由之事

一横濱ニ而御觸之由寫

三月十七日年寄名主戸部奉行所に御呼出ニ相成被申渡之趣左之通

市中町人共立騷家財并老若赤子等ニ至ル迄夫々立退候哉之趣相聞右之應接之模樣ニ寄此方より沙汰可致儀ニ而未タ申渡候儀ニハ無之午併達而片附立退候を差止候儀ニハ無之候得共右樣立騷候得ハ自然手荒やまち等出來候哉茂難計候間下々小前之者共立退御場所無之者安心之爲メ御小屋を出來置日々養育可渡候間末々迄取調書上げ可申且又夫々御場所相立候儀ハ亂妨ニ及候者無之樣御備之爲メ相立候儀ニ而異人打拂之御備ニ而ハ無之候間共旨可存當節ハ異人方ニ而も氣折致候哉ニ付多分和熟ニ相成可申見込ニ有之候

私曰淺野伊賀守ハ當時世間ニテ應接振モ宜ク有之トイワレ第一横濱治メ方宜ク彼我人心歸服イタシ居候トテ人皆稱譽イタシ候由人ノ善ヲ覆フニテハ無之候得共此節ハ應接一大事ニ係リ候儀ニ付難默止私ヲ以只此ノ横濱御觸ノ一書面ニツイテ相考見候ニ彼レ是レニ辭柄ヲ取ラレヌ樣ニ而已心ヲ用ヒタトヘニ云内股膏藥ト申氣味ニテ彼我曲直斷然明白彼ヲシテ感動流涙セシムルカ但シ又辟易冷膽セシムルカノ應接ハ無覺束俗ニ如才ナシト云フノ才アルカ未タ其面色ヲモ見サル人ヲ猥リニ品評スヘカラサル〻ナレモ此一書面ニテ其人トナリ恐ラクハ臍下ニ因循ヲタクワヘ開ヲ欲スル處アルニ似タリ殊ニ結末ノ一段如何ナル〻ゾヤ

一去ル十九日横濱御觸左之通

今般御模樣替ニ相成急ニ戰爭も無之候間銘々安心いたし早々商賣ニ取掛候樣爲致別而喰物渡世之者休居候而之一同ニ難儀ニも相成候間開店被致候樣可被申觸候異人ニ貸借有之候共穩ニ掛合其上不行屆候ハヽ御運上所ニ可願出候大勢引連强談不致樣役人共ゟ可申付候右之趣被仰渡候間此段御達申上候

本文之穩ニ掛合候樣强談不致樣抔と申ハ前條ニ認置候押し取且異人打擲等いたし候一條をさしていふ歟之由

一來ル廿三日御決答之處三十日御日延ニ相成候間立退ニ不及成丈穩ニいたし居候樣被仰渡候右草々市中一統不洩樣可被相觸候　　三月十九日

右之書付流布いたし當時一統此心得ニ而罷在候樣子ニ御座候へとも虚ニ而可有之由其譯ハ此度久留米人横濱ニ而會所役人之處に參り此度三十日日延ニ相成候趣承及候實ニ其通ニ御座候哉と問合候處左樣ニ而之無之矢張今二十四日日延ニ相成候儀と返答ニ而有之たる由

一最前英國々王ゟ之書翰ニ廿日并ニ船將之猶豫二十四時之日限り三月九日ニ當り夫ゟ竹本應接申延ニ而二十三日之日延之三月廿二日ニ當り又前條應接ニ而日延二十四日ハ四月六日ニ當り候歟之由

以上數ケ條ハ久留米藩士去ル十七日横濱に參り懸私方へ立寄候ニ付聞繕先キ等添書抔も差出相談いたし置候處彼ノ表ニ滯留いたし居段々聞繕候由ニ而歸宅猶又私方へ參り相話候ニ付其大略を書取申候事

私ヲ以相考見候々日延之模樣ハ兎ニ角是非ノ〻還御迄之處押シ附ケ置其上ニ而衆評處分ニ相成候事と被存申候

一調役新川某臂者吉田元伯右横濱ニ而被召捕候由風聞承り申候實否未タ不相分

一久保田源大夫と申者旗本之由富津觀音崎之間へ材木ヲ以柵を結ひ異船をせき留メ候策を差出候由金内格三ト申浪人儒右財木江戸町中之財木屋ゟ出さしむる請合之由右ニ付久保田源大夫林猪太郎名倉予何人場所見分ニ參り候筈之由承及申候

此咄ハ井上候内名倉予何人と申者相咄候由此者虚言多々有之候得共重疊根押しいたし聞取候由ニ付自然ハ實歟とも被存候間認候事

一小栗豐後守　小川町神田橋御門外　京極能登守　駿河臺小普請組頭　佐藤平三郎　御鐵炮方　塚原治左衛門　山口信濃守　土井美濃守

右いつゝも異人最負害ある者之由承及申候

右前條同斷申聞候由

右之通書附寫并承り書差出申候以上

亥三月廿八日

田中彦右衛門

三月廿九日傳奏坊城俊克は去る廿一日の選士貢献に關する令達の訂正せられたるを以て更に之を交附す

〔文久三年〕〔京都諸扣〕

去ル廿一日坊城樣より御渡之御書附些ト惡敷御座候由ニ付今日御呼出之上前書御取替猶別紙之通御渡ニ相成申候間寫一通御達仕候宜敷御取計可被下候以上

三月廿九日

元田八右衛門

文久三年

古小路嘉右衛門殿　　青池源右衛門

爲

禁闕御守衛諸藩拾萬石以上高割を以一萬石ニ一人宛可差出儀於大樹茂御請ニ相成候間各忠勇强悍之士ヲ精選有之兵器食料是ニ准被差出候樣被仰出候猶御規則制度之儀者追々可被仰出候得共右選士急々可申出候事

三月廿九日藩主慶順は藩地沿海數十里に亘り又天草島策應の任務あり此際親しく防備を督せさるべからざるを以て速に歸藩を許されんことを朝廷に申請す

〔尊攘錄皇武令、江戸京大坂鶴崎長崎返達御用狀扣、文久三年京都諸扣、依御願御暇被仰出京地御發駕一件〕

三月二十九日三條中納言樣ニ被差出候

私儀帝都御守衛被仰付置難有仕合奉存候然處國許之儀者海岸場廣殊天草地形を受海防之要衝ニ御座候得者當時切迫之折柄一際防禦筋行屆不申候而者片時茂難安國政向ニおゐて茂萬端屆兼實ニ難閣筋茂有之候間直と指揮不仕候而者何分治兼可申と深懸念痛心仕候依之此砌奉願候儀者奉恐入候得共私儀歸國被仰付被下候儀者被爲叶間敷哉御當地之儀者詰込之家老共兩人幷備手人數殘置爲名代一門長岡內膳長岡刑部內一人至急ニ呼登屹と御守衛仕せ可申と奉存候其上ニ而私儀者罷下申度可奉願候處國許之儀殊之外切迫之次第ニ付右名代之者上京仕候迄者末家細川主米輔儀滯京仕せ置候間何卒別段之御評議を以私儀早々御暇被下置候樣奉願候間國許之事體情實厚御汲取被成下可然樣御沙汰之程幾重ニ茂奉願候以上（本文上請は四月三日勅許を蒙りたり）

三月廿九日　　細川越中守

三月廿九日石清水行幸の際社頭休所の儀を傳奏より關係各藩に示達す

〔石清水社行幸一件〕

一左之通上杉樣より御廻達ニ相成候由ニ而御留守居より被差出

口上覺

來月四日　石清水社　行幸被爲在候付供奉之方々社頭休所之儀ニ付書付壹通繪面壹枚御廻し申候間早々御廻覽可被成候以上

三月廿九日　　兩傳奏

米澤御屋敷　御留守居中
肥後御屋敷　御留守居中
對州御屋敷　御留守居中
備前御屋敷　御留守居中
藝州御屋敷　御留守居中
追而御廻覽之上御返却可被成候以上　　雜掌

右一通
　御休坊之事
山下
　大　樹　公
　一　橋　殿
右高坊
　松平讃岐守殿
　一橋殿從者
右大乗院
　前陣上杉殿始五大名
右金昌寺
　小川肥後
　但從者凡三四人宛之積余之從者ハ下陣可然場所銘々
　より可致所望候事
山上
　大　樹　公
　一　橋　殿
右瀧本坊尤御供之人數精々御省略御登山ニ相成候樣
右之御供休息所者宮本坊
　松平讃岐守殿
右辻本坊主從共之積但供精々省略
　前陣上杉殿始五大名
右岩本坊尤供精々減少同所ニ大塔有之候間其所供休所
右山上御當用之人々計被召連其外者於山下可然場所御
　銘々下陣御所望有之度候事

三月廿九日石清水行幸四月四日の豫定を延期せらる

〔魚住文書尊攘録雜録〕

三月廿九日防城大納言樣より御達

昨夜坊城大納言樣より御呼出ニ付罷出候處來月四日　石清水社　行幸御延引被　仰出候段雜掌山科筑前守を以被
仰聞候事

三月晦日　　青地源右衛門

〔御記録〕　文久三年

一今晦日御所司代牧野備前守樣ゟ御呼出ニ而櫻田覺助參上之處左之通御書付御用人を以御渡被成候

石清水社ニ　行幸來月四日御延引猶日限追而可被　仰出旨傳　奏衆被申聞候此之段爲心得相達候

三月晦日　　細川越中守

三月晦日藩主慶順は前に朝廷に上りし封事と同意の建白書を幕府に提出す

〔内密公武江御建白一件、尊攘録御建白御國議、御内勅等書抜〕

一三月晦日九時御供揃ニ而二條御城に御登城左之御建白之御書付御老中之御内ニ被遊御直達候

今度御上洛御大禮首尾能被爲濟候而は御日限茂被仰出置候儀ニ付速ニ可被遊御歸府候處　叡慮之旨を以度々御滯京之儀被　仰出彌以御合體之御實意相顯候御儀と難有奉感戴候然處當時横濱港英夷來船御談判之御處置茂被爲在御定之期限茂差迫候付而ハ江戸表御守衛茂御手薄人心動搖仕候折柄ニ付實ニ不被得止御時體故被遊御歸府度旨御願被爲在候付而は公武之御間越中守ニ茂周旋仕候樣との　御内諭を蒙謹而奉畏候越中守儀此節上京仕居右之御模樣徒ニ傍觀仕居候譯ニ無之不肖之身不容易儀を蒙候段難有内深奉恐入候得共涯分を盡可申と奉存候今度　叡慮を以度々被仰出候儀者乍恐去春以來御遵奉之御誠實被爲行屆候處より格別之　御眷顧被遊候御儀と奉恐察候得は此上御歸府之儀强而御願立被爲在候而は是迄御叡慮遵御誠敬之御積德如何ニ可被爲在哉と深奉憂念候仰願曰は此砌今一際御尊崇之御實德を被爲積切々御參内　天顔御咫尺被遊萬つ之御政事等御直ニ御伺被遊益以股肱水魚之御親御合體之御實德上下四方ニ相顯堂上堂下列藩天下一毫之間隔無之奉感向候樣被遊度奉存候御奉養之筋茂是迄御手厚之御儀ニ者可有御座候得共此節より被改而御增献被爲在度　朝廷よりハ御受難被遊との御正議茂可被爲在哉と奉存候得共乍恐臣子之御誠意を以御懇願被遊候ハ

、御許容不被遊儀は有御座間敷哉と奉存候將軍職之儀は是迄通御委任被遊諸大名守衛萬端御指揮被遊候樣との
勅諚ニ被爲在候得は固より御專一ニ御擔當可被遊殊更征夷之御職掌を被爲盡一日茂御實功を被奏　宸襟を被奉安度被
思召上候儀と奉存候處方今各國人心不和守備不整折柄乍恐如何成御勝算被爲在候而　宸襟を被奉安候半哉所詮神州之
威武を張夷狄之侮を不受生民之塗炭ニ不陷して　宸襟を奉安候儀從來之　叡慮ニ可被爲在候得は御政令相立士氣振國
力充各國全州之守備一般ニ相成候儀今日之御急務ニ可被爲在御措置筋ニ至候而は時宜ニ應一定難仕儀と奉存候乍恐向
後天下之事是非曲直利害得失得と被仰立　叡慮御伺取ニ而公平正大之御政道被爲在度奉存候方今危迫之時體乍恐一通
り之御指揮ニ而は急ニ御挽回之功茂難被爲遂御場合ニ御座候得は仰願曰者祖宗御創業之御志を御體任被遊君臣御合體
ニ而列藩御綏撫被爲在天下之人民歸向仕候樣御指揮被遊度深奉希望候越中守儀外藩之身ニ而右樣申上候段出位之罪實
ニ不輕深奉恐入候得共此砌周旋之微志今日之時體何分難默止何卒大海之宏量を以御容忍被遊度奉願候頓首々々謹言

三月　　細川越中守

三月晦日津山津和野岡の三藩攝津湊川より武庫川邊警衛を命せらる

〔竹田侯來伺等一件〕

攝州湊川邊ゟ武庫川邊御固被　仰付候間守衛向嚴重可被相心得候尤場所之儀ゝ於彼地割渡可申候松平三河守亀井隱岐
守同樣被　仰付候間申合可被相勤候且又攝州播州境川ゟ湊川邊迄之御固酒井若狹守ゟ被仰付候間爲心得相達置候

三月晦日於京都水野和泉守樣ゟ御達之寫

中川修理大夫

三月某日在京本藩人岩崎昌重書を家郷に贈り幕府對外策の緩漫我藩主の公武合躰盡力の狀況及び公卿諸公の品隲等時局の大要を報す

〔京都美耶解〕

四家探索秘錄

先便言上之稜ハ着即下雲邊之景色を豫備曾聞候處其後段々探索之實を得候次第ハ先御上洛之上大樹を奉始春嶽一橋之
兩卿共無御異儀攘夷之　勅命も被爲受一同背　勅之筋も不被爲在殊ニ大樹へハ御直勅ニ茂追々結構之　叡詞茂被爲蒙
殊ニ亦加茂之神前ニ而　天皇御手すから御酌を被爲取天盃被下候位ニて御合躰就而ハ列藩茂御雌伏之場ニ被爲至此上
神國保護之御會議之外無他事當今英國之難問ハ末儀ニ被爲見外夷一統御敵對之覺悟ニて大ニ御防戰之令を被下候御儀
と竊ニ愚考仕居候處左樣之防配ハ私共坂港入船之節天保山邊ニ四州士少々集合致し何ゟ場所見繕休之儀有之候へ共爲
差仝可有之趣とハ相見不申兵庫邊ハ長州之請場ニ有之候處此儀も本國海環多分ニ而人數不足之由近日右請場ハ御斷被
申出候由若ニ嚴勅出候へ共幕府之差ゑまり無之故ゟ御一統攘夷之實被行兼此内三郎殿之蒸氣船ゟ御出京俄ニ開國之
說を被相唱三日御滯留御屆迄ニ而火急ニ御歸帆此御方を　朝廷甚御待兼故　朝議も數多被爲在候ニ御意外之御歸國故
早速急使　相立候比ハ最早帆影も見不申　粟田宮當時御還俗中川宮と奉稱御存知之通此御方ハ以前ゟ　天朝御隨一之御
正議家ニ被爲在候處近比薩ゟ守護士を數輩差上置如何法便を輪シ候哉俄ニ開國之唱ニ御荷擔被成右申春嶽公一橋公も
叡命御面從而已ニ而現ニ攘夷之實ハ一事茂不被施候而已ゟらす春公ハ御屆も無之過ル廿二日歟竊ニ御出立ニ相成最早
江州御進發之比御引返之　勅使相立候處是ハ御當所之御留守居腹切覺悟ニ而烈く心配仕候故御引返之儀ハ相止申候水
戸中納言東武御警衛且英國御應答之爲十八日比歟御發足　勅意ニハ以前之返答次第一ト先立返り五大州と談判五國共
旨ニ同心致候ハゝ右之國兵同作ニ而攻來可申若不同意ニ候ハゝ先答之末今般貴國ゟ之申立實理ニ合兼可申夫ニ强而申
被募候ハゝ不苦軍艦差向らゝ候ハゝ相應可申萬一其儀を不用候ハゝ向次第ニ兵端を可開旨被蒙仰右之通發途ニ之相成
候へ共春嶽公方之御腹中ニ而ハ中納言江戸ニ御着之上ハ如何之御權略も可有之哉と評茂御座候中納言之御腹臣ニ水府第一と

稱ス武田紅雲齊茂被召連候ヘ共此許ニてハ爲差說茂出不申御一同ニ發途仕候彼是之御行違ヶ敷近日皇武之御間内輪殊之外御混雜之折柄外樣御大名ハ悉御引拂漸く此方樣上杉侯岡山侯迄御滯京ニ相成　君上へも近日ハ夜白ニ被爲懸御不例後强而之御召出ニて押而御長髪之儀御周旋不一方御苦配之御模樣不破敬聞込ニハ御政躰筋兩端之姿ニ相成候而ハ御規則相立兼人心昏惑を生シ後道敗を招ク之譯ニ陷可申仍之一圓御政事關東ニ專委任之方可然哉之御建言之思召立候へとも諸侯方錦囊諸浪人之立腹を恐レ必多度御因循御同心之御方無之漸く上杉侯御一人御同心昨今迄ニ御差出之御模樣と嘗致不破ハ餘程事情探出候樣子ニて御留守居井森井列ヶも承知仕候哉森井ハ探索役ニ而御座候右之次第ニ而中々雲上之御模樣六ヶ敷譯合ニ相成居後來之安否甚難計一昨日廣吉半ニ參り同人ハ住江列同宿ニて岡崎村ニ止宿被仰付置候滯京之趣意を同人へ相尋候處探索之爲御人差ニ而良之助樣ヶ被差遣居候と之申分ニ付段々應合候處愁歎之儀委敷時躰之形勢を相詰り聞せ候全件之聞込とハ大同小違ニ候へ共趣意相分不申首藤森井も同探索之役を被仰付置候へ共銘々別途ニ奉共職候間言上筋茂聞違有之候由青地探索ハ役柄ニ而隱密ハ難得由廣吉嘗ニハ森井列ハ路傍之說を聞かもり候故取ニ不足と嘲り申候尤森井列ハ廣吉列とハ派違ニ而朝政を不稱譽氣味有之廣吉共ハ幕廷ヶ面從心背　叡慮之不貫を大ニ愁歎仕候外寇日夕ニ迫來居候ニ右之通ニ而ハ御國家之安危此時と大息仕居申候　帝へも夷艦内海ニ迫候節ハ直ニ御出馬之御覺悟之由近來拾万石以上壹万石之割ニ而貳拾万石ヶ選兵貳拾人三拾万石之三拾人列藩ヶ被差出　王室守護之軍議相立此方ハ被行候雲行ニ御座候人才を問ニ大樹ハ御評判程ニハ無御座春嶽侯三港開之思召ニて御上京候處御問談ニ臨候而ハ爲差御貯茂無之哉何御陣防茂無之前條ニ而一橋公御同樣朝家之方へ茂三條樣御一方巍々として御器量剛直御兼備之由應司近衛一條樣方ハ御骨足不被成餘り御見識茂無御座候由姉小路拔群ニ而三條樣御同樣ニ被爲在候へ共御位低して御力不出候由其外可仰御方々ハ無之由ニ嘗仕候彼是探索家之聞取と雲下之景氣と比校仕候へハ實々左樣ニも被察候心當り品々御座候依之愚考仕候へハ幕府之方へも今當座ニ兎哉角細目を述據夷之方寛然之事情を陳候而ハ彌逆鱗奉向御一躰之稜目相立兼折角之御上洛も水之淡と罷成世之人氣も如何ニ付暫ハ面從因循之覺悟ニ而英船之方へハ出格之所置を被附一ト先無事之歸帆を被促候共ニ而ハ無之哉無左てハ防戰眼前ニ差迫居候形勢ニ一統うか〳〵と光陰を被費居候ハ不落着之事柄ニ御座候と有志之徒ハ内々愁眉寄居申候事ニ御座候併時勢之反覆朝幕ニ有之只今ヶ樣之雲行ニ御座候へ共明日ハ如何ニ變候哉玄豬之空之如と長歎仕候族も御座候虛實を正し聞取之儀御閑隙之礼下奉呈仕候へ共餘り早筆三隅出立之間ニ合セ度差急キ候間偏ニ御推覽之程奉仰候御都合次第ニハ所々ヶ之京便ニ承知も可有御座候へ共草場丁松原先生方へハ御試ニ内々御見せ被成候而も不苦山仰亭へ茂御同樣ニ奉存候以上

三月廿日　　蟻穴亭（岩崎昌重）

四月朔日松平甲斐守外十名京都及ひ其附近の警衛を命せらる

〔尊攘錄皇武合〕

山崎邊御警衛被　仰付候間諸事嚴重可被申付尤勤方等委細候之儀者松平肥後守牧野備前守へ可被承合候　　松平甲斐守

同文言　　阿部主計頭

牧方渚邊御警衛被　仰付候間諸事嚴重可被申付候尤勤方等委細之儀ヹ松平肥後守牧野備前守へ可被承合候右ニ付朱雀御固者被成御免候　　永井飛彈守

同文言淀街道洞ヶ峠邊渚八幡之間御警衛右ニ付伏見街道竹田街道御因者被成御免候　　稲葉長門守

京都御警衛被　仰付候間得其意場所之儀者竹田街道ゟ伏見邊等相心得諸事嚴重可被申付候尤勤方等委細之儀者松平肥後守牧野備前守可被承合候

加藤越中守

同文言伏見街道ゟ宇治邊等

戸田采女正

鷹ケ峰口ゟ下鴨邊御警衛兼而被　仰付置候處長坂周山邊を茂御警衛被　仰付候間諸事嚴重可被申付候依之下鴨口御固之被成御免候尤勤方等委細之儀者松平肥後守牧野備前守可被承合候

青山因幡守

京都御警衛被　仰付候間得其意場所之儀者下鴨口ゟ大原門邊等相心得諸事嚴重可被申付候尤勤方等以下右同

仙石讃岐守

同文言朱雀口ゟ老ケ坂邊ト相心得諸事可被承合候九鬼大隅守に茂同樣相達候間可被申合候

織田山城守

同文言織田山城守へも同樣相達候

九鬼大隅守

粟田口ゟ北白川口邊御警衛兼而被　仰付置候處逢坂山邊御警衛も被仰付候間諸事嚴重可被申付候尤勤方等委細之儀者松平肥後守牧野備前守可被承合候

本多主膳正

右之通御座候以上

四月朔日

四月二日本藩政府は對英事件の結果を慮り緩急機を失せさらんが爲め兵備充實の必要を藩内に訓示し在御家人の子弟長柄の者等に西洋式銃隊稽古を奬勵す

〔機密間日記〕文久三年

覺

此度横濱港に英吉利軍艦渡來三ケ條之儀申立何ゟ茂御聞屆難成筋に付其趣を以可被及應接候間速に兵端を開候哉茂難計仍而之銘々藩屏之任に有之候に付夫々備向も可有之由京都御所司代樣より御書付被成御渡候右之通ゝ付差寄大小炮を初其餘之兵器共彌以嚴重に御手當有之事に候條御備組之面々之申に不及御國中在御家人之子弟等に至迄乾度其旨相心得可申候尤一己々々之存意を以騷立候樣之儀有之候而者難相濟何事茂御下知を奉待候樣組支配方ゟ茂精々可被示置候以上

四月二日

覺

御郡方
御奉行ゟ

方今不穩時勢に相成殊に藩屏之儀京都ゟ御達之趣茂有之候間不虞之御手當筋彌以御手厚被遊御覺悟事に候依之御國中在御家人等子弟に至迄相州詰同樣於御國許茂池部啓太申談西洋法銃隊稽古被仰付自然之節之別途に被召仕筈に候條右稽古筋之儀御郡代中差入致世話候樣可被達候尤下地之流儀に而年々大筒手受持等者是迄之通被仰付筈候以上

四月二日

右同斷自然之節之別途に被召仕旨尤下地之流儀に而年々大筒手受持等之是迄之通被仰付筈之段被及達候間左樣可有御心得候以上

同日

學校方
御奉行中

炮術師役衆中
財津勝之助殿

右同斷被遊御覺悟事ニ候依之自然之節御便利ニ茂可相成候間各御組御長柄之者共江戸表同樣於御國許茂池部啓太差圖を受西洋法銃隊稽古被仰付旨候條此段可有御申聞候以上

同日　御奉行中

御長柄頭衆中

御郡代御長柄頭ニ達之趣者池部啓太ニ寫遣候事

西洋法銃隊稽古之儀ニ付被及達候趣別帋書付寫二通差遣候間左樣可有御心得候以上

四月二日　御奉行中

池部啓太殿

四月二日西國郡代屋代增之助は英艦渡來狀勢不穩の風聞あるを以て書を我藩に致して豫め天草島の應援を乞ふ

〔他國狀扣、相摸國御備場御用一件、京都御警衛一件〕

一筆致啓達候然ゝ支配所肥後國天草島村々海岸御警衛向之儀松平主殿頭ニ兼而被仰付置候處此程英吉利國方不容易儀申立此上應接之次第ニ付速ニ戰爭可相成段御觸之趣并此程風聞ニゝ候得共長崎并薩海ニ茂英艦可乘入ゝ之由申唱依而ゝ天草島海岸ニ茂何時可乘寄哉茂難計然處主殿頭儀は領分并御預所村々海岸多共上長崎表ニ茂御固人數差出候由ニ而元來小家之儀天草島御守備向一手引受ニ而ゝ十分ニゝ行屆間敷甚掛念罷在候儀ニ有之尊藩にゝ京都其外口々御警衛御心得之儀ゝ承知いたし居候得共御大家之儀御加勢御差支も有之間敷更天草島ゝ御隣地之事ニ茂候間萬一同所ニ異船渡來いたし候節ゝ當岡陣屋詰手附山崎信太郎山本寛藏より可及御通達又ゝ御通達方遲延いたし候とも御間近之儀其地にゝ模樣柄速ニ御分ゝ可相成候間其砌ゝ急速爲援兵御人數御差出有之候樣存候勿論右ゝ以來永世如斯御取計ゝ申ニ者無之同所增御警衛之儀最寄諸家之內ニ被仰付候積取調中ゝ付右等取極候迄當節全一時之儀ゝ御心得可有之候此段申達候

恐惶謹言

四月二日　屋代增之助
忠良判

長岡佐渡殿
有吉將監殿
松井冑助殿
小笠原備前殿

〔小笠原備前日錄〕

四月五日　曇來雪雨

(略)○昨日、從日田縣官屋代氏、臨異變、而告出兵於天草島、因議、先急告京師、且豫示士大將、

四月三日朝廷藩主慶順の歸國を許さる

〔文久三年二月日記、文久三年正月より御記錄、尊攘錄皇武令、依御願御暇被仰出京地御發駕一件〕

細川越中守

野宮樣より御渡之御書付寫

帝ィ京都御警衛被仰付之處御請　御滿足思召候當節切迫之折柄自國海岸防禦筋深懸念ニ付歸國之願難被獸止候間願之通賜

御暇候但家老兩人並人數殘置且爲名代一門呼登可有御守衛夫迄之處末家細川主米輔滯京之旨手厚御守衛之志情　御滿足候猶嚴重申付有之候樣被遊度　御沙汰候事

四月

〔魚住文書尊擯雜錄〕

今度御歸國御願之通　御暇被　仰出候ニ付來ル六日晚七ツ半時之御供揃ニ而御當地被遊　御發駕旨被　仰出候事

四月三日

〔自筆狀控〕（文久三年元治元年）

以別紙申達候京地之事躰時々打替寸斗一定之筋ニ至兼申候茂内實之堂上方御役懸一致ニ無之處よゝ之儀ニ而長歎息之至ニ御座候然ルニ　帝都御守衛被爲蒙仰候處ニ而之無圖斗御發駕と申儀之不被爲出來御樣子ニ付御備片手被召登夫ニ席中か一人被差置と申譯を以御歸國猶御備頭被差登候處ニ而席中罷下段々と細メ不申而之何分御都合不宜大方右之取組ニ仕候ハヽ被行可申見込茂有之候而最前荒增之儀申進置候通候處事情增々事八ヶ間敷相成當時之處ニ而之此儘御歸國と申儀一切御運ヒ付兼當夏先キ迄茂御滯京被爲在候ハヽ、御暇被仰出ニ而茂可有之哉之御模樣ニ有之其儀之御守衛を諸侯方輪番を以御請持被仰付候哉之見込之由御座候處此元へ永く御滯京被爲在候得之彌以御内輪御煩敕筋而已ニ有之其末如何成御配慮筋差起可申哉と朝夕奉懸念候事共御座候去ハ迚此儘御引拂之決而御六ヶ敷被爲在夫等之儀ニ付而之御役々重疊周旋仕且御自身樣ニ茂應司樣を初御間柄之譯旁一條樣三條樣方御手を被盡候得共一切御内情相貫不申强而御歸國と申御願立ニ候ハヽ兩公子樣之御内御出京之御沙汰有之拔差ならぬ御場合而已ならす御滯京被爲在候得之必多物御都合之不宜其上前條段々之通ニ而可致樣無之誠之御窮策ニ之候得共御國許海岸場廣殊ニ天草地方を受海防之要衝ニ候へと當時切迫之折柄一際御防禦筋等之儀御取加將又拙者共兩人并御備手被殘置爲御名代御一門衆兩人之内一人至急ニ御呼登屹度御守衛被仰付候上御歸國御願可被遊處御國許殊之外切迫之次第ニ付右御名代上着迄之細川主米輔殿滯京被致とのの儀を以被仰立*瀨御歸國御願濟ニ相成明後六日御當地被遊御發駕旨被仰出候依之御一門衆ニ之御直書田中八郎兵衛ニ被遊御渡海上之早打小倉路中之急ニ而明日此元被遊御差立候間同人着之上委細之事情言上可仕候條御一門衆之内出京之儀ハ御配意之筋ニ候得共無御據御場合ニ付連ニ出立ニ相成候樣御厚配可被下候此段爲可申進中國路四日限之屆飛脚差立候付如是御座候以上

四月四日

沼田勘解由
長岡監物

惣連名殿

尙々御願書并御差圖振爲貳通差進申候以上

*下ニ付札也

本紙之通被仰立ニ而先ツ御歸國之御一條之御褒被遊候得共上杉樣と御兩家御警衛被爲蒙仰なゝら御歸國被遊候事甚以六ヶ敷有之候間住江茂兵衛ニ無御餘儀御譯合等精々申聞同人列よゝ也關白樣初重疊手を盡周旋仕候處か此節御運ヒ茂付申候然處一万石ニ一人宛忠勇之者差出可申旨頃日公武か御書付御渡相成右之御請被仰上御國元か別段御人數被差出候と申御主意相貫旁御暇之埒ニ至若右御親兵御斷被仰立候ハヽ今度之御暇を決而不被仰出御樣子ニ有之拔茂差も不相成御場合ニ候處御親兵一條此元詰合中いつゝも不安意之儀ニ付御斷被仰立候方と一旦之咄合申候へ共反覆仕候へと御歸國ニ御差障有之候而ハ先々之御都合ニ係り候儀ニ付不被得止御親兵被差出候方ニ於此元之御決議相成右人躰撰出等之爲メ住江茂兵衛宮部鼎藏被差下候儀ニ御座候全く御親兵と御歸國と替候道理ニ御座候書面迄ニ而之御不審も相立御論判も可有之委敷儀之八郎兵衛下着之上御聞取且御供ニ而右田才助茂罷下候事ニ付得斗此元事情御汲取可被下第一之登慮御伺被下候而御高評仰申候

四月四日幕府は秋田外四藩に命して江戸市中を取締らしむ

〔文久三年四月以來大坂返達御用狀扣、文久三年三月ゟ元治元年十二月迄江戸返達狀扣〕

四月四日　　佐竹右京大夫
河内守殿御渡　　酒井繁之丞
大目付　　大久保加賀守
御目付　　松平右亮
　　相馬大膳亮

兼而被仰出之通英國軍艦渡來不容易折柄ニ付市中其外之動搖ニ乘し惡徒共徘徊可致亂妨も難計依之其方共ニ御取締被仰付候間銘々人數差出晝夜ニ不限御府内見廻り狼藉者見掛次第無用捨召捕時宜ニ寄打果候而茂不苦委細之儀者町奉行可被談候

四月（四日イ）

四月四日藩主慶順は將軍親しく京都守衛の任にあたり公武一致以て天下に號令し宸襟を安じ奉らんことを朝廷及び幕府に建白す

〔文久二年より元治元年迄自筆狀〕

一公方様一旬之御滯京ニ而之御親睦之御間茂不被爲在候間御建白之一旦咄合いたし候得共追而御發駕御延引等ニ而右之被仰立御見合ニ相成候段之申進候通ニ候然處最前之御主意を以御建白被爲在候方御都合可宜御模様ニ付公武御双方ニ別紙寫之通被仰立候爲御承知此段茂申達候以上

四月四日　　沼田勘解由
　　長岡監物

備前九郎右衛門省
惣連名殿

〔御内勅等書拔〕

左之御書付調出來旣ニ御差出ニ相成筈之處將軍様御滯京被仰出候付御見合ニ相成候（これは三月の書込にて四月に至り遂に提出せしものゝふり）

公武御合躰之儀者年來之叡慮ニ被爲在候而追々被仰出之旨奉敬承於越中守茂周旋盡力仕候樣ゝ之勅書を茂被下置誠ニ以冥加至極難有仕合謹而御請申上當春上京仕候處去年已來將軍家ニ者彌以叡慮御遵奉被爲在當二月速ニ御上洛御參内御拜顏茂被爲濟二百年來御欠典ニ相成居候御大禮一時ニ御調ひ被遊君臣之御禮敬燦然明白御國躰相立候得者於越中守者感戴無餘外ニ周旋盡力等仕候存意者更ニ無御座候然處此節將軍家ニ者日數一旬之御上京ニ而御歸府被爲成候由彌左樣ニ御座候得之誠以御日淺之御事共ニ而折角之御親睦間茂不被在爲御難別被遊候儀眞實御殘念之次第ニ奉存候當時外國御處置筋不容易御時節關東之御鎭護別而重大之御任ニ御座候得之速ニ御歸府被爲在候儀乍恐叡慮茂可被爲在　將軍家ニ茂無御據御時躰ニ茂可有御座ゝと奉敬考候得共今度御合躰之御容相顯候而茂時勢切迫人心未定候得者此儘ニ而　將軍家直ニ御引拂ニ相成候而者向後帝都之御鎭定何程之御都合ニ可被爲在哉ゝ深ク奉憂念候殊更　君臣之御間萬々御融釋ニ者可被爲在候得共旬日之間繁多之御式等誠ニ御早忙之御事共ニ被爲在纔一兩度之御拜

顧ニ而　君臣御離別東西御懸隔被遊候儀被是以遺憾至極ニ奉存候仰願曰者今暫　將軍家御滯京之儀被ゟ仰出候儀者被爲叶間敷哉左候而節々御參內被　仰付天下之利病人民之休戚等一々被遊御覽　將軍家之設施措置之次第等得と被爲聞召上萬機之御暇時々御寛談も被爲在候ハヽ　君臣之御間霽然たる御誠意湧溢股肱腹心之御親ミより　朝廷御一致ニ而天下御指揮被爲在候ハヽ紀綱儼然政令不二公平之御政躰始而相立御合躰之御誠意全ク天下ニ相顯候而感觀服從人心安堵可仕と奉存候萬一夷虜近海に闖入之時ニ者　將軍家自ら旗下之精兵を被帥在京之諸侯と共ニ禁闕を御守護被爲在候ハヽ盤石之御固メニ　而宸襟御安寢茂可被遊御政令行屆人心居合候上　將軍家目出度御歸府被爲在候樣有御座度奉存候左候者之　朝廷　將軍家を御禮遇之御盛道萬代ニ高ク將軍家　王室翼戴之御忠節後世ニ垂レ古今未曾有之御盛業ニ而天下長ク泰平を可奉仰と存奉候右者誠ニ狂妄之建言不憚　尊聽申上候段恐懼戰慄罪當萬死候と奉恐之候得共臣之愚昧唯々　朝廷之御爲天下之爲と存込候迄之微心ニ御座候臣誠恐誠惶頓首謹言

三月　　細川越中守

武ノ方
公武御合躰之儀ニ付而者深キ　叡慮之旨被爲在迫々　勅諚茂被　仰出候處萬つ　御遵奉被遊去年以來數々御改革茂被仰出御旨趣之通深ク奉敬承誠以難有仕合ニ奉存候於又此節速ニ　御上洛　御參內　天顏　御拜謁茂御首尾好被爲濟二百餘年來御欠典之御大禮一時ニ御調ひ被遊候儀全ク御恭遜之　御盛德　天意ニ相叶候御儀と於御名茂乍恐難有奉感服候然處　御滯京幾一旬ニ而可被遊　御歸府との御模樣ニ奉伺候得者誠ニ以御日淺之御事共ニ被爲在折角之御親睦間茂不被爲在御離別候儀乍恐於越中守茂實實御殘念之次第ニ奉存候當時外國御處置筋不容易御時節關東之　御護護別而御重任ニ被爲在候得ゟ速ニ被遊　御歸府候儀も時世無御據御事とハ奉存候得共當地之形勢御政令相立兼人心疑懼致し切迫の折柄此儀直ニ　御引拂被爲在候而ゟ向後　帝都之御鎮定何程ニ可有御座哉殊更　公武之御間ニ茂深ク奉憂念候間仰願曰者今暫　御滯京御願被遊度奉存候乍恐兼而御誠敬御尊奉之　思召より　帝都之御鎮定も諸藩に被託置候而無味ニ整穀之下御離レ被遊候儀如何ニ茂難被忍處より　御誠意を以被　仰達候ハヽ霽然たる　叡慮速ニ　御許容被遊今暫滯京御鎮定之儀可被　仰出と奉存候然ル上者乍恐　御一身ニ而天下之重任　帝都之御守衛　御護當被遊節々　御參內天顏御恩尺被遊いつく迄も御誠敬恭遜之　御盛德を被爲積天下之利病人民之疾苦を初列藩富強之御措置外國掛御之御策略等輕重緩急之次第巨細ニ被　仰上天下之人民塗炭ニ不陷樣との本末之　叡慮を御擴充被遊邪說橫議自然ニ畏伏仕興國濟民之御大業御仕遂被遊候而　宸襟を被奉安候樣被遊度奉存候一旦御政令相立人心居合候上之目出度　御歸府可被遊御儀ニ御座候得共古今時世之變却當今之勢何分東西御間隔被爲在候而之御政令遲滯之儀も難計候得之當分　帝都ニ　御滯在　君臣御親睦　叡慮　台旨御一致ニ而天下ニ御号令被遊候ハヽ人心服從海內治安之御基本と奉存候越中守儀勅命ニ依而上京仕居是迄　公武之御間何一ツ御周旋仕候儀も無御座奉恐入候內今更麁忽之建言仕候儀眞以深ク奉恐入候得共愚昧之管見卿天下之御爲合と存込候間不憚忌諱奉言上候出位之罪大海之　宏量を以御許容被遊候ハヽ難有仕合奉存候誠恐誠惶頓首謹言

三月　　細川越中守

四月某日我藩宮部鼎藏長藩久坂義助閣老板倉勝靜に見えて攝海の防備及ひ攘夷の勵行を促す

〔京都みやけ〕（四月廿二日附書狀ノ內）

一長州久坂玄瑞御國宮部鼎藏外ニ一人同道板倉閣老へ罷出攘夷之期限御決ニ相成候節接海防禦之御所置如何御手當御座候哉と御尋申上候由閣老御返答攘夷之儀ハ大樹公還御之上ニ御決ニ相成箸攝海ハ當時專御手當ニ相成候由御返答御座候由

〔御記錄〕（文久三年）

四月五日藩主慶順參內して龍顏を拜し天盃を賜はる

四月五日　雨

一今日己刻御発

内被遊候様昨夕野宮宰相中將様より御達有之朝六半時之御供揃ニ而五半時過御出行　一ト先一條様に御中座ニ而夕八時過御発

内　被遊候處　龍顔御拜　天盃御頂戴被遊七半時過　御退出直ニ應司様に被爲入御對面夫より長谷様飛鳥井様以下御順之通　御廻勤一條様ニ被爲入候處近衛様御父子様ニ茂御出ニ相成緩々　御滞坐翌六日朝六半時比被遊　御歸館候

四月五日幕府我藩外十三藩に對馬應援の心得を以て豫め軍備を整へ置くべきことを命す

〔尊攘錄皇武令、文久三年四月より十二月迄京都返達御用狀扣〕

松平美濃守　松平修理大夫　有馬中務大輔　細川越中守　立花飛彈守
松平肥前守　奥平大膳大夫　小笠原大膳大夫　中川修理大夫　内藤備後守
松平主殿頭　伊東左京大夫　稲葉右京亮　黑田筑之允

對州表之儀之絶海之孤島ニ付外夷襲來候儀も有之節援兵並糧食運送等之儀相心得候樣松平大膳大夫松浦肥前守小笠原佐渡守松浦豐後守に被仰付候得共九州者近海之儀ニ付相互ニ申合應援可致心得を以兼而手配可被致置候

右於和泉守宅銘々家來呼出書付相渡之

四月五日

四月五日幕府は英艦渡來して江戸市中の動搖せるに乘し惡徒の徘徊亂妨の虞あるを以て酒井繁之丞等に府内の巡視を命す

〔尊攘錄皇武令〕

亥四月五日

豐前守宅に銘々家來呼相達候趣

兼而被　仰付候通り英國軍艦渡來不容易折柄ニ付市中其外動搖ニ乘し惡徒とも徘徊可致亂妨も難計依之其方に御取締被　仰付候間銘々人數差出昼夜ニ不限御府内見廻り狼藉見掛次第無用捨召捕時宜ニ寄打果候共不苦候間委細之儀之町奉行に可申談候

酒井繁之丞　大久保加賀守
松平右京亮　相馬大膳亮

右同文言

但　御留守中非常之節人數差出候儀者御免被成候

一佐竹右京大夫右廻り方　御免相願候ニ付代り

右被　仰付旨前同文言

亥四月九日

豐前守殿御渡

阿部播磨守

町奉行に

今般酒井繁之丞大久保加賀守阿部播磨守松平右京亮相馬大膳亮市中取締被　仰付日々書夜人數差出右人數南北非常町廻り申付候ニ付寺院番屋等被差懸り休息所ニ致し候哉も可有之候間其段相心得居候樣町々に早々可被申達候事

文久三年

四月十七日

御同人御渡

町奉行に

酒井繁之丞代り酒井若狭守に被仰付候間町々に早々可被申達候事

四月五日藩主慶順書を一門長岡内膳同刑部及び老臣等に與へ内膳刑部兩人の内孰れか速に上京し已に代りて守衛の任を盡さんことを命す

〔文久三年京都諸扣〕

田中八郎兵衛差立申入候我等歸國之儀御上洛相濟候而は早々致下國政事向萬端不致指揮候而者懸念此事ニ候處帝都御守衛蒙仰居候得者容易ニ難奉願深令苦惱候依而別紙書面之趣を以奉願候處被爲聞召屆御暇賜り候間明六日當地致發足候就而者其方共内早々致上京名代として可致指揮候尤此砌別而苦身之儀令心痛候得共名代不被差出候而者御守衛中歸國之願難相叶不得止呼登候間此許之事情篤と汲取我等旨趣相立候樣可致盡力賴入候委細は家老共ニ申遣猶八郎兵衛ニ茂申含置候恐々謹言

四月五日　　越中慶順御判

長岡内膳殿

長岡刑部殿

右同斷致發足候就而者内膳刑部兩人之内早々致上京名代として可致指揮候尤此砌別而苦身之儀令心痛候得共名代不差出候而之御守衛中歸國之願難相叶不得止呼登候間此許之事情篤と汲取我等旨趣相立候樣可致盡力申遣候間此旨兩人ニ厚可申聞候猶委細之儀ニ長岡監物沼田勘解由より可相述候謹言

四月五日　　越中慶順御判

家老中

中老中

〔文久三年自筆狀控〕

一筆致啓達候太守樣　帝都御守衛被爲蒙仰候付容易ニ御歸國難被遊御願候處御國許之儀海岸場廣殊ニ當時切迫之折柄御防禦筋且御國政向ニおゐても萬端不被遊御指揮候而之深被遊御懸念候依之拙者共兩人并御備御人數被殘置爲御名代御一門衆之内一人至急ニ御呼登被遊候尤夫迄之間之細川主米輔殿滯京之御願立ニ而御暇被仰出候右之御儀ニ付而御一門并席中ニ之御直書田中八郎兵衛ニ御渡今六日爰許被遊御差立候條着之上此許之事情篤と御汲取御一門衆之内急速ニ上京有之御旨趣相立候樣可被有御周旋旨被仰出候條彌以御盡力候樣存候恐々謹言

四月六日　　沼田勘解由

長岡監物

惣連名殿

四月六日朝廷來十一日石清水行幸につき社頭其他の警衛及び加員隨身の員數等を我藩外十九藩に達せらる

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、御内勅等書拔〕

（四月六日所司代より留守居を召喚して之れを渡す）

別紙之通被仰付候旨傳奏衆被申聞候間可被得其意候

四月

來ル十一日石清水社　行幸ニ付社頭御警衛被仰付候遠路且　還幸夜ニ茂可相成候付嚴重可有之旨傳奏衆被申聞候間可被得其意候尤上杉彈正大弼ニ茂同樣被仰付候間可被申合候

四月　　正親町少將

右肥後十人

來ル十一日　行幸之節右之人數爲加員隨身可差出尤可爲士分事

衣體布衣帶大小刀右烏帽子布衣禁中より被渡之前日十日於當役月番亭可相渡事

當曉丑刻無遅々休所ニ參集之事

但凝華洞内假建物之事辨

當主人々々より可被渡尤精進之事

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、御内勅等書拔〕

口狀覺

別紙二通之通被仰出候間御達可申旨兩卿ニ被申付候早々御廻達可被成候尤御請書御差出可被成候以上

四月六日午刻　　野宮家　雜　掌

坊城家　雜　掌

次第不同

尾張樣　水戸樣　紀伊樣　松平大膳大夫樣　松平阿波守樣

松平陸奥守樣　松平美濃守樣　藤堂和泉守樣　上杉彈正大弼樣　有馬中務大輔樣

細川越中守樣　松平讃岐守樣　松平出羽守樣　佐竹右京大夫樣　松平土佐守樣

宗對馬守樣　松平備前守樣　松平紀伊守樣　南部美作守樣　松平修理大夫樣

右御留守居中

追而刻付を以御廻達野宮家ニ可被成御返候以上

（別紙）

今度　行幸遠路且　還幸夜儀ニ茂候間窓而御警衛嚴重可有之

細川　上杉

途中口々並要所嚴重警衛

次第不同

尾州　水戸　紀州　長州　備前　土州　藝州

仙臺　對州　高松　黑田　佐竹　藤堂　久留米

南部　藝州

右之内當時主人滯京無之向茂有之候得共詰合之人數ニ而可相勤

禁裏並内侍所

文久三年

守護職　所司代

禁裏九門内

警所　淀　高槻　笠山

右御警衛持場人數差出場所之儀ハ松平肥後守牧野備前守樣等ニ御尋候樣ニと存候事

四月

（別紙）

寫

近衛左大將

右尾州三十人

德大寺内大臣　右大將

右水戸三十人

梅筒中將
右會津二十人
澁野井中將
右阿州二十人
松木中將
右筑前二十人
梅溪中將
右藤堂二十人
東園中將
右雲州十人
河鰭少將
右藝州十人
三條西少將
右長州十人
正親町少將
右肥後十人
東久世少將
右佐竹十人
姉小路少將
右土州十人

來ル十一日　行幸之節右之通爲加員隨身書物之人數夫々自諸藩可被差出候尤可爲士分事

衣冠布衣帶大小刀　右烏帽子布衣

禁中より被渡之前日十日於當役月番亭可相渡事

當曉丑刻無遲々休所に參集之事南門之前凝華洞之內ニ假建物有之

辨當主人々々より可被渡候尤精進之事

〔仝書、仝書〕

四月六日

傳奏野宮宰相中將樣より御渡有之候御書付之寫

御警衛場所

細川越中守

本宮馬場西方八角堂前通一ケ所

本宮東惣門外一ケ所

但幕之其御方ニ而御用意之事

四月六日藩主慶順京都を拜し歸國の途に就く

〔文久三年御記錄〕

四月六日　雨

一今日五半時之御供揃六半時と仰被出置候處前條之通ニ付五半時ニ成ル京都御發駕伏見　御休ニ而直ニ　御乘船被遊候

追々御頂戴之天盃入御唐櫃御行列之鼻ニ爲御持也

一本文御發駕書八時比ニ成稻荷前御小休ニ而伏見御着者夕七半比夫方御乘船ハ及暮

〔小笠原備前日錄〕

四月十二日　陰

去四日、發京之郵使至、君公有賜暇之令、以六日發京、至直於大阪、七日滯留、以八日發、十日至室而上船云々、海上以七日、則以廿二日、公駕當至此地也、

四月某日本藩宮部鼎藏等京師を發して國に歸る

〔宮部文書〕（田城宮部先生行狀）

癸亥二月藩主韶邦公入朝ス介弟護美公國ニ就ク同志ノ徒亦從先生訓一信道等ト皆藩命ヲ以テ留ル日夜奔走國事ニ周旋ス四月比皆藩ニ歸ル

四月七日坊城野宮兩傳奏雜掌は三條實美に京都御守衛御用掛の命ありし旨を我藩に通告す

〔太守樣御上京良之助殿御出京一途、文久三年京都諸扣〕

口狀覺

右御守衛御用掛被仰出候ニ付爲御心得御達被申候右ニ付御守衛人數名前書是迄當役ニ御差出之向は別段御差出ニ不及未御差出無之向は三條殿ニ御差出可被成候以上

三條中納言殿

四月七日

野宮殿　雑掌

坊城殿　雑掌

細川様　御留守居中

追而御一覽之後坊城家ニ可被成御返候以上

四月七日將軍家茂攘夷の期限切迫につき上下奮勵すべき旨を布衣以上の諸有司に諭す

〔侯爵細川家書庫文書〕

四月七日二條御城ニ而御黒書院ニ出御布衣以上之御役人ニ上意之趣攘夷之期限切迫且滯京ニ付而ハ別而心掛厚く別紙之趣相心得抽忠勤候様和泉守殿於御前御讀渡之趣

此度上洛之上戊午年以來政事向不都合之廉々申上事實御了解相成總而是迄通御委任被遊難有事ニ候然處當表攘夷期限切迫ニ至候間此上歸城致候得ハ攘夷之擧ニ及義ニ付一同此旨厚相心得報國赤心相顯候様心懸可申ハ勿論之儀滯京中聊ニ而も遊情之擧動有之候而ハ別而關東之者共攘夷之存念薄く鬪爭之氣力無之様人々相唱可申間今之事情洞察之上忠勤精意貫徹候様可被相勵候事

四月七日本藩政府は在京老臣に通牒して天草警衛に關する重大なる結果を慮り相州及ひ京都の警衛を辭し專ら領海の守備に力を盡すことの可なる所以を述ぶ

〔京師御警衛一件 相州御備御用捨御願附込〕

一相州御備御解放之儀再應御内意之事

四月七日御國被差立候早打御飛脚同十三日夜京地ニ達英國軍艦より申立之儀付而天艸島ニ援兵被差出候様日田御郡代衆より申來候付御國御家老衆より如左申來候

以別紙申達候近來之時勢ニ相成候而者京都并相州之御受持重疊御難渋之次第ニ付御家中一統より願之趣去朝日早打御飛脚を以得御意候通候處天草表御警衛之儀付而西國御郡代屋代増之助殿ゟ別紙之通御達有之御覺悟前之儀ニ者候得共於其御地御取扱之御心組ニも可相成哉ト返書寫を茂差進申候右付而猶又精々咄合候者外夷より兵端を開候埒ニ相成候ハヽ强西海而已ニ無之攝海本海ニ茂事起り可申左候ヘハ京師相州とも下地被差越置候御人數ニ而可相濟様茂無之天草ニ者都合三ヶ所之御受場其方ニ專御手當有之候得者御國御警衛御隣境御援兵等何を以御取賄ニ相成可申哉其上遠路大勢被差越置候得者兵器兵糧等も勿論夫ニ應不申而者難相成先便も申達候通萬一海運を被塞候ハヽ必至度行當可申彼是如是切迫之場合ニ相成現實追而之見亘無之儀を一時之御都合而已を御差測其儘御請ニ相成居肝要之節ニ至如何躰ゝ茂御力ニ不被及敗を取候様ニ茂相成候而者實ニ　皇國之御爲ニ相成不申却而御不忠之筋ニ成行候儀者眼前之事ニ付京都并相州之方ハ右之趣を以

太守様より公然ト御斷被　仰上御領内海岸之御守衛天草御手當筋ニ十分御力を被入候様被　仰付度旨御願立ニ相成候而も可然哉然處京都之儀者　御守衛茂被蒙　仰候得者彼も是茂御斷ト申候而者無據御事情ト者乍申御都合惡敷綾も可有之歟左候ハヽ最前差進候書取通之譯ニ候得共　御警衛之儀者格別之儀ニ付猶又御人數茂被召寄候ト之御都ニ

而猶坂崎組共被召寄候御都合ニも候ハヽ　御下國之御都合ニ茂相成可申哉御許之模樣得斗相辨不申候間猶精々御評議之上御取計有之度何樣當時之有樣ゝ而者寸分茂立行不申御國力茂盡果可申大切之場合ニ相成申候右之趣爲可申達猶又上々早打之御飛脚差立候事ニ御座候以上

四月七日

平野九郎右衛門
有吉市左衛門
三淵志津摩
松野亘
小笠原備前
有吉將監

長岡監物殿
沼田勘翁山殿

猶々京都相州とも　御免ニ相成候ハヽ天草に者との道御手當有之事ニ付御預ニ相成候而も素より子細も無之其儀者御地之御都合次御ニ御取計可被成候日田より書面通ニ候得者天草御受持も御ゑらゑ中と相見不遠御變革ニ茂相成可申哉夫等之事より最安御解放出來候樣ゝ茂有之候ハヽ此上茂無之旁端書を以入御耳置申候以上

四月七日本藩政府は西國郡代屋代增之助に答書を贈る

〔他國狀扣〕

一屋代增之助樣

四月七日

御飛札致拜見候然者御支配所天草島村々海岸御警衛向之儀松平主殿頭樣ニ兼而被仰付置候處今般英國ゟ不容易儀申立候付而御觸達之趣且長崎并薩海に茂英艦可乘入と之由此程風聞有之依而ゝ天草海岸に茂何時可乘寄哉茂難計然處主殿頭ニゝ御自領并御預所村々海岸多其上長崎表に茂御固人數被差出彼是ニ付天草島御守備向御一手引受ニ而ゝ被成御懸念儀ニ御座候間郡藩之儀茂京都其外御警衛被仰付置候得共天草島ゝ隣境之事ニも有之候付万一同所に異船渡來いたし候節ゝ富岡御陣屋詰御手附より可被及通達若又其儀致遲延候共當地に模樣相分次第急速爲援兵人數差出候樣尤右ゝ永世之儀ニ而ゝ無之當今全一時之儀と相心得可申旨委細御紙上之趣承知仕早速京都越中守に相達可申候恐惶謹言

左之趣ゝ御別紙ニ而ゝ何程ニ可有御座哉

天草島之儀ゝ元來肥後國中之一島ニ而萬一此島を外夷より奪取らゝ候樣ニ茂有之候而ゝ當領内ゝ不及申隣境且皇國之御爲ニ不宜候得ゝ兼而守衛向被仰付置候儀ニゝ無御座候得共自然之節ゝ急速駈付防禦不仕候而ゝ難相成此頃英國軍艦一條ゝ組相聞候間專其手當筋致覺悟居事ニ御座候尤相州御備場受持中京都御警衛を茂被仰付置候末如斯時勢ニ相成茂以致心配候間公邊に御内意被申達置候趣茂有之願曰遠境之受持ゝ御用捨ニ相成領内海岸並天草島に重疊力を入候樣被仰付度事ニ御座候以上

四月七日本藩長崎留守居匂坂平右衛門は時局に關し同地關係諸藩の出兵佐賀藩の砲臺建設及び同地在留英國領事の擾亂鎭靜の爲めに致せる市民に對する宣言書並に長崎奉行に對する書翰寫しを藩政府に提出す

〔尊攘錄新聞紙並夷情探索等〕

爰許異變御手當御兩家ゝ別段ニ而最早二番手迄被差出島原樣茂木口御受持御人數壹番手平戸樣ハ御在所固茂有之當所ニ者番頭一手被差出置申候由

一夏方聞役最早何方様も出揃居申候
一別紙和解貳通長崎ゟ飛脚差立相達可申筈之處私儀出立差懸候付見合置候間乍延引差出申候
一佐嘉様御屋敷新地築立之出張此節石火矢數挺御備ニ相成候筈ニ而專ら土俵築立之御臺場出來ニ相成居申候
一佐嘉其外より之廻狀寫一通差出申候
右之段相達申候間御家老宛へ茂被及御達可被下候以上

四月七日　　匂坂平右衛門

御奉行衆中
各國

コンシュール

擾亂靜謐之爲め貌利太尼亞官吏よりの告書

一長崎之衆人聞知せし如く先頃貌利太尼亞人に對し正からさる所置を爲せし一件ニ付貌利太尼亞政府より衆評治定の事件日本政府に申立此義廉直なる事故談判整へしと希しニ日本官府におゐて衆議のため日限を延し在江戸貌利太尼亞重官共事を承諾せり
一當今專ら英吉利軍艦の所置ニて諸人を騷動せしめ市中を襲ひ或ハ家屋物品を損害燒失せしむると實ならさる風評長崎市街に流布し衆人物品を纏ひ移轉するもの夥敷實ニ其費損失莫大なり此儀ニ付而は英吉利官吏殊之外斟酌し太だ心を傷めり當地之衆人英吉利人ニ敵對せさる間は英吉利之軍艦市街並近村たりとも襲へきの存意なき事ハ既ニ長崎鎭臺及ひ政府之士官ニ告知せり
一英吉利之軍艦當港に碇船之趣意ハ唯英吉利人の退方及ひ附屬之物品を保護し且ハ英人を襲へき惡黨を罰するが爲なり英國之掟として決而無罪之衆人を毀傷せす且老年兒女商人小前之者に對し鬪爭を爲さす因而江戸ニおゐて談判治定迄者衆人安堵して其職務を爲すへし自然兵及交事ニ至るとも英吉利人に給與する物品ニハ相當之價を納め一錢たりとも掠奪せす因て長崎衆人少しも恐怖せさる事を希ふ

千八百六十三年第五月十三日
文久三年三月二十五日

貌利太尼亞官吏

ショユスモリソン

一接戰を止るの旗章ニ付尊下之御翰了解いたし候我方ニおゐても右之爲ニハ眞白之旗章相用候就而は此儀ニ付心得違ひ等無之事ニ存候
一此後戰爭之儀承り候節は日本並英吉利船共平和ニ而當所に渡來いたし候ハヽ是又安全ニして逃去る樣双方より告知いたし候儀ニ付而は蒸氣船ニ者日本貳拾四時英四十八時ニ而急度充分ニ可有之拙者勘考致し候乍去出帆前船港を出るニ順風ニあらさるやも難計ニ付右告知之折港內ニ在ル帆前船者不殘不用之遲延無之勝手ニ退港いたし候事ニ取極度拙者存意ニ有之候
一卽今當港ニ滯在之英吉利軍艦並近日到着可致軍艦は實ニ貌利太尼亞從者を警衛之ため且ハ港內滯在中貌利太尼亞船に襲ものあらんと夫を防き候ためニ有之決而市中を襲ふ抔と申存意ニ者無之尙又貌利太尼亞從民及ひ其所持之物品ニ損害無之事ニ付尊下に御談合申上候
一此儀御信用被下市中人民の騷を御靜め有之度候
一右ニ付長崎ニ在る英吉利軍艦之趣意ハ警衛之ためなれハ英吉利商船安全に逃去ル以前ハ右軍艦退港いたし兼候段ハ容易相分可申候
一其後ニ至り平和之存意ニ而再渡する船ハ接戰を止るの旗章を是非相建可申候拜具

英　官　吏

長崎奉行尊下

一四日前神奈川港出帆仕候軍艦ニ而今十二日程日延相成候由申越候

但五月廿三日迄　日本四月六日

一大浦居留場を怪敷兵卒體之もの晝夜の差別なく徘徊いたし既ニ昨夜アントニーロウレロ宅ニ入込少々不法可致體も相見に右等之事より面倒相起候歟と甚心痛罷在候就而は大浦警衛之爲め乃至百人速ニ御送被下度最其内十人宛山の上なる家々に書夜差置度存候右番人に者頸肩亦者胸に目印有之度候

一右胡亂體之ものゝ爲め或る損害相生し候ハヽ奉行衆又は大君ニ而御償有之度候

一日本市中之人民驚動不致様英軍艦よりハ決而上陸致させ間敷且斯嚴重ニ致置候へハ市中を燒失物品を掠め或ハ殺戮抔致し候儀毛頭無之候間人心を安堵爲致度候

右之通英コンシュルモリソン申出候事

御留守居中

追而御一覽之後坊城家に可被成御返候以上

四月八日本藩は來十一日石清水行幸につき志水久馬助に社頭警衛の爲め出役を命す

〔文久三年京都諸扣〕

來ル十一日　石清水　行幸之節社頭御警衛被爲蒙　仰候付其方組共並志水亀之允儀右御警衛御人數として被差出候間得其意夫々可被達候尤御警衛場所之儀ニ付別紙御書付寫一通差遣候其外諸事御留守居可被承合候以上

四月八日

沼田勘解由
長岡監物

志水久馬助殿

（本朱書）
上下七人
内帶刀三人
小者三人

四月九日本藩廣吉半之允山田十郎外八名に石清水行幸の際加員隨身として出役を命す

〔文久三年京都諸扣〕

明後十一日　石清水社　行幸ニ付人數爲加員隨身被差出旨牧野備前守様より御達有之候依之御供殘御中小姓之内八人被差出候間被及其達名附並上下附早々可被相達候尤諸事御留守居承合候様可被申聞候以上

四月九日

沼田勘解由
長岡監物

鎌田軍之助殿

名附（御中小姓）

澤村吉之允　荒木太兵衛　菅市之允　野村源左衛門
山中新兵衛　萱野左一郎　笠慎之助　宇佐川勘兵衛

〔仝書〕

廣吉半之允
山田十郎

右者明後十一日　石清水行幸之節爲加員隨身被差出候條此段可被達候尤諸事御留守居承合候様との儀も可被申聞候以

文久三年

上

四月九日

志水久馬助殿　沼田勘解由　長岡監物

右者明後十一日　石清水　行幸之節爲加員隨身被差出候旨被及達候條爲帽子布衣受取方且揃所等之儀御中小姓之面々之別而不案内之儀ニ付得斗御申談萬事都合宜樣ニ可有御取計旨候以上

同　日　廣吉半之允　山田十郎

尙々社頭御警衛御小姓組御中小姓之内貳拾人被差出旨昨日及御達被置候處右之内ゟ隨身ニ被差出且病中等ゝ而御警衛之方ニ之九人被差出筈候條左樣可有御心得旨候以上　御中小姓之内　八人

京都御留守居衆中　長鹽庄兵衛

明後十一日　行幸ニ付隨身として被差出候面々正親町少將樣御對面可有之候間麻上下着明日巳刻差出候樣傳奏衆より御達有之候條左樣御心得御留守居承合候樣出役之面々ニ可被達候以上

四月九日　沼田勘解由　長岡監物

鍋田軍之助殿

右者明後十一日　行幸ニ付隨身として被差出候處正親町〃〃承合候樣可被達候以上　右同

同日　廣吉半之允　山田十郎

志水久馬助殿

口狀

行幸ニ付加隨身出仕之節其家々ニ明十日巳刻被差出候樣可申入旨被申付候尤右大將殿御始其家々御主人對面可有之由ニ御座候間麻上下御着用可然候以上

四月九日　兩傳奏　雜掌

四月九日在府本藩士太田黑權作は先月末より本月五日に至る幕英交渉の狀況に關する福澤諭吉の談話を報告す

文久三癸亥年〔尊攘錄探索書〕

亥四月九日

先月下旬ゟ去ル五日迄英國軍艦ニ御往復之書翰先頃之御懸合振ゟ大に反覆仕候由福澤諭吉申聞候其大意

生麥之一件等覇府之御政事向御不行屆ゝのゝ相心得此節軍艦差向右一條御尋問仕候儀全く英國絶域懸隔ニ而事情貫通せざる處ゟ差起候事ニ付此儀ゝ英國之重疊不研究ニ而御座候　將軍樣ニハ開國之御主意ニ被爲在英國抔御惡ゝ被成候儀ゝ無御座候得共今一等尊大なる大君帝王京都ニ被成御座將軍樣も右帝王之命令を奉して御政事御取行ひニ相成候故

何分將軍樣御手切ニ被成兼其上日本ハ封建之國ニ而薩土長之三藩など此度ハ直ニ帝王之命令を奉して專ら攘夷拒絶之建議有之候處ゟ定而生麥之一條ハ差起申たるニ而可有御座將軍樣右等之事件深く被遊御苦惱二百年來膺典之御舊例御取起御上洛被遊候事ハ全く開國之方幾重ニも御配慮被遊我等如き外國人を路傍ニ御覽被成間敷思召ニ而御當地も急ニ御發駕被遊御京着之上ハ上帝王下ハ諸侯迄日本一統一和之上外國之御接遇被遊御一定笘之處右之三藩攘夷拒絶之論判必多と申張候故將軍樣ニ茂甚御配慮被遊是非々々開國之方ニ御心配被遊度思召ニ而猶又御滯留も被仰出積ル處御取用無之時之將軍職御辭退被遊笘との事右之通御内輪御心配之儀乍奉存兵端を開可申抔とハ實ニ於英國不本意之至ニ付緩々御論判可被遊何時迄も御待可申上尤日本に軍艦差向候儀一旦外國にも相達置候事故此儘御返事も相待不申引取候而ハ何分ニも海内に對して英國之面目を失ひ候ニ相當申候間何時迄も御返事相待可申上候諸侯ハ封建とハ乍申帝王之命令を奉して將軍樣諸藩に御下知被遊諸藩之將軍樣之御下知ニ遵奉仕可申處將軍樣之御下知ニ三藩之違背仕候樣子ニ相見申候然之三藩之將軍樣御支配外之國と相見將軍樣還御之上ハ定而右之三藩に御下知筋違有之罪察討として御打手可被差向左候ハヽ英國ハ海手之方御受持可申上且又御先手被仰付候共聊差支無御座候間此儀之御聞置可被下候將又覇府に對して江戸燒拂抔申儀毛頭野心無御座候三藩にハ一當アテヽ本國に引拂之名ニもいたし度ものと申事御座候右之去ル五日迄書翰御往復之大意ニ而御座候翌六日小笠原圖書頭樣御着府後之日本語通用之英夷に直ニ御應接ニ而一切論吉抔ハ漏聞不仕由ニ御座候御國之大樹家ニ各別之御家ニ付今一際富國强兵之御手段申上候迄も無御座彌以鎮重ニして天下ニ御周旋被成萬一内變差起候節たり共他國之動搖ニ不拘鎮重ニ御所置被成候ハヽ薩長土如キ四國中國九州之諸藩も御國之鎮重ニ被推國境を越て他國を窺之手段付申間敷左候ヘハ全御國ハ三藩之抑と相成可申候間此儀之無屹度御留守衆へ極内々御目ニ懸可申と存居候處幸私儀面會いたし候付爲申聞候との事ニ付不圖書上仕候以上

文久三癸亥四月九日　大田黒權作

四月十日幕府我藩に男山社附近の警衛を命す

〔石清水社行幸一件〕

水野和泉守殿御差圖別紙壹通爲持御達申候以上

四月十日　細川越中守殿樣　岡部駿河守

別紙

男山社頭御固之儀御供人數ニ而取計候間登方表裏道并山下志水町八幡町共外廻り御警衛上杉彈正大弼申談可被相勤候事

四月

四月十一日車駕石清水に行幸あり一橋慶喜將軍家茂に代りて之に供奉す是日警衛として我藩兵百六十三人を出す

〔石清水社行幸一件〕

一四月十一日巳刻過

主上御發輦御先仙臺御家老片倉小十郎餘計之人數引連列中鐵炮切火繩闕白樣初堂上之御方々樣多分騎馬ニ而御供奉武家方ニハ一橋樣并御在京之諸侯方御供奉有之翌十二日申刻過　還幸被爲濟候此方樣ニ者社頭御警衛被仰付置候付御番頭をハしゑ御人數三百計被差出候公武御供奉之御方々いつ方樣茂御行粧　加茂御供奉之節より茂御連人多大將少將之堂上方に者隨從として諸家樣御家來被差出此方樣より者正親町少將樣に隨從として士分十人被差出候樣御達ニ付勤王家二人御中小姓より八人都合十人被差出候御列中ニ固として會津樣御人數長州樣御人數被差出候事

但此方樣より者爲御用辨御留守居方筆役藤本兎三郎并物書致出役候事

一公方様ニ者御不例ニ而當朝ニ至御供奉御斷ニ相成追而御參詣被爲在候事

文久三年
〔御國江戸往來狀扣〕

一去ル十一日　石清水　行幸之節社頭御警衛被爲蒙　仰置候付志水久馬助以下御人數士席八十八人輕輩七十五人都合六十三人被差出無滯相濟申候且又左之通

廣吉半之允
、　、　、　、
、　、　、　、

右同斷　行幸之節爲加員隨身御家來之内十人可被差出旨右之面々被差出旨及達無滯相勤候右付而賀川之品被下置旨傳奏衆方御達之趣書取爲別紙差進申候

沼田勘解由
長岡監物

一傳奏様幷御所司代様方御渡之御書付寫等六通差進申候

右之趣爲可申達如是御坐候則御請書一通差進申候以上

四月十六日

御家老
御中老　宛

〔京都美耶解〕

一此許追々ニ列候御歸邦ニ而一統靜ニ相成申候隨而格別錄上之筋茂無御座候内過十一日　主上石清水行幸折節大樹公へハ御不例ニ而御供奉無御座候へ共上下一萬餘茂可爲有之哉尾州長州之太子方ハ皆々御供也相組中へハ支配頭惣師ニ而八幡山御警衛共外様へも一山之上下背腹ニ懸間道或ハ詰り〳〵御持場御割渡ニ相成山上本社迄屈曲之石壇六七丁山中悉末社佛堂坊舍社師依高低之山道大小縱横ニ幽林ニ融通之便ゟり實圖ハ未タ其實を不盡廣大ハ金毘羅ニ勝レリ偖前日午刻方片手之御人數兵器等大炮小銃之士卒相携へ番上ハ持鎗主徒共調練之粧ニ而發足三條之大橋打渡り寺町を下り五條を西へ六條を南へ九條を打過東寺へ出候へ之御畿内第一之伽藍五重也突兀として雲中ニ聳へ上鳥羽下鳥羽を過行ケハ行向キ諸藩之衛士拜上之老若男女伊賀河内ハ更也凡二十里四方方我も〳〵と出懸候へハ前日方行幸筋ハ歩を入ル之地も無之位淀へ出レハ城郭白〳〵として御手も屆候へ共臂を伸ゑハ矢挾間ニ屆く位百貳拾五間之淀之太橋打渡り漸く市中を出放レ候へハ石清水ハ貳拾町余本社琴堂八角堂悉皆甍を並て見へ給ふ妻手ハ山崎天王山ハ山之尾崎昔松田堀等之爭地ハ平田方六丁位斜ニして古史之峻嶮ニ及セり古戰場を一見せゑやと存候へ共直ニ大川越ニて殘り多も速ニ被押八幡山下町家之下宿へ到着之比ハ七鼓過キ無程御焚出ハ屋根板函ニ詰候夕飯運候へハ器ハ度毎ニ捨ル也夥敷函も此方様計ニ而も出來候ものと被存申候扨張番之假屋山之脊腹二ケ所ニ御座候間人數引列レ半時交代ニ下宿方七八丁之處輪番假屋高張幕打廻シ大炮小銃嚴重ニ相備へ御當日ニも成しゐば御出輿曉七半之御供揃之處御延引ニ而淀之大渡邊ニ而及黃昏候故虛明松幾万と云數不知御行列二三里計錦繡誠ニ如星譬ニ無物　御所方當山迄四里之行程ニ候へ共多分町家々々之間々ハ茶店續キ之大道也然處武家之行列とハ格別ニ而馬飾之美麗を始メ公家武家歩卒ニ至迄裝束彼是言語聖頭之所及ニ無御座　王代之世ニ立返り候心地仕候　鳳輦過行く節之拜上之諸民拍手を打て神拜之如く拜伏ル音ト山野ニ響キ天神世界ニ照臨シ玉ふも斯やと被思私共へ茂譯ゐしニ忝さ〻涙ゐぼるゝ之心地ニ罷成申候容貌ハ德之符也と之聖言不空御有名之御方々様ハ御威儀彼是打見ニ相分申候闕白三奏之御方々様ハ或ハ輿且ハ騎馬其以下ハ都而御騎馬一橋公ハ御丈ケ並以下御品立ハ左程無之候へ共有威嚴テ御賢明之風顯レ申候堂上方ニ而第一と唱フ三條卿御二十四五歳と相見へ御長ケ彼是一橋公と御同品いつゑも樣御色ハ黑き方仙臺之片倉小十郎最早六十歳位大兵中肉大面優ニ意地〳〵として中々六ケ敷貌付天然元老職之風備り申候伏見ニて歸懸水

戸之大腹臣武田耕雲齋若黨二三十人引卒馬上ニ而歸候を見受候ニ惣髪長ケ高く痩地面相至而仁和温順自然ニ道德之風アリケ様之國柱之面々諸侯被召連候中ニも耕雲齋就中高名此節御上洛ハ日本興廢之一大議ニ付未タ右等之名臣ハ御殘ニ而御座候と相聞申候大評定ニハ右之武田長之吉川等も無說ニ而御座候由粟田口之宮當時御返俗中川宮と稱ス此御方見落候ハ殘念ニ而御座候其外堂上方も無殘程拜上仕候へ共略仕候此日暮前ニ罷歸申候御庇ニ而　行幸を現拜ヒ申事ハ如夢殊更一天之主上之御警衛を仕候事ハ武士之面目と一統太慶之處左之通風斗御達御座候而上下共酒五合宛干肴壹枚宛被下置十六日ニハ宿所ニ而盛宴後ハ老若共ニ惣而踊り出し餘程之賑合ニ而御座候誠ニ無存懸難有事柄ニ而餘り珍敷頂戴之品故登亭川尻へも驗計奉祝呈候事

一今度石清水　行幸之節社頭御警衛御人數并加員隨身として被差出候面々晝夜格別辛勞有之候ニ付明日御酒御肴被爲頂戴候旨ニ候條左様御心得志水亀之允通達御組支配方へ茂可有御達尤名付并上下附差出請取方有之筈ニ候條委細ハ御勘定方承合候様との儀可被有御申聞候以上

四月十五日

志水久馬助殿　　鍾田軍之助

四月十一日在府本藩用人松下龜記は書を在京重臣に贈りて將軍東歸懇請に關する幕閣の内情を通報す

〔文久二年（慶應元年迄）自筆御用狀扣〕

至密別紙を以申達候去ル五日夜ニ入俄ニ細川若狭守殿私小屋ニ御出被成御噂候者今日御達ニ付御登城之處御老中様方御始悉御登城ニ而御對談之筋被爲在候由右御趣意ハ今度將軍様御上洛御參内後者公武之御間御一和ニ被爲在候段者恐悦之御儀ニ御座候得共御滯京中御供奉御勤計ニ而其外何之御用茂不被爲在只々御滯京と迄被仰出候而者無趣意之御滯留ニ而益御衰微ニ相成且段々と御威光茂薄被爲成候間攘夷之譯を以還御願立ニ相成候得共中途ニ滯　禁廷迄者通り不申哉ニ而何分御願取不被爲出來既ニ將軍様御落涙ニ而一刻茂被遊還御度旨御沙汰茂被爲在候由右之次第ニ而御供之御役々より者猶更御手茂付不申御模様ニ付江戸表より擧而御願立ニ茂相成候ハヽ御受茂可被爲在歟之御見込ニ而御筆々御存寄被仰上候様御老中様より御打明御相談有之候由ニ而御同席中被仰談之上御存意之趣御書付を以同七日井上河内守様御初ニ御差出ニ相成候由右御書付爲御内々御見せ被成候との事ニ付其儘進達仕候何様將軍様只今之處ニ而者御人質之様ニ而徒ラニ御上京一句之被仰立茂不被爲出來由尤　主上と之御中者聊御疎意不被爲在候得共都而中途より御押付申上何茂諸侯同様之取扱ニ而御威光者次第ニ衰へ誠ニ奉恐入候御様子之由御座候右一件重役之面々たりとも御洩し被成間敷旨御老中様より被仰聞極内密之儀ニハ有之候得共御本家様之御事ニ付何分御心中ニ不被爲忍私迄堅口留御申聞有之候との事ニ御座候右御存意御書付之越茂一應御伺之上可被成御差出處急迫之事ニ付其儀御屆兼被成候之段も御申聞被成候右等之趣御序を以御内悉に御達可被下候以上

四月十一日　　松下龜記

長岡監物殿
沼田勘解由殿

尙々將軍様御上京之儀者眞之御合體ニ而人心一定之御基と竊ニ恐考仕居申候處本文御密話之通ニも御座候ハヽ乍恐太守様御周旋筋等猶更可被遊御配慮深々奉察上候事ニ御座候已上

四月十二日幕府は近來宿驛困窮の折柄なるを以て諸家々族及び家來妻子等其國邑に歸還する者に暫く宿驛人馬の使用を禁ずる旨を達す

〔御同席解寫並大目付様御廻狀寫〕

（四月十二日）

豐前守殿御渡

大　目　付に

道中筋宿々之儀近來御用旅行之向往反多共上諸色格別高直相成宿助郷困窮およひ候折柄諸家家旅家來妻子等國邑に引越ニ付宿々繼立差添ひ今般英國軍艦渡來御固御用等ニ而諸街道通行人馬遣相嵩宿助郷共疲弊いたし農業之暇更ニ無之相續方ニ拘り候趣相聞殊ニ農業繁多之時節ニ相成候間追而及沙汰候迄當分之内諸家家族家來之者妻子等領分知行所引越之儀諸街道共相對屈ニ而茂宿々繼人馬を以通行候儀見合自己之從者而已召連候樣可致候尤御用筋ハ勿論急用向ニ而家來等少人馬繼立通行候儀は不苦候

右之面々に可被相觸候

四　月

四月十二日本藩汽船購入費として金拾萬兩を支出する事を決す

（文久三年機密間日記）

陰　四　月　十　二　日

覺　　御勘定頭に

一金壹万六千六百六拾八兩

右者今度蒸氣船御買上付而御本方御限之内より右之金高御出方被仰付候條左樣可被相心得候以上

四　月　十　二　日

覺　　荒尾角兵衛
古閑作左衛門に

一金壹万六千六百六拾六兩

右同斷櫨方御銀之内より右之金高御出方被仰付候條御本方に可被引渡候以上

同　日

（仝　書）

覺　　岩佐合平
島田儀平次に

一金五万兩

右之今度蒸汽船御買上付而小物成方御銀之内より右之金高御出方被仰付候條御本方に可被引渡候以上

四　月　十　二　日

右三通之局々一人充呼出御勝手方より相渡候事

但小物成方御勘定所にて坊主參り申達櫨方にて坊主より紙面仕出候由

覺　　御郡方に

一金壹万六千六百六拾六兩

右同斷御郡方御銀之内より右之金高御出方被仰付候條御本方に可被引渡候以上

同　日

覺

今度蒸氣船御買上代金之儀追々莫太之御出方筋差湊候末於御本方之如何躰ニ茂御繰合出來兼候付左之通

一金五万兩

壹万六千六百六拾八兩　　御本方

壹万六千六百六拾六兩　御郡方
壹万六千六百六拾六兩　櫨　方

右之通割合出金被仰付段被及御達候樣有御座度奉存候事

三　月　　御勘定方　御奉行中

覺

一金五万兩

右之今度蒸氣船御買上代金之内小物成方ゟ出金被仰付度段被及御達候樣有御座度奉存候事

三　月　　御勘定方　御奉行中

四月十三日朝廷男山社加員隨從の輩を賞せらる

〔文久三年京都諸扣〕

右者此度隨從相勤候付着用之品被下置旨別帋之通傳奏衆より御達有之候條御書面之趣可被申渡候以上

四月十三日　　廣吉半之允
　　山田十郎

志水久馬助殿

沼田勘解由
長岡監物

猶々銘々より御禮申上ニ不及御留守居より引取御禮有之筈候條此段可被申聞候以上

右同斷　　宇佐川勘兵衛
同　日　　菅市之允
加々美健次郎殿　　野村源左衛門
尙々右同斷　　荒木太兵衛
四月十三日傳奏野宮宰相中將樣ゟ御留守居御呼出雜掌を以御口達ニ相成候　　澤村吉之允
書取寫　　山中新兵衛
此度隨從之輩苦勞太儀ニ被　思召候依之着用之品被下候事　　萱野左一郎
四月　　笠慎之助
同

四月十三日本藩時局に鑑みる所あり豫め相州京都天草及び領内海岸等各地の守備警衛に關する部署を定む

文久三年

〔文久三年機密間日記〕

口達書取

英國軍艦渡來付而之不穩唱有之天草島之儀兼而松平主殿頭樣御受持之者候得共御小藩之事ニ付御行屆有之間敷自然之節之急速ニ注進可有之候間此方樣より御援兵被差出候樣西國御郡代屋代增之助殿より御達有之候付其御覺悟有之事ニ候然處万一外夷と開兵端候ハヽ强チ西海而已ニ無之攝海東海ニ茂事起可申下地京都御警衛相州御受持之上右之通天草御手當も候へと追而之模樣次第臨機應變之儀之勿論ニ候得共御備組被差出樣之儀大略左之通

溝口藏人　組共

右者組之御番頭組共片手相州御備場ニ被差越置候付追而之模樣次第同所ニ可被差向候

坂崎忠左衛門　組共

右者組之御番頭組共片手其餘御鉄炮頭等茂京都ニ被差越置候付右同斷京都可被差登候

堀丹右衛門　組共

右者天草より注進次第同所ニ可被差越候

惣奉行手　三組

右者御領内海岸塲廣之事ニ付先つ御國守護ニ御備被置其内より模樣ニ應し爲二番手被差出儀も可有之候且又ヶ樣之時勢ニ相成候而者六御備ともニ事之深淺寛急前後之差別茂有之事ニ付出張場所若者相替儀も可有之又ハ一御備之内を分可被差出儀茂可有之候條左樣被相心得組々ニ茂爲心得可被示置候事

四月十三日

右書付御備頭且組持銘々一通充受取御奉行ニ茂寫相渡候事

四月十三日岡藩使を熊本に遣はして昨年小河一件以來本藩周旋の好意を謝し且つ目下の形勢につき厚く依頼する所あり

〔文久三年六月、竹田侯來介等一件〕

四月十三日岡藩ノ使者上下十九人來着同十八日應對有之

修理大夫樣ゟ　御家老中ニ被仰入候覺

時候御尋將先般　御兩殿樣御出京中ハ於京地度々御對顏厚く被仰合被進辱思召候

一昨年來御家來之儀ニ付度々以御使者御問合被進候處夫々厚く被申合辱御大慶思召候

一昨年關東ゟ　御用召御出府之處於大坂表御故障其後　御出京當春ニ至御參　内御暇御頂戴此節御歸城ニ相成候次第具ニ可申述

一當今之形勢ニ付司々之義別而厚く御依頼被成候付委敷　越中守樣へ被仰進候通惣而　御處置ニ御隨ひ御進退被成候思召ニ付萬端聊無腹臓御家來共被申談給候樣重々厚く可申述

一中川家自然長崎其外出勢之義も御座候節其時宜ニ寄兵粮拜借兵器運送等之義ニ付御頼被成候儀も可有御座厚御含御頼被成候

一於岡表茂鶴崎其外方角ニ御人數等御操出之節人馬其外相應之御用茂候ハヽ國力丈之義者精々御用辨承候樣被仰付置候

事

右壹通
御役所御客屋方ニ而之付札
兵粮之儀兼而引除置候儀者出來兼候へとも其節ニ至り候ハヽ下タ米又者雜穀等を以如何樣卒取計候樣可申談且兵器運送等之儀不差支樣取計可申旨
同
人馬立等之儀自然之節者彌以御世話ニ可相成萬端宜敷御賴置可申旨

〔仝　書〕

手控

薄暑之節御座候處越中守樣益御機嫌能被遊御歸京奉恐悅候猶又良之助樣益御機嫌能先般被遊御在着候旨重疊奉恐悅候隨而各樣益御堅勝被成御座珍重奉存候然ゝ昨年來弊藩動靜之儀ニ付每々奉煩貴慮候處彼是厚ク御配慮被下万事都合能且又於京部修理大夫樣ニ御兩殿樣御對顏厚御心添成被進右旁御都合克御在着ニ相成重疊難有次第奉存候此上世休變動茂難計何樣貴藩之御模樣ニ隨ひ覺悟仕度段ゝ兼而相願置候通之儀ニ御座候處諸事不行屆而已ゝ付別而無御腹臟御示談被下候樣自然相應之御用向茂御座候節ゝ被仰聞候樣相願申候此度小原隼太仲烏瀧右衛門御內使者ニ而被指立候ニ付委細兩人ニ申含候間宜敷御承知可被下候將又右兩人罷出候ニ付時候御尋問印迄在產之椎茸壹箱乍微少進上之仕候誠ニ表寸情候迄ニ御座候

四月十四日筑藩平野二郎書を松村大成父子に贈り先月末出牢徒罪方附を命せられ米十苞を給せらるゝに至りし旨を報す

〔松村文書〕

天朝盛熾ニ成行大慶此事ニ御座候御互之辛苦凡而昔話と相成申候繫獄中德兵衛御差越被下候よし辱奉存候三月晦出牢翌朔徒罪方附ニ被申付候追而ハ被申付候次第も有之由ニ而先米十苞賜り申候是偏ニ聖德之餘輝と難有奉感佩候比日ハ心喪之意ニ而亡妣之墓參往返二里餘之道日々脚ならし仕居申候全一年之內天下之模樣案外之事多いつれ茂愉快ニ而日々耳目ヲ悅しめ居申候最早逆磔之氣遣も無之安心仕候心事紙筆ニ盡しかた九御安心之爲草々不具

四月十四日　　平野二郎

松村大成樣
御賢息中樣
永鳥樣にもよろしく

國のためよれた米やとせみを壽てゝつくせしゐひはゐらは全にけり

尙々弊藩も漸震ひ立申候追々ハ彌益盛んゝ成行勢屹度見え申候

四月十五日幕府は水戸慶篤に贈りたる勅諚及ひ募命の趣を沿く各藩に示達す

〔尊攘錄皇武令、御同席觸寫並大目付樣御廻狀寫〕

豐前守殿御渡

大目付に

水戸中納言殿

爲關東守衛下向被仰出候付防禦筋之儀大樹目代之心得を以指揮可有之候先祖以來格別勤王之家柄先代之遺志致繼述國藩一致盡力防戰可奏夷狄掃攘之成功樣　御沙汰候事

右之通於京都被仰出候間爲心得萬石以上以下之面々に可被達候以上

四月

文久三年

大　目　付に　　水戸中納言殿

此度御滯京被仰出候付爲關東御守衛御下向且從　御所被仰出茂有之候事故外夷御所置振之儀御委任被成候間曲直を明ニし名義を正し御國威相立候樣御取計可有之旨被仰出候右ニ付而者尾張大納言殿幷老中に茂御相談有之候樣被仰出候右之通被仰出候間爲心得萬石以上以下之面々に可被達候

四　月

四月十五日本藩相州警備の任を解かれんことを幕府に申請す

〔相模國御備場御用一件、京都御警衛一件、尊攘錄御建白御國議、文久三年四月より十二月迄京都返達御用狀控〕

越中守儀帝都御警衛被仰付置火之番茂被仰付候處英船薩州に差向候風說有之領分海岸場廣薩海引續居一際嚴重之手當不致候而は難相成候處相州御備場御用茂被仰付置東西懸隔三方之手當重疊無心元相州御備者御用捨之儀先月中越中守より願書差出候處書面之趣ハ事實無餘儀次第ニ付願之通相州御備場御警衛御免被成下ニ而可有之候尤當節英國軍艦渡來申立之趣茂有之折柄ニ候間代りの者被仰付候迄ハ是迄之通其儘可被相勤候との御付札を以御差圖相成越中守儀ハ勿論諸合重役共ニ茂御尤奉敬承申候然處一昨十三日之夜國許より之早打飛脚到着仕天草表援兵之儀ニ付日田御郡代屋代增之助樣より國許家老共迄別紙之通御達ニ相成就而者急速援兵之手當仕候處下地自國を初當時帝都相州兩所之御守衛猶又天草援兵と申候而者全四箇所之受持と相成何分ニ茂國力兵力續候見込無之實以困窮之次第ニ御座候領內者勿論帝都其餘之御守衛孰れを重んし孰を輕んし可申樣茂無之候得共天草之儀者薩肥兩國ニ相迫り居自然彼等足溜ニ茂相成候而者薩肥而已ニ無之九州之患害相成九州之患害ハ則皇國之禍根ニ而實ニ要衝之土地ニ御座候處近日長崎薩州表異船渡來之風說專ニ而何時兵爭茂難計折柄右樣御達茂御座候付而ハ國中一統人氣茂勤立候樣子ニ而國許實ニ危急之場合ニ相成責而者相州一箇所ニ而茂至急ニ御解放不被仰付候而者一國之疲弊人心之動搖難取救勢ニ付國中擧而歎訴仕候樣子申越候間再應之願何分恐多奉存候得共右之事情厚御汲取被爲在相州御備御解放御急決之程幾重ニ茂奉願候此段御內意申上候樣越中守旅中より申付越候以上（本文申請の件は五月廿五日處分ありたり　＊四月二日附屋代增之助より家老長岡佐渡列へ與へたる書也）

四　月　十　五　日　　細川越中守家來　吉弘加左衛門

四月十六日藩主慶順鶴崎に着す

〔小笠原備前日錄〕

公以十六日有至鶴港之報（四月十八日の條に出づ）

四月十七日三條實美書を長岡護美に贈り守衛の選士は兵卒の階級を論せず廣く適材を選ばんことを要する旨を述ぶ

〔子爵長岡家文書〕

一東啓上候薄暑之節御座候處益御勇健欣喜之至存候爾來御無音御起居不相窺候條背本懷候先般御上京中者每々得拜眉喜悅之至存候其後睽別遺憾不少候御歸國後定而御配意之儀と御察申候當地形勢も追々御承知御座候半兎角紛雜切迫之事情苦慮仕居候扨御守衛兵御差出之儀ニ付急ニ申入度左ニ陳候右選士之儀石高ニ應し高割を以士分一人之割ニ有之候得共身分ニ拘り候而は人材之選擧十分ニも難行屆譯ニ候間士分以下之者たり共忠勇强幹之輩を御精選ニ相成族中士格之振を以上京中者士分同樣ニ相勤候樣被仰付候ハ、御都合宜御座候委細住江茂兵衛にも申聞候御承知可被下候猶急ニ御選擇之上速上京被仰付候樣存候猶貴君御厚慮可給候尙心事委曲盡注申上度存慮ニ有之候處何分多忙混雜ニ罷在不得間隙候茂以乍不本意不能飜縷候先者要用申入度且時候御見舞旁呈寸楮候匆卒相認亂筆麁札偏海容可被下候猶期後音之

時候也

四月十七日　　三條中納言

長岡良之助殿

梧右

二伸時下折角御自衛專要存候從家族共宜申上候樣申出候今便差急不能委曲候猶後便可申入候不備

〔小笠原備前日錄〕

四月廿四日　陰　后少雨

朝召予、三條卿之書至、選士之事、當亙士分以下、京地旅中、欲以士格遇之旨也、有其報之處置如何之旨、退而謀同列、以明日乞伺旨退、

四月七日幕府拾萬石以上の諸藩をして交互京都守衛の任に當らしむ

〔御同席觸寫大目付樣御廻狀並御書扣〕

大目付に

今般拾萬石以上之面々京都爲御警衛在京被仰付候間當亥年之儀ハ別紙之割合ニ相心得國邑より出京御守衛向嚴重可被取計候尤交代之積可被心得候

右之趣拾萬石以上之面々に可被相觸候

四月

別紙

京都御警衛

當亥年

四月より六月迄

上杉彈正大弼
安藝守名代
松平紀伊守
奥平大膳大夫

七月より九月迄

加賀中納言
南部美濃守
松平備前守

十月より十二月迄

立花飛驒守
丹羽左京大夫
戸田采女正

四月十七日幕府出羽庄内藩主酒井繁之丞に新徵組統率を命す

〔京都美耶解〕

（從相州加々尾來狀の一節）

一諸浪人者當時之江戸之樣ニ參居間ニハ狼藉躰之致方茂有之候由ニ而先日諸家被仰付浪人狩御座候（此節諸家之御人數總而甲冑之由）間浪人共數人召捕評定所へ出御吟味相成候由之處何レ茂攘夷之儀盡忠報國之爲精力を盡可申存念有之候由ニ而皆々御赦ニ相成御扶助等被下置猶左之通浪人頭之樣被仰付候

出羽庄内　酒井繁之丞

御辭令

浪人組之事

新徵組之儀ハ其方へ御委任被遊候間諸事取締方之外共可被心得候鵜殿鳩翁松平上總介中條金之助へ可被相談候

文久三年